
全ては国のため

鷹売りのタカさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全ては国のため

【Nコード】

N9683Y

【作者名】

鷹売りのタカさん

【あらすじ】

これは、紀元前からこの国を守り続けてきた一族と、たまたまその一族の代々使用人長兼親衛隊隊長をつとめてきた一族に転生した高校生の物語である。

プロローグ〈日本〉（前書き）

はじめまして、鷹売りのタカさんです。

この物語では主人公が無双する予定です。

そういったものが好きな方も好きでない方も

暇つぶし程度に見ていただけたらうれしいです。

プロローグ〜日本〜

「おぎゃ あああああ！おぎゃ あああああ！」

ここは日本のとある武家屋敷。そこで、新たなる命が産声を上げていた。

「当主！お産まりました！」

屋敷の一室に、男の低く大きな声が響く。その視線の先には、細身で薄く髭を生やした男が腰に一振りの刀を携え、悠然と佇んでいた。

「おお、ついに産まれたか……。案内しろ」

「はっ、こちらです」

男は、当主と呼ばれた男を連れ、その部屋を後にした。

長い廊下の奥にある部屋から赤子の泣き声が聞こえる。男は、当主と呼ばれた男と共にその部屋の中に入っていった。

部屋の中には長く綺麗な黒髪が目立つ、大和撫子よ呼ぶに相応そうな女性と、その周りを忙しそうに駆け回る使用人の姿があった。女性の顔からは出産による疲労が感じられた。そして、その女性の胸に赤子が一人抱かれていた。

「奥方様。当主をお連れいたしました」

「ご苦労様」

奥方様と呼ばれた女性は、男に労いの言葉をかけると先ほどの当主と呼ばれた男の方を向いて言った。

「御國（みくに）さん、赤ちゃんです。私とあなたの子供ですよ。」

「ああ、よくやった椿姫（つばき）、でかしたぞ。さてそれでは早速・・・」

そう言うと、御國は腰に携えた刀を抜き、未だに泣き止まぬ赤子に刀の柄を握らせた。すると今まで泣き止まなかった赤子が段々とおとなしくなっていく、1分後には笑顔になっていた。

「ふふ、流石は御國さんの子供ですね」

「うむ、私も産まれたときは全然泣き止まなくて使用人一同困っていたが、父上が今と同じようにこの『日ノ本』を握らせると、瞬く間に泣き止んだそうだ。父上の話によれば私だけでなく、我が『日本（ひのもと）』の家系の者は皆、この方法で泣き止んだらしい。この子も立派な守護者の血を引いているということだろう」

「ええ、この子もあなたのように、最強の名に恥じぬ強さを秘めていると思います」

「うむ」

そう言つと御國は立ち上がり、先程から後ろで待機していた男の方を向いて言った。

「暁文（あきふみ）、宴の準備をしろ。我が子の誕生だ。盛大に祝うぞ」

「その前に当主、大事なことを忘れていきます」

「む？何かあつたか？」

「ふふ、名前ですよ。御國さん」

椿姫の一言で、御國は「あっ！」と大きな声を上げて、天を仰ぎ叫んだ。

「不覚！この『日本御國』、人生で最大の失態だ！」

「反省は後にしてください。それより早くこの子に名前を」

「おっと、そうだった。男の子だからなあ、強そうな名前にしてやりたいな」

御國は頭を抱えながら呻いた。そのまましばらくすると、突然笑顔になり言った。

「決めた！この子の名前は『帝（みかど）』だ！」

『日本帝』だ！」

今宵、建国以来、歴史の裏ですつとこの国を守り続けてきた最強の家系に、新たなる名前が刻まれた。

プロローグ〜平行世界〜（前書き）

二話目です。

なるべく早く更新していこうと思います。

プロローグ〈平行世界〉

日本家で、新たな命の誕生が祝われているころ、別の平行世界では一つの命が終わりを迎えようとしていた。

*

多くの人が歩いている広い歩道の中に、やたら足取りの軽い青年がいた。お世辞にも顔はいいとは言えず、中肉中背で眼鏡をかけたその青年が顔をだらしなくにやつかせている。そしてその手には、紺色のビニール袋が握られていた。

「ふふふ、ふははははは、ついに手に入れたぞ！なのはのゲームを！このときをどれほど待ったか……。俺がなのはに出会ってからこのこれまでの道程は険しいものだった、がしかしすべてはこの時のためにあったとも言えよう。どれ、もう一度あの神々しいオーラを放つパッケージを拝見しようか」

そう言う青年からは酷く禍々しい狂気に似た気配が放たれていて、周囲の人々はドン引きだった。

青年は紺色のビニール袋からゲームのパッケージを取り出した。

そのパッケージには『魔法少女リリカルなのは A's』と描かれていて、数人の男女がコスプレのような服を着て、各々ポーズを決めていた。

一般的に見ればオタクと呼ばれるような方々が所持しているであろう物を、多くの人々が闊歩する天下の往来で、顔をにやつかせながらまじまじと見つめていれば、その後どうなるかは予想がつくだろう。

10秒もしないうちに、その青年の半径1メートル圏内に近づくものはいなくなつた。

「ふん、所詮は否定するしか脳のない衆愚か。受け入れることこそが世界平和に繋がる大いなる一歩だとなぜ気づかない。他人のやりかたに口出しする気はないが、個人の趣味を否定するのは無礼であり、一種の精神攻撃だ。嘆かわしい……。まあ、アニメやラノベに好き嫌い言ってる俺が言ったところで、説得力など微塵もないがな、ふひひ」

そんなことをブツブツと呟いているうちに、小さな横断歩道に着いた。

「さあ、家までの距離はもう目と鼻の先。戦う準備はできている。隣の公園で子供が無邪気に戯れているな。頼むから飛び出しなんて

まねはするなよ。二次創作なんかじゃここで子供が飛び出してそれを助けた俺オワタ、なんて展開がありきたりなんだから。でも待てよ、それで俺が死んで二次創作よろしく神なる存在が出てきてなのは世界にでも転生できたとしたら、それはとても素晴らしいことなのではないか？最高に俺得な世界がそこにはあるんじゃないか？原作キャラとキャツキャウふふできたらと思うと桃色な妄想が我が脳を駆け巡るぞ！・・・まあ、実際にそんなことがあるはずがないがな。俺はこの後無事家に着き、なのはのゲームを誰にも邪魔されずにプレイする。子供たちは戯れ、夕刻に母親の呼ぶ声を合図に各々帰路に着く。信号待ちの車は交通ルールを守り、何のトラブルもなくそれぞれの目的地にたどり着く。その何が不満だって言うのさ。俺も無事、子供たちも無事、それでいいじゃない。俺のため、君たちのためにも、そこで無邪気に戯れていたまへ、チミツ子たちよ

そして信号が赤から青に変わる。青年は、よりいつそう顔をにやつかせ、待ち受けるであろう栄光へのスタートラインを切った。

そこにゴールラインは存在しないことを知らずに……。

青年が一步踏み出したと同時に道路に転がるボール。
それを取ろうと道路に飛び出した少年。

歩行者の信号が青に変わっているにも関わらず突っ込んできた大型
車。

「ふざけるなよクソがああああああッッッッッッ！！！！！！」

まさか自身の理想が一つも叶わずに水泡に帰す様は拍手すら送りがたくなる。現実と反対の出来事を予知する能力が備わっているのではないかと思うほどだ。そんなことを考えると同時に青年は、子供を救うため、自身も道路に飛び出した。

勘違いしてはいけない、青年はちっぽけな正義感で飛び出したのではないということ。親を泣かせ、兄弟を泣かせ、その涙すらどこ吹く風と無視し続け、怠惰な日々を送ってきた青年。将来に希望があり、無邪気に公園で同年代の子達と腕白に駆け回る少年。

「どつちが社会的に得かを考えたら、無論後者だろうがああああ！！！！！！」

青年は我が身可愛さに将来有望な若い命が散るのを眺めているほど墮ちてはいない。損得勘定はわきまえた上で出した結論である。

青年は全速力で少年に近づき、全力で突き飛ばし、歩道へと戻した。青年の目の前には既に死が迫っていた。

（最後に何か一言言いたいなあ。せつかくの駄目生活にこんなにかっこいい形で終止符が打たれるなんて俺の主義に反する。駄目人間に相応しい一言を残し、潔く今生の別れを告げようではないか）

「なのは最高！二次元最高！二一ト万歳！No Job、No
su つぐはあ！」

言わせるよ。

*

ちっばけな未練を残して、一つの命は終わりを迎えた。

プロローグ〜平行世界〜 後編（前書き）

前回の続きになります。

プロローグ〜平行世界〜 後編

目が覚めるとそこは真っ白な空間だった。横には白、後ろも白、下にも白、上にも白、前に白髭のおじいさん、とにかく自分の周囲の全てが白色だった。

「なんだここは・・・、あたり一面真っ白って・・・、頭がおかしくなりそうな場所だ。いつたいどこだここは・・・なんて王道な台詞を吐くと思ったら大間違いさあ！自分が死んだって事くらい理解できてるよ！今だって鮮明にあの時の状況を思い出せるね。ボールを拾おうとしたチミツ子が道路に飛び出したと思ったら信号無視した車がドーンって来てバーンってなってアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！思い出すだけでも反吐がでるよあの車ア！なんだよ！最後の一言ぐらい全部言わせるよ！おかげで綺麗にあさるばできるはずだった現世に中途半端な未練残しちゃったってアアアアアアアアアアアアアアアアア！！ゲームやってねえええええええええ！！！！ふざけるなよあの車ア！！！！1つだけでなく2つも未練残したまま死んじゃったじゃねえかあああああああああああ！！！！！！！！！！」

「あの何か知らんけど、落ち着いてもらえんか？」

現世に残した恨みの全てを吐き出していると、目の前には長い白髭と埃一つない真っ白なローブが目立つおじいさんがいた。

「落ち着いたか？」

「あ、ああ、落ち着くどころか永眠するところだったよ」

「既に永眠しておるわ。さて、落ち着いたところで本題に入ろうか。まずこの場所についてじゃが、説明が必要か？」

「否、あなたの言動とかから大体察しはついている。俗に言う死後の世界とかいうやつだろ？」

「死後の世界とはちょっと違うが似たような物じゃ。とにかく、そこまで分かっているなら話が早い。お主、転生というものを知っておるか？」

「無論、二次創作なんかじゃ王道的なものだからな」

「うむ、ではお主、転生する気はないか？」

「この会話の流れ的にその質問が来ることは予想していた、がしかしその質問に答える前に聞きたいことがある。何故そんな話を俺に持ちかける？」

「どっぴいっごとじゃ？」

「二次創作なんかじゃ転生の話を持ちかけるのは神、もしくはそれに近い何かだ。そして転生させようとする理由の1つとして有名なものが、神側のミスで主人公が死に、その罪滅ぼしに転生させるといふものだ」

おじいさんは長い白髭を弄りながら首を傾げた。

「確かにワシは一般的に神と呼ばれる存在じゃ。しかし話がよく掴めんのじゃが……」

「つまりだ……あなたが俺を間接的に殺したヤツかって聞いてんだよおおお……！！！！！！」

そう言うと神は、バツが悪そうに俯いた。

「む……そのとおりじゃ。此度のお主んお主の死はこちら側のミスによるものじゃ。すまなかった」

そう言うと神は、地面に頭を叩きつける勢いで土下座した。

「なっ・・・おいおい待てよ。そこまでする事はないぜ。俺は真実が知れたかったただけだ、あんたに恨みはないよ。恨みがあるのはあくまであの車さ。それに神とは言え、見た目お年寄りにこんな土下座させてる俺ってすごい悪いヤツみたいじゃないか。頭を上げておくれよ。それとさっきの転生の話についてだが、返事はOKだ」

「む、何故じゃ？」

「転生なんて俺からすれば願ってもないことだ。死んで終わりだと思ってたが、人生も中々捨てた物じゃないな。ところで転生とは、そのまま俺が生きていた世界に生まれ変わるのか？」

「それはどちらでも構わんぞ。お望みとあらばお主の好きなゲームやアニメの世界に生まれ変わる事だって可能じゃ。何か希望があるのか？」

「無論、『魔法少女リリカルなのは』の世界を希望する。ちなみに神から何か能力をもらえるとというのは、実際のところあるのか？」

「然り、本来ならありえんのじゃが、君の場合はワシのミスが原因じゃ。罪滅ぼしと言っては何じゃが、なんでも言ってくれ。大体のことは叶えてしんぜよう」

「では、容姿の改善を要求する。具体的には、銀髪、黒と赤のオツ

ドアイ、身体能力チート、魔力チート、これだけあれば十分だ」

「銀髪に黒と赤の目とは、バランスが悪くないかの？」

「いいんだよ、できるか？」

「当たり前じゃ」

そう言つて神は俺に向けて手をかざした。すると、俺の中からとてもない力が溢れてくるのを感じた。神が俺に鏡を渡してきたので、それを受け取り見てみた。鏡には銀髪で黒と赤のオッドアイを持ったイケメンが映っていた。

「なんと！？これが俺か！素晴らしい。ありがとう神よ」

「満足したかの？生まれ変わるのじゃから、その容姿にたどり着くのは随分先になるがの」

「問題ない。ちなみに原作キャラと同じ年になるように時期を合わせてくれ」

「よからう。では始めるぞ。達者でな」

その一言を聞いた瞬間、突如浮遊感が俺を襲った。

「へえ、本当にこうやって送り出されるのか。貴重な体験をした」

その一言を最後に、俺は意識を失った。

*

「……………行っただか」

真っ白な空間の中、神は呟いた。

「中々面白い若造じゃったが、自身の憧れのキャラクターを前に、己が欲望を抑えていられるかの。まあ、送った先があの一族のいるところじゃ。数年後にはとんでもなく真面目なヤツになってるかもしれないな。いやしかし、ちょうど子室に恵まれなかったと嘆いておったからな、良いことをした気分じゃ」

真っ白な空間には、神の独り言が響いていた。

*

（暗い……どこだここは……酷く窮屈だ……
確か俺は……神に、なのはの世界に送られて……ん？光？
ちようどいい、あそこから出られそうだ……）

一刻も速く、この窮屈な場所から出たいと思い、目の前の光を求めて手を動かそうとした。しかし思うように動かず焦っていると、自然と押し出される感じがした。その瞬間、喉に違和感を感じ、あまりにも不快だったため全力で叫んだ。

「おぎゃあああああああ！」

「う、産まれた！ 産まれましたよ、当主！」

「ああ、よかったな、暁文」

「ああ、子宝に恵まれず妻共々諦めていたが、神が私たちに恵みをくださった」

「よせよ暁文。そんな柄じゃないだろ」

そんな声が聞こえて目を開けると、俺を抱いて優しくそうに微笑んでいる女性と、泣いて跪いている先ほど暁文と呼ばれていた男と、腰に刀を携えた当主と呼ばれていた男と、その男の隣に6、7才くらいの男の子がいた。当主と呼ばれていた男が、自身の隣にいる男の子に言った。

「ほら帝、これから長い間一緒に過ごす事になるんだ。挨拶しなさい」

「はい、父上」

そして帝と呼ばれた男の子が、ゆっくりと俺の方に歩いてきて、俺の顔を覗き込みながら言った。

「はじめまして、僕は帝、日本帝だよ。これからよろしく。」

『流（ながれ）』

これが、俺こと『大和流』と『日本帝』のファーストコンタクトであつた。

プロローグ〜平行世界〜 後編（後書き）

やっとプロローグを終わりました。

しばらくは原作キャラは出ません。

早いうちに出そうとは思っています。

一話（前書き）

先に言っておきます。

主人公は帝です。

あくまで流はサブです。

でも流視点で話を進めることは多いです。

一話

拝啓 前世の両親、兄弟、そして名も知らぬ同胞たち

俺は無事、『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生することができました。

何故なら俺が今住んでいるところが、海鳴市から少し離れた所にある山の上の武家屋敷だからです。

この世界での父と母はとてもいい人です。

時に厳しく、時に優しくと言った素晴らしい方々です。

さて、重要なのはここからです。

これからこの世界に転生するであろう方々への警告でもあります。

俺の両親が使用人長、父に関しては親衛隊隊長としても仕えている方々は・・・

チートです。

*

俺が生まれてから七ヶ月が過ぎたころ、両親が日本家の現当主である日本御國さんと、その息子である日本帝君の修行を見学させようと言い出しました。まだまだ赤子である自分に修行風景を見せたところで理解はできないかもしれませんが、印象には残るだろうと言うことです。いずれは俺も習うものらしいので、正しいイメージを幼い内から植えつけておこうと言うことでした。既にお二方は中庭

で修行の準備を終えたということなので、両親は俺を連れて中庭へと向かいました。

「さて、今日の修行は見学者が1人いる。今日の目的の1つとして、お前に長い間仕えることになる流君に我が一族の流派、『日本流武術』の正しいイメージを頭に植えつけるというものがある。これは後の日本家のため、大和家のため、流君の成長のため、何よりお前のためでもあるからな、気合入れろよ、帝」

「はい、父上」

帝は短く返事を返すと、たくさんの丸太が円状に立ててある中の中心に立ち、腰を低くして、抜刀の構えを取った。

「よし、ではまず準備運動だ。『刀閃圈』を丸太を全て斬ることができる分だけ広げ、『陽炎』で全て斬れ」

「はい、父上」

それから帝は先ほどの抜刀の構えを崩さぬまま、目を瞑った。その状態で三秒ほどいると、帝はいきなり目を開き

「『陽炎』」

とたった一言呟いた。丸太に変化もなく、帝が動いた様子もない。思わず俺は首を傾げてしまった。しかし御國さんが丸太に近寄りノックをするように丸太を小突いた瞬間

全ての丸太がさらさらと粉になって風に吹かれて飛んでいってしまった。

俺は思わず自分の目を疑った。丸太に何かしたようにも見えず、目に見えて分かることといえば帝が一言呟いただけだったからだ。

「流石だな。6才でここまで斬ることができるとは……俺でも6才じゃ木片にするまでしかできなかったぞ」

「……斬ったのかよ。全然見えなかった。御國さんや父はど
うやら見えていたようで、帝の腕前に感心していた。いやいやおか

しくね？6才だぜ？ましてや俺は身体能力チートだぜ？その俺が見えないってどういうことだよ。神のヤツ、さては嘘をついたな。チート能力を正しく受け取っていれば見えているはずだ。なぜなら俺は最強なのだから。

なんて幻想は三年で打ち破られた。

3才の俺の身体能力は大人もびっくりなものだった。50メートル走るのに5秒もかからなかった。ベンチプレスで世界記録を破るのは非常に容易だった。

・・・・・・・・チートだな。

俺は思った。どこの世界に3才で世界記録を破るヤツがいようか。これをチートと言わずして何と言う。そして、これほどの偉業を成し遂げた時の父の言葉ほど驚愕したものはない。

「すごいな、流。まるで当主や帝様みたいだよ」

このとき俺は悟った。俺がおかしいのではなく彼奴等がおかしいのだと。神が与えたチートを上回るチートな一族がなのは世界にあつたなんて……。全転生者諸君に言おう、高町士郎氏や恭也氏に勝てたとしても喜ぶのは早いぞ。勝負の世界には常に上には上がいる。心しておけ。

「流、修行の時間だよ。父上の所に行こう」

「あ、はい、今行きます帝様」

*

僕には弟みたいなのがいる。名前は流と言って、僕が6才のときに当家の使用人長である大和夫妻にできた子だ。僕が言えた事ではないが、この子は1才の時から力が強く、僕も父上も暁文もびっくりにしたほどだ。日本家にもっとも近い家系でもある大和家の人間は、産まれたときから一般人よりも卓越した身体能力を有しているのは周知の事実である。しかしそれは決して日本の人間には及ばなかつたが、流は大和の中でも特に身体能力が高い。それでも日本には及ばなかつたがこれは異例である。何より流には日本家、大和家

の両家の人間が代々持つている漆黒の髪と瞳がない。一般的な家系ではさほど気にすることではないが、我々にとっては大問題である。一時期由緒ある家系に異邦人の血を入れたのかと騒ぎになりかけたほどだ。しかし僕はそれは違うと思った。何かは分からないが、流の髪や瞳、そして身体能力に違和感を感じるのだ。あれが本当の流ではないように。まるで誰かがあの容姿と能力を与えたみたいに……。馬鹿馬鹿しい、たとえなんであれ、あれが流であることに変わりはない。もし彼が僕に何か隠し事をしているのなら、いつか話してくれる日が来るのを待っただけだ。とりあえず今は雑念は捨て、修行に集中しなければ。

「流、修行の時間だよ。父上の所に行こう」

一話（後書き）

今回は固有名詞を多く出したので、近々設定を出そうと思っています。

次こそは原作キャラを出せるようにがんばります。

ご意見、ご感想等がございましたらどうぞよろしくお願ひします。

設定〜日本家〜(前書き)

主人公達のことじゃなくて、主人公達の家についてです。

設定〜日本家〜

【日本（ひのもと）家】

紀元前から、日本を守り続けてきた一族。何代続いているかは当の本人達も覚えていない。

代々卓越した身体能力を有しており、水の上を走ったり、電車と同じかそれ以上の速さで走ることもでき、自由の女神くらいの大きさの物を殴って破壊したり、地面からはずして振り回すこともできる。気や魔力などは一切宿していない。

日本の血統の者が基本的に当主となり、その際に初代から受け継がれている刀、『日ノ本』を託される。刃こぼれしない、錆びない、折れない、曲がらない、そして何でも斬れるというふざけたスペックの刀であるが、普通の刀に比べて非常に重いため、一般人では持つことすら叶わない。当主となった日本の血統の者は、常にこの刀を持ち歩かなければならない。

日本家というのはその一族を指す言葉でもあり、1つの組織としてのの名称でもある。実際に日本の血を引いている者は数人で、それ以外のほとんどは普通の人間である。

知名度は低く、各国の主要人物、もしくは高名な武家の人間、もしくは裏の世界でも屈指の実力者達が、その強さと危険性を熟知して

いる。ちなみに高町士郎、恭也は日本家の存在自体は知っているが、海鳴市の近くに拠点があるということは知らない。時空管理局では、地球出身でそれなりに地位が高い者（ギル・グレアムなど）、最高評議会だけが、その存在を知っている。

基本的に表舞台には出てこず、テロリストが日本に密入国しテロを起こそうとする、または異世界から次元犯罪者が逃げ込んできて、それが日本に害を及ぼそうとするなど、日本の成長において不要な存在、もしくは未知の技術や能力を使い、国に混乱をもたらそうとする存在を秘密裏に処断する。今までの戦争や犯罪に介入しなかったのは、日本の成長において必要と判断したか、原因の一端に日本が関わっていたというのが理由である。

海鳴市から少し離れた所にある山の上に建てた武家屋敷が拠点である。屋敷には総勢114もの人間が寝泊りしており、その全員が無類の強さを誇っている（ただし、日本の血統の者には劣る）。中には改心して、日本のために尽力を尽くしている次元犯罪者もいる。無論、魔導師もいる。

表向きには、山にでかい屋敷を構えているヤクザとして知られており、そういう意味では知名度は高い。ヤクザと言っても、ボランティア活動に積極的に参加したり、地域の活動にもよく顔を出しているため、人々に嫌な印象は持たれていない。

中には見習いの子供も多く、各々が修行に励んでいる。ちなみに全員学校にも通っており、日本家のことは知られないようにしている。

日本家の血統の一族達が表舞台に出るときは名前を『日野』と名乗っている。ちなみヤクザとして活動するときには『日野一家』と名乗っている。

全員が日本至上主義であり、座右の銘は『お国のためなら親だつて斬る』である。日本が終わるときは自分達の終わるときでもあると考えている。

【大和家】

日本家に代々使用人長兼親衛隊隊長兼付き人として仕えている一族である。日本の血統と同じくらい長く続いている一族であり、日本家と同じく何代続いているかは当の本人達も覚えていない。

代々卓越した身体能力を有しているが、日本の血統には及ばない。しかしそれでも一般人からすれば化物同然である。

大和家自体は全く以って無名だが、日本家にはもう一つヤバイ奴等がいると言う風に知られている。

武術の修行のほかに、使用人としての修行などもやっており、単純な労力だけなら日本家随一である。

大和家自体は無名なため、学校などの場所では、普通に大和と名乗っている。しかしヤクザとして活動するときは『日野一家』と名乗っている。

【日ノ本】

初代から日本の血統の者に受け継がれている刀。製法や使われている金属は謎で、二度と作ることはできないと言われている。

日本の血統の者が当主となる際に受け継がれる刀で、当主になってからは、この刀を常に持ち歩かなければならない。

刃こぼれしない、錆びない、折れない、曲がらない、そして何でも斬れるというふざけたスペックの刀であるが、普通の刀に比べて非常に重いため、一般人では持つことすら叶わない。魔導師との実験の結果、魔法も斬ることができると判明している。

【構成】

当主

親衛隊隊長

直属親衛隊

軍団長

日本（ひのもと）軍

見習い

使用人長

使用人

総勢 114人

設定〱日本家〱(後書き)

次は主人公達の技についてです。

設定〱日本流武術〱（前書き）

主人公達の技についてです。

設定（日本流武術）

【日本流武術】

『日本流剣術』、『日本流拳術』、『日本流撃術』の三つで構成されており、『三けん術』と呼ばれている。

【日本流剣術】

日本家の人間のほとんどが使っているもので、距離が存在しない剣術と言われている。

・技

『刀閃圏』

自分の感覚を広げる技。

圏内にある物質や生物を感知することができる。HUNTER×HUNTERの円とほとんど一緒だが、気や魔力やオーラを展開するのではなく、感覚を広げるだけなので、同じく刀閃圏が使える者以外は圏内にいることが理解できない。感覚が鋭い者、気配に敏感な者なら、誰かに見られてる程度に感じる。優れたものは一瞬で何キロメートルも広げることができる。地上で使えばドーム状になり、空中で使えば球状になる。

『陽炎』

自分の周囲を一瞬で何千何万と斬る抜刀術。
優れたものは一瞬で粉になるまで斬ることができる。この技の射程距離は、自分が展開できる刀閃圏の範囲に比例しており、半径1キロメートルの刀閃圏を展開すれば、1キロメートル分の圏内全てを斬ることができる。しかし広げれば広げるほど、斬る回数は減る。逆に狭めれば狭めるほど多く斬ることができる。刀閃圏を展開した上でこの技を使うことで、狙いが正確になり、圏内にあるものを選んで斬ることができる。一人前になれば、刀閃圏の展開から陽炎まで手順を0.1秒で行うことができる。回避不可能。

『烈風』

一回斬るだけの抜刀術。
しかし全技中最速・最長で、優れたものは10キロメートル以上斬ることができる。日本の血統の者は、その気になれば地球を斬ることができると言われている。欠点は、直線上にあるものを全て斬ってしまうため、気を付けなければならない。この技に刀閃圏の展開の距離は関係ない。あまりにも速過ぎるため、目で追うことは不可能。斬られた者は斬られたことにすら気付かない。

『無限突』

自分の出せる最高の速さで相手に近づき、一瞬で数えるのが不可能なくらい突く。
喰らった相手は肉片すら残らない。剣術で唯一の近距離技。回避不可能。

e t c . . .

【日本流拳術】

日本家のほとんどはある程度習得している。メインとして使っているのはほんの一部。近距離専用。これをメインで使用しているものは身体能力がとて高い。

・技

『百目』

自分の周囲360度の全てを見るできる。

刀閃圏はあくまで感知する技で、見えているわけではないので、正確さは刀閃圏を上回る。周囲360度の全ての光景が視覚情報として頭に入ってくるため、脳にとっても負担がかかる。慣れていないものは一分ももたない。慣れた者は1時間以上使用することができる。

『韋駄天』

相手との距離を一瞬で詰める歩法。

もはや瞬間移動。優れたものは方向転換が可能。空中では使用不可、水上では可、水中でも可能だが、移動距離は短くなる。

『啄木鳥』

狙った箇所には、一瞬で何千何万もの突きを入れる。見ているほうは、凄く速さで一回殴った様にしか見えない。狙われた箇所は確実に破壊される。欠点は至近距離でしか使えないという事。韋駄天から啄木鳥というのが基本的な使い方。

『墮天』

威力だけなら全技中最強。全力で相手に踵落とし。使い方を次第では大陸が割れる。

『咆哮』

全力で叫ぶ。威力は無類。ティガレックスのバインドボイスなんぞとは比べ物にならない。直に食らえば鼓膜どころか魂までお釈迦になる。欠点は周囲の者全てを巻き込んでしまうことと、単純にうるさい。

e t c . . .

【日本流堅術】

日本家のほぼ全員が習得している。

空中、地上、水中などあらゆる環境での防御を可能としている。攻撃の全てを自分が受け止めると言う考えから作られたので、攻撃をいなすということはない。正しい手順を踏み、正しく構えることによつて絶大な防御力を発揮する。その防御力は、最低でも城壁3枚分に匹敵する。

設定〱日本流武術〱（後書き）

今のところはこれだけです。後々増えていきます。
主人公達の設定はもう少し後に出します。

一話

先に言っておこう。

俺は今怒っている。

どのくらい怒っているかと言うと、金が無くて発売してから約一ヶ月間貯金してようやく買ったゲームを、プレイする前に友人が重要な伏線についてネタバレしてしまったのと同じくらい怒っている。

あの時はマジで彼奴を殺すところだった……。おのれ中村ア……。
・ッ！！！

おっといかん、クールダウンクールダウン……。ようやく落ち着いていた。さて、落ち着いたところで、何故俺が怒っているかについて説明しよう。アレは昨日のことだった……。

～回想～

海鳴市のはずれの山にある大きな屋敷。そこには怒鳴り声が響いていた。

「流！修行をサボるんじゃない！何度言ったら分かるんだ」

怒鳴っているのは我が父、大和暁文である。

「サボっているんじゃない！俺は修行以上にやるべきことがある！それを優先しているだけだ！俺からすれば、それを阻止する父さんこそが悪である！」

「流・・・貴様ア・・・親に向かってなんて口を聞くんだ！もういい、好きにしろ！」

そう言うと父さんは踵を返し、大きな足音を立てながら去っていった。

ちなみに俺の言う修行以上に優先すべきこととは、原作キャラに会いに行くことである。俺は今4歳だ。原作キャラと年齢を合わせてもらっている俺が4歳と言うことは、つまり今、主人公である高町なのはは、海鳴市の何処かの公園で一人、さみしさを感じているはずなのである。転生者たる俺は、この重要なフラグを回収しておくなければならないわけだ。と言うわけで俺は、少し前から修行をサボって屋敷を出ては海鳴市の公園をいくつか回り、なのはを探しているわけである。

ちなみに未だ見つけれない。なのはよ、何処に……。

そしてそのためには数ある障害を乗り越えなければいけないのである。父さんはその内の一つだ。そして最大の障害はこの次だ。

おっと、早速やってきたようだ。

「流、さつき暁文が酷く憤慨していたが……何かあったのかい？」

そう、我が主、日本帝様である。どうもこの人には頭が上がらない。

「なんでもありませんよ。では俺はやることがあるんで」

「ああ、今日も修行を休むのかい？なるほど、だから暁文があれほど怒っていたのか。確かに流は最近休みすぎだ。日本家の一員である以上、修行は絶対である。君は確かに、我等日本の血統に近い身体能力をもっているが、それでも修行を休んで習得できるほど日本流武術は甘くない。それにも関わらず、修行を休んでまで優先することってなんだい？」

「……いくら帝様でもそれは言えません」

欲望のためですなんて言ったら粉にされそうだから……。

「・・・そうか、あまり深くは詮索しない。だが、暁文にあまり心配をかけるな。奴の気持ちも考えて行動するんだ」

「はいはい、分かっていますよ・・・」

前世でも言われ続けた言葉だ。今更言われたってどうと言うことはない。でも嫌な気分だ。

そして俺は屋敷から出て海鳴市の様々な公園に行き、なのはを探すのだった。そして見つけれずに、無気力感を味わいながら屋敷に帰るのであった。

チクシヨー・・・。

～回想終了～

こんなことがあったわけだ、何度もなくそう・・・何処にいるんだよ・・・。まさかとは思うが、既に他の転生者がいて、そいつが連れて行ったのか！・・・ありえる・・・次は他の転生者も想定に

入れて探そう。ふふふ、絶対に彼女は渡さんぞ。

だがそのためには父さんや帝様が邪魔だ……。修行修行ってうるさいし。なのはの世界でそこまでして強くなる必要はねえよ。ようは魔力が高けりや大体どうにかなるんだから。それに神からもらった身体能力もある。原作に介入するにしてもこの二つがあれば問題ないよ。しかし、帝様の言葉はどうも頭に残る……。確かに父さんには悪いと思っっているけど、それでも俺は『大和流』である以前に一人の転生者だ。ならばこんなことで諦めるわけにはいかない。全ては原作キャラのためだ。

さて、そろそろ行くか。今日は父さんも帝様も現れない、ツイてるぜ。

そう思い、俺は屋敷を出て散策に向かうのだった。

*

「……………今日も行ったか」

屋敷の門から出て行く流を見て、帝は呟いた。

「一体何をしてるんだろうな。気にはなるが、僕には関係の無いことだろう。しかし、流にあ言ったが、僕自身も結構心配だ・・・流の目からは使命を帯びているような輝きの中に、欲望による濁りを感じる。堕ちてしまわねばいいが・・・。たとえ流とさえど、我等が国に仇なすようであればその時は斬らねばならない。そうならないことを願おう」

『お国のためなら親だって斬る』

自分達の座右の銘を小さく呟きながら、帝は屋敷の中に戻っていった。

二話（後書き）

まずは謝罪です。すみません。

テスト期間でした故、投稿が随分遅れてしまいました。
これからは更新速度を上げていこうと思います。

さて、次はようやく原作キャラを出せると思います。

三話（前書き）

小学生編だよ。

やっと原作キャラが出せるよ。

三話

1年生になったら

1年生になったら

友達100人できるかな

ひやくにゃんで食べたいな

富士山の上でおにぎりを

パッくん パッくん パッくんと

いつも思うんだが、この歌って矛盾あるよな。友達百人できるのはいいが、百人でおにぎり食うんだろ？ 一人何処行ったんだよ。百一人で食うなら許す、百人と食うでもOKだ。だが百人で食うたら一人、もしくは自分がはぶられてるじゃあないか。1年生の内から随分とエグい歌を歌わせるぜ。

「そうは思わないかい？　なのはちゃん」

「それはあんまりだと思いの・・・」

*

俺こと大和流は今、私立聖祥大附属小学校にいます。

さあ、今日から小学１年生だ。人生で二度も小学１年生を味わうというのはなんとも言えぬ気分だ。だが俺がなのはと良い関係を築き、将来への布石とするための貴重なシーズンだ、抜かりは許されない。

そう、結局俺は小学生になるまで見つけれなかったのだ。故に、ここが勝負の時なのだ！

「流、ハンカチは持ったか？　ティッシュは？　お前は日本家の一員なんだ。くれぐれも、先生や他の子達に迷惑かけないようにな」

「分かってるよ、父さん」

相変わらず心配性な父だ。流石の俺もその辺のマナーは弁えてるつもりだ。

.....

そんなこんなで滞りなく入学式は終わった。

入学式が終わり、多くの生徒は親と別れ、各々のクラスを確認しに行っている。

さて、俺も行くか。クラス発表も重要なイベントだ。

「じゃあ父さん、俺もそろそろ行くから」

「ああ、気をつけてな。さっきも言ったが」

「はいはい、分かってるよ。先生や他の子達に迷惑かけるな、だろ？」

「うむ、分かっているならいいんだ。じゃあ私は行くからな」

「ああ、バイバイ」

そして父さんは去っていった。
走って。

恐ろしく速い移動。俺でなきゃ見逃しちゃうね。

「全く、秘匿はどうしただよ、秘匿は」

父さんに少し呆れながら、俺はクラス発表の掲示板に向かった。

.....

ふふふ、ふふふふふふ、ヤバイ・・・口元がにやけるのを抑えられない。それも仕方の無いことだ。なぜならば

「次は、高町なのはちゃん。自己紹介してね」

「高町なのはです。一年間よろしくお願いします」

そう言って高町なのはは礼儀正しく頭を下げた。

「あら、丁寧ね。よろしくね、なのはちゃん」

先生の間延びした声が教室に響く。そしてなのはは先生に返事を返すと、席に座った。

そう、主人公『高町なのは』と一緒にクラスになれたのである。教室をよく見るとアリサやすずかもいる。これを喜ばずしてなんとする！ 転生したことにより、彼女達は三次元で俺の目に映っている。だがそれでも素晴らしい可愛さだ。声も田村ゆかり殿の声と一緒に感動せずにはいらぬ。

「じゃあ次は大和流くん。自己紹介してね」

「ふふ、ふふふふ、ふふふふふふ」

「あの、流くん？ おい、流くん。やまとながれくん」

「ふふ、ハッ！ す、すいません。大和流です、皆さん、一年間よろしく願います」

いかんいかん、喜びのあまり注意力が散漫になっていた。しかしこの程度問題ない。少し焦ったが、丁寧に挨拶、そして俺のできる中で最高のスマイルを忘れない。前世でやるうものならクラス中からブーイングが飛びかねないが、今の俺は銀髪に黒と赤のオッドアイのイケメン。黄色い声援こそあれど、ブーイングは飛ばまい。

クラス中の人間がサッと俺から顔を背ける。ふむ、照れているのだろう、愛いヤツらめ。

「あ、ありがとう流くん。よ、よろしくね」

「はい」

そして俺は席に座る。スタートダッシュとしては申し分ないはずだ。問題はこれからだ。どうやら俺が最後だったようで、自己紹介が終わった後は、先生が明日についての予定を伝え、解散を宣言した。

さて、行くか。

「高町さん。はじめまして、俺は大和流。よろしくね」

俺が声をかけると、なのはは驚いた顔で俺を見ている。それもそうか、いきなりイケメンが話しかけようものなら誰だって驚くのも道理。

「は、はじめましてなの。私は高町なのは、よろしくなの」

「なのはちゃんか、いい名前だね、こちらこそよろしく」

なのはは引きつった笑みを浮かべている。反応に迷っているのだろう。

とりあえずファーストコンタクトは上々。

さあ、張り切って行こうか。

*

私は高町なのは。

今日から私立聖祥大附属小学校の1年生なの。

入学式も終わり、私の名前が書いてあったクラスに向かい、先生が来るのを待つ。そして先生が来て自己紹介をした。優しい先生でよかったの。

そして生徒の自己紹介が始まった。

「まずは、アリサ・バニングスちゃん。自己紹介してね」

「アリサ・バニングスよ。よろしく願いますわ」

な、なんだか気の強そうな女の子なの。

そして自己紹介は進み、ついに私の番がやってきた。

「次は、高町なのはちゃん。自己紹介してね」

「高町なのはです。一年間よろしく願います」

丁寧にお辞儀をすることは忘れないの。こういうのは第一印象が大事ってテレビで言ってたの。

「あら、丁寧ね。よろしくね、なのはちゃん」

ほめられたの。なんだか嬉しい気分なの。

そう思い私は席に座る。

「次は、月村すずかちゃん。自己紹介お願いね」

「は、はい。月村すずかです。よ、よろしく願いします」

最初のアリサちゃんって子とは正反対という感じなの。なんだか仲良くなれそうな気がするの。

そして自己紹介はさらに進み、とうとう最後になった。

あの子さっきからずっと俯いてるの。具合悪いのかな。

「じゃあ次は大和流くん。自己紹介してね」

「ふふ、ふふふふ、ふふふふふふ」

「あの、流くん？ おゝい、流くん。やゝまゝとゝなゝがゝれゝくゝん」

「ふふ、ハツ！ す、すいません。大和流です、皆さん、一年間よろしく願います」

そうやって、大和くんが微笑んだ。な、なんだか寒気がするの。とつても変わった笑顔なの。个性的といつかなんとといつか……。

クラスの生徒全員が同じ感想を抱いたようで、皆何とも言えない表情になっていた。先生も同じなようで、引きつった笑みを浮かべながらよろしくと言い、大和くんはそれを返事を返して席に座った。その後は順調に進み、先生が明日の予定を伝えたところで解散となった。

私も帰ろうと思い、帰り支度を始める。事件はそのとき起こったの。

「高町さん。はじめまして、俺は大和流。よろしくね」

いきなり声をかけられ顔を上げると、そこにはさっきとつても変わった笑みをした大和君がいたの。と、とりあえず、挨拶をされた以上返事をしないのはマナー違反なの。

「は、はじめましてなの。私は高町なのは、よろしくなの」

「なのはちゃんか、いい名前だね、こちらこそよろしく」

そういつてまたあの奇妙な微笑みを浮かべる。直で喰らうと改めて感じるの・・・この威力を、この得たいの知れぬ恐怖を。精一杯私も微笑を返す。

なんだか不安になってきたの・・・。

三話（後書き）

見ていてイラッとした方もいるのではないのでしょうか。私もです。

私なりに精一杯ウザイキャラを考えたつもりです。

まさか私自身にもダメージが来るとは想定外・・・

なんという諸刃ブレード・・・恐ろしや・・・

けいおんの映画を見に行ってきました。

素晴らしかったです。

あずにゃん派の私としては非常に喜ばしいものでした。

四話（前書き）

今回は全部帝視点の話です。
長めだと思えます。

四話

日本帝の朝は早い。

朝5時には起床し、道着に着替えて道場に向かい刀を何万回も振る。そしてその後、日本当主直属親衛隊の面々や親衛隊長である暁文、そして当主である御國と手合わせをし。それが終われば居間に向かい使用人によって用意されている朝食を食し、制服に着替えてから荷物の準備をする。その全てを終えると、帝は玄関に向かい靴を履く。

「行つてきます」

「ああ、行つてこい」

御國の返事を聞くと帝は屋敷の門へと向かい、それを開く前に鞆の中身を確認する。

ポケットティッシュは持った、ハンカチも持った、教科書の忘れ物もなし、弁当も持った、刀も持った。

なにやら物騒な物が一つ紛れ込んでいるが竹刀袋の中にすっかり入れているので見かけ上問題はない。

忘れ物がないことを確認すると帝は門を開いた。屋敷の門から山の

ふもとまでは一直線の長い階段があり、多くの者はそこを通るのであるうと思われる。しかし帝は階段を使わず、その横の森へと入っていった。森の中は無数に木が生えており、足場も無造作に生えた草や木の根のせいで酷く不安定だ。普通の人では歩くことすら難しかろう。

ところがどっこい、日本帝は普通の人ではなかったのだ。

「さてと、行くか」

それを合図に帝は森の中を走り出した。

「そつえば流がまだ寝てたけど大丈夫かな。毎度毎度遅刻ギリギリで校舎に入るからな。今度は遅刻しないといいけど」

暢気に独り言を言っではいるが出している速さは一般人では目で追うことすら難しい速さで走っている。それでいて無数に生えている木々には一切ぶつからず、雑草や木の根に躓くこともない。

「さて、そろそろ温まってきたし、本気で行こうかな」

その瞬間森から帝の姿は消えた。しかし実際に消えたのではない。消えたと思つた瞬間には帝は既に山のふもとの町を歩いていた。

『韋駄天』の連続使用、加えて方向転換。並みの使い手ではこれをやるのに10年はかかる高等技術である。そして帝はそれを荒れた森の中と言う最悪のフィールドでやってのけたのだ。そしてそれにより瞬間移動とも思える速さで山を駆け降りたのだ。

「少し……遅かつたかな、まだまだ修行不足だな。精進精進」

そう言っているが、既に帝に勝る人類はこの世界にはいないだろう。現当主である御國なら分らないが彼は年を取り、少なからず衰えている。だが帝はまだ12歳で、まだまだ成長期である。10年後にはどうなっているか想像もつかない。ただ言えることは、帝が全次元世界の生物界の頂点に君臨する日は、そう遠くないということである。

鼻歌を歌いながら、帝は私立聖祥大附属小学校に向かって歩いていた。

学校の代表たる自分が遅刻するなどと言うことは許されぬ。自身の乱れは学校の風紀の乱れにもつながり、他の生徒、特に新入生に示しが見つからない。

そう、彼は私立聖祥大附属小学校6年生であり、生徒会長なのである。

そしてこれは、そんな彼の優雅な朝的一幕である。

.....

7時30分、帝は生徒会室にて書類に目を通していた。生徒会室と言っても小学生が使うものなので、簡単な椅子と長机程度の備品しか置いていない。しかし、帝が目を通してある書類の内容は小学生のレベルを超えていた。年間行事の一覧表とそれぞれの予算の上限、体育祭の競技の種目とそれに伴う材料費、文化祭での各クラスに振り分けられる費用の分配、特別イベントの考案書とその際の予想金額など小学生に任せるにはいささか早いのではないかと思わせる書類の束がそこにあった。小学生ではありえないような聡明さを発揮し、圧倒的人望で生徒会長の座をもぎ取った帝ならこの程度問題ないだろうという教師陣の判断であった。実際に帝はこの程度全く問題はない。しかし他の役員はまさしく小学生と言った感じで、帝が見ている書類の内容などサッパリである。よって生徒会の仕事のほとんどは帝が一人でこなしているのである。

全ての仕事を終えたころには、ほとんどの生徒が既に登校している時刻になっていた。帝は解散を告げ、役員がそれぞれの教室に向かうのを見届けると自身も教室に向かった。

.....

帝が教室に入ると、やはりほとんどの生徒が既に教室にいた。そして帝が教室に入るのを確認してからこちらに向かってくる少女がいた。

「おはようございます、帝様」

この娘の名前は『夏野鈴』。以前この国で秘密裏に奴隷市が開かれたときにそこを日本家が襲撃した。そこで商品としていたのがこの鈴だったようで日本家は彼女を保護した。その後調べた結果によれば、彼女は身寄りがおらず一人で彷徨っていたところを奴隷商人に捕まったということだった。そしてそれを聞いた使用人の『夏野扇』が鈴を養子として引き取ると言った。それから鈴は使用人見習いとして日本家に住んでいる。義父となった扇のもとで立派な使用人になるための修行を頑張っているのだ。

「おはよう、鈴。学校ではできればその呼び方は控えてくれないか」

「では日野様とお呼びします」

「いや、そもそも様付けをやめろと言っているんだ。いつそ呼び捨てでも構わん」

「それはできません。主君を呼び捨てなど、使用人にあるまじき無礼です」

「では主君の命に背くのは無礼でないと申すか」

「ぐっ……で、では、み、帝くんと……」

「うむ、それでよい。恥ずかしいのは分かるが、顔を赤らめるな。いらぬ誤解が立つぞ」

「わ、私は別に気にしません。……むしろその方が……」

「何か言ったかい？」

「い、いえ何も……」

「そうかい。ところで鈴、雪政はまだ来てないのかい？」

「はい、私が屋敷を出るころにはまだ修行をしてらしたので、時間的にはそろそろ来るころかと」

そのとき凄い勢いで教室のドアが開いた。そして一人の少年が教室に飛び込んできた。

「ギリギリセーフ！間に合ったぜ……」

少年は一息つくところらに向かって歩いてきた。

「ちいっす、帝さん。今日もお早いつすね」

「おはよう、雪政。鈴から聞いたよ、修行をしていたそうじゃないか。熱心なのはいいことだけど、こうしてギリギリに来るのは感心しないな」

「……相変わらず手厳しいっす……」

彼の名前は『冬海雪政』。日本家当主直属親衛隊の一人『冬海雪崩』

の息子である。彼のような人物は日本家では珍しい。良いヤツではあるのだが少し軽薄でちょっと口が悪い、それでいて鞆や制服に何やらチャラチャラとしたアクセサリーを着けている。ぶっちゃけて言うと彼はチャラいのだ。しかし修行のときの彼はまるで別人のようである。見かけによらず、見習いの中では一番の努力家で一番腕が立つ。その実力のおかげで、他の見習いや日本軍の人達から次期直属親衛隊所属間違いなしと言われていくくらいである。彼の父である雪崩は、彼の口調や格好を目の当たりにしたときに何とか更正させようとしていたらしいが、今となってはこの性格こそが彼の強さの秘訣だと判断し見守ることにしている。

学校での彼の姿は非常に目立っていて、当初は他の生徒に不良だと勘違いされ敬遠されがちだったが、彼の人懐っこい性格や、いろんな分野の話に対応できるほどの情報を駆使し、わずか一月ほどで広まりつつあった「冬海雪政は不良」という噂を払拭し「冬海雪政は親しみやすい良いヤツ」という噂を新たに広めた。その結果、彼のコミュニティは学年全土に及び、今では彼の事を知らない人の方が珍しいと言われている。おまけに彼は日本家での修行の成果もあって頭が良い上にスポーツ万能　もちろん手加減している　だ。だからよく地元の野球やサッカーのクラブチームの試合に助っ人として呼ばれている。僕も一度彼が助っ人として出たサッカーチームの試合の応援に行ったことがある。

確か・・・・・・・・翠屋JFCだったかな。

「ところで帝さん。今度またサッカーの助っ人に呼ばれてるんですけど、帝さんも参加してみないっすか？」

「サッカーと言うと、翠屋JFCだったか？ 以前応援に行った」

「それっす。今度は応援じゃなくて選手として出てみないっすか？ 前に応援に来たから知ってると思いますけど、あのチームの監督、高町士郎さんは翠屋って喫茶店の店主をやってましてね、試合に勝つと飯奢ってくれるんですよ。あの喫茶店はこの界隈じゃそこそこの有名でしてね。コーヒーや料理が絶品なんすよ。特にシュークリームが最高で」

「その辺りは知ってるよ。前に僕もご馳走になったからね。しかしなんでまた僕を誘うんだい？」

「いやあ、帝さん最近根詰めすぎてると思うんすよ。次期当主になる身なんすからもつと体を労わるべきっす。だからここは一つ、サッカーでもやってみるのはどうっすか？ ってことですよ」

「なるほどね。鈴はどう思う？」

「確かに帝様は最近碌に休んでません。普通の同年代の子達と戯れるのもたまにはいいと思います」

「ふむ、なるほどな。ところで鈴、また様付けだよ」

「し、失礼しました。み、帝くん」

「え、何？ あの鈴が帝くん？ これは珍しいものを見たぜ！ レアだ、レア！ おまけに顔を赤らめながら言うなんて破壊力抜群のオプションまで付いてくるなんて・・・扇さん、泣いて喜ぶぜ」

「なっ！ こ、これは帝様、い、いえ帝くんにそうしろと言われたからであって決して私は」

「それなら俺と同じで帝さん、もしくは日野さんでいいじゃねえか。言わずとも分かるぜ。帝くんって呼んでみたかったんだろ？ いやあ、可愛いところがあるねえ。扇さん、あんたの娘は立派に女の子してるよ」

「・・・・・・・・・・殺しますよ?」

「っひ・・・・・・・・す、すいませんっした」

「二人とも、その辺にしておけ。そろそろチャイムが鳴るぞ。雪政、この件は放課後に話そう」

「了解っす」

その後すぐに授業開始のチャイムが鳴った。

.....

「で、結局どうするんすか？ 帝さん」

「うーん・・・実はまだ迷ってるんだよね」

僕は雪政と共に帰りながら朝の件について話し合っていた。ちなみに鈴は使用人の修行がいつもより早く始まるということなので一足先に屋敷に帰った。

「なにをそんなに迷ってるんすか？ 帝さん、サッカー嫌いでしたっけ？」

「いや、そういうことじゃないんだ。ただ僕はあまりあの喫茶店に行くべきでないと思うんだ」

「なんでっすか？」

「雪政、前に僕も翠屋に行つたとき店員はどんな人だった？」

「確か、監督の高町士郎さんとその息子の……恭也、さんだつたかな？ それと士郎さんの奥さんだつたす。あ、もしかして帝さん、あの人達が苦手なんすか？」

「いや、苦手なのはむしろ向こうが思つてることじゃないかな。その士郎さんと恭也さんは何かの剣術をやっている。あの歩き方、両手のマメ……二刀流……そして高町という名……不破……小太刀二刀御神流」

「なっ、それって確か、随分前にテロ組織によつて滅ぼされた一族つすよね。てことはあの人たちはその生き残りっすか？ 一回しか見たことがないのでよくそこまで分かりましたね」

「刀閃圈と百目で感じ取つた情報と父上に聞いた話を統合して導いたものだよ。でも間違いはないと思う」

「え？ 刀閃圈展開してたんすか？ 全く気づかなかつたす」

「気づかれないようにやったからね。直属親衛隊くらいしか気づけなかったと思うよ。あの土郎って人も気づいてみたいけど」

「うわぁ、あの監督実は相当な使い手だったんすね。俺の目もまだまだ節穴っすね。でも何で向こうが帝さんを苦手って思うんすか？」

「あの人は僕の刀に気づいてた。そのせいか僕がいる間はずっとこちらを警戒してた。今言ったけど、土郎さんに関しては僕の刀閃圏も感知してた。雪政は自分の部屋に刀持ちながら結界みたいなの周囲に張ってるヤツが来たらどう思う？」

「殺そうって思います」

「……………そうだね、君はそういう奴だったね」

頼もしいというか血の気が多いというか……………いい奴なんだがな……………。

「まあ、普通は苦手と思うわけだ。もしかしたら僕の正体に気がついてるかもしれない」

「だとしたらまずいっすね」

「そつだろつ？ だから僕はなるべく彼らに接触はしない方がいいと思うんだ」

「そつつすか………。残念っすけど仕方ないっす」

「それに最近、あの家の次女……高町なのはだつたかな……。最近流とよく一緒にいるらしい。今の流ではボロを出しかねない。だから極力学校では流にも接触しないようにしてるんだ」

「流つすか。俺、アイツ気にいらないうつす。修行はサボるし、皆に迷惑はかけるし。俺、前に見ましたよ。暁文さんが泣きながら自棄酒してるの。その原因である流は、そんなこと気にも留めずに遊び呆けてやがる」

「言いすぎだよ。でも確かに流は不真面目すぎるね。でも僕は、いつかアイツは変わってくれると信じている」

「無駄っすよ。あんな奴」

最近では、よく放課後に屋敷とは反対の方にある山で何かをしているらしい。一体何をやっているのやら。

その後、僕は雪政と他愛のない話をしながら屋敷に帰った。

四話（後書き）

執筆したのにミスって消しちゃう、なんてことが3回もあったので更新が遅れました。

次からは気をつけようと思います。

五話（前書き）

なのは見たのは随分前だから魔法について間違いないかが怖いで
す。

五話

日本家の屋敷の一室。窓から差す光だけが部屋を照らしている。そこで二人の男が向かい合っていた。片方の男は胡坐をかいて話を聞いている。もう片方の男は姿勢を正し、胡坐をかいている男に話しかけていた。

「それは確かか？」

胡坐をかいている男は日本帝。この日本家の次期当主の座についている男である。

「ああ、間違いない。魔力反応があったから俺自身が出向いてこの目で見てきたんだ。どこで魔法について知ったんだか俺には分かりませんが」

姿勢を正しながら帝に話しかけていたのは、日本家当主直属親衛隊の一人、『ジョネス・バートン』。かつて時空管理局に追われていた次元犯罪者である。

「そうか、ご苦労だった。下がっていいよ」

「御意」

そう言うとジヨネスの姿は部屋から消えた。それを見届け、帝は立ち上がり窓から外を見る。外には修行中の見習いの子供達と日本軍兵、そしてそれを指導している軍団長がいる。帝はそれを眺めながら顎に手を当て、先程ジヨネスから聞いた話について考えていた。

「流がここから反対のにある山で魔法の練習か……。確かに流は珍しいくらい高い魔力を持っている。今まで修行をサボっていたのはそのためか？ いやしかし流があこの山に通い始めたのはつい最近。アイツは一体何を考えているんだ」

自分が弟のように見ている少年の奇行に帝は頭を抱えた。

解せぬ。

何を思っ魔法の練習なんぞしているのか。それを優先して本来するべき修行を怠る理由は。最近クラスメートの女の子に迷惑をかけているという情報もある。

考えれば考えるほどキリがなく溢れてくる疑問の数々。その全ての解答を導き出すのが面倒になって、帝は一度考えるのをやめた。

「学校に行くか」

そして荷物の準備をして、帝は学校に行った。

*

目覚ましの音が鳴り響く。それでも布団に眠る男は目覚めない。既に時計の針は8時を示している。小学生に限らず、全ての学生が遅刻と思い慌てるような時刻になっていた。

「おい、流ー。遅刻するぞー。そろそろ起きろー」

「ん……ふわあ……もう朝か……ん？ は、8時！？ ち、遅刻でやあああああ！」

慌てて寝巻きを脱ぎ、着替える。10秒で制服に着替えると、流は居間に向かった。

「おはよう流。早く飯を食べ。また遅刻してしまっぞ」

「父さん！　そう思うなら起こしてくれてもいいじゃん！」

「起こしたさ。『おーい、流ー。遅刻するぞー。そろそろ起きろー』
つてな」

「やる気が感じられないよ！　ホントに起こす気あるの！？」

「黙れ！　入学式の次の日から同じ事を言って、もう二学期も終わるといふのに貴様はいつまでたっても変わらん！　俺は目覚まし時計じゃないんだ！　文句を言う前に自分で早く起きる努力をしろ！」

「ぐっ……それを言われては言い返せない……。あ、そうだ。
父さん、俺の鞆は？」

「それもいつも通りだよ。帝様が準備してここにおいていてくれたよ。もう慣れたって言ってたよ。嘆かわしい……。後でお礼言っておけよ」

「分かってるって。じゃ、行ってきます」

「おい、飯は？」

「今日は抜いていくよ」

「おいおい、昼までもたんぞ」

「やばかったら早弁でもするぞ」

「そうか、行ってらっしゃい」

ダッシュで屋敷を出て階段を何段か飛ばしながら降りる。

時刻はまだ走ればなんとかなる。

さあ、しまっていこう。

.....

「で、結局間に合わなかったというわけだ」

「自業自得じゃない。いい気味よ」

「ア、アリサちゃん、言いすぎだよ。でも大和くんももっとはやく起きるべきだよ」

今は一年生の二学期がそろそろ終わるころ。すでになのははアリサとすずかのイベントを終え、友達になっているのだ。無論なのはと仲が良い俺も、アリサやすずかと仲が良いのだ。

「アリサちゃんは相変わらず手厳しいな。それとすずかちゃん、そろそろ名前で呼んでくれよ」

「え、えと、その、な、慣れなくて」

「別に呼ばなくていいわよ、すずか。あたしからすればアリサちゃんって呼ぶのやめて欲しいんだけど」

「ん？ 照れてるのかな？ 可愛いねえ。別に照れなくてもいいよ」

「照れてなんかないわよ！ 単純にあんたに呼んで欲しくないだけよ！ 虫唾が走るわ」

ほう、シンデレレとはこういうものか。中々可愛いな。

「あそこまで言われて尚も笑ってられる大和くんもすごいね、なのはちゃん」

「じゃはは………。ちょっと怖いのに……」

なのはとすずかが何やらこそこそと話している。むう、気になるじゃないか。

「おいおい、二人で何をこそこそと喋ってるんだい？ 俺も混ぜてくれよ」

「な、なんでもないよ。ねっ、なのはちゃん」

「う、うん。そうなの」

この必死な隠し方、さては俺について話していたな。アリサと仲良くしていてヤキモチでも焼いてくれたのかな。ふふふ、可愛いなあ。

「なにニヤニヤしてんのよ。気持ち悪いわね」

「そうツンツンするなよ。そろそろデレちゃいなって」

「デレないわよ！ …… ああ、もう嫌 ……」

む、アリサが酷く落ち込んでいる。どこか間違えたかな。いかんいかん、もっとフレンドリーに接していかねばな。

「大丈夫か？ 随分と顔色が悪いぞ」

「そう思っならあっち行ってよ ……」

「わ、分かった」

どういうことだ。予定と違うぞ。どこかでフラグを立て間違えたか？ 否、何も問題はない。とりあえずアリサからは一旦引こう。なのはとすずかのところに行くか。

「なあ、アリサちゃんが酷く落ち込んでいるんだが、俺何かしたか

な？」

「さ、さあ……アリサちゃん、可愛いそうに……」

「なにもしてないと思うよ。にやはは……自覚がないって恐ろしいの……」

「ハア……」

む、なのはとすずかも落ち込んでしまった。どうやら今日は三人とも機嫌が良くないようだ。そろそろチャイムも鳴るし、席に戻るか。

「やっと行ってくれたの……」

「疲れるね、なのはちゃん……。アリサちゃんも大丈夫？」

「大丈夫じゃないわよ……。アイツの相手するのって辛すぎるわ……」

おお、どうやら三人とも立ち直ったようだ。三人で仲良く話しておるわ。俺も混ざりたいが時間的に限界だ。チクシヨー！

そうして、朝の時間は過ぎていった。

.....

時刻は放課後。俺は一人で屋敷とは反対にある山に来ていた。当初の予定では彼女たち三人と下校するはずだったが、既に彼女たちの姿は教室になかった。近くのクラスメートに聞いたところ、そくさと三人とも帰ってしまったらしい。

俺にも声をかけてくれたらいいのに。

そんなこんなで一人で帰ることになった俺は、最近よく来ているこの山で魔法の練習をしてから帰ることにした。

家に帰ったところで 剣の修行をさせられるのがオチだし、どうせなら原作介入の際に必要な魔法を今の内に練習しておこうというわけだ。

「さて、始めるか」

意識を集中すると魔力が溢れてくるのを感じる。スフィアを生成する。4つほど生成すると、それを木に向かって放った。

木に当たったスフィアは小さく爆発した。木は少し傷ついた程度で破壊には至らなかった。

「また駄目だ。攻撃がうまくできない。デバイスがないのが問題なのかなあ……。防御魔法ならうまくできるんだが」

そう言って自身の前に防御魔法を展開する。スフィアを生成するときより遥かにスムーズである。

「うーん。単純に攻撃に向いてないのかな……。あー、なのはみたいな固定砲台って感じな戦い方がいいのになあ……。まあいいや、とりあえず練習するか」

その後2時間ほど練習してから流は屋敷に帰った。

屋敷に着くころには既に6時を超えていて、父さんに酷く叱られた。

五話（後書き）

そろそろキャラ設定は必要か迷っています。
オリキャラも結構出したし。
もう少ししたら出そうかな。

六話〜前編〜（前書き）

シリアスにいきます。

キャラの性格が少し違つと思つかもしれません。

六話 前編

死のう

死んでしまおう

惨めで無様な死に方がお似合いだ

皆に迷惑しかかけない俺みたいな屑には

・
・
・

*

今日から2年生。またなのは達と同じクラスになれるといいな。

そんなことを考えながら俺は学校への道を歩いていた。

学校に着き、クラス発表の紙が貼られている掲示板に向かう。いつもは遅刻ギリギリに来る俺だが今度ばかりはそんなことはできない。何故ならこのクラス発表で俺が取るべき行動が決まるからだ。なのは達のフラグはいい感じに建ってると思う。ここでクラスが違うなんてなったら彼女達も悲しむだろうし、何よりこれまでより会う時間が減ってしまう。

それはいけない。

彼女達との関係をより磐石なものとしてこそ、原作への容易な介入ができる。そのためにも同じクラスとなり、より良い関係を築いていかねばならない。

まあ、クラスが違えど会いには行くが。

さて俺のクラスは……………

……………

まさか本当に違うクラスになるとは思ってなかった。しかもなのはとアリサとすずかは同じクラスだった。俺だけが違うのだ。これも神の仕業か。否、その程度の事に奴が干渉するわけがない。単純に運が悪かったと考えるべきだ。

まあいい。当初の予定通り休み時間などを最大限に有効活用し、彼女達に会いに行くべきだろう。この長い先生の話ももう終わる。休み時間を告げるチャイムも後5分で鳴る。障害は何もない。

よし、先生の話も終わった。チャイムももう鳴る。

5、4、3、2、1、0

カウントが終わり、それと同時にチャイムが鳴る。俺はダッシュで教室の外へ出た。

彼女達の教室は何処だったかな。

掲示板で確認しておいたなのは達のクラスを思い出しながら俺は廊下を走った。

着いた。

教室の中を見ると、なのはとアリサとすずかが集まって仲良く話している。

よし、行こう。

教室に入る。三人が俺に気づいた。とても驚いた顔をしている。なんでいるの、と顔が語っている。

「やあ、なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん。同じクラスになれなくて非常に残念だよ。でもこうして毎日会いに来るから心配しないだね」

「……来なくていいわよ……」

「……せっかく違うクラスになったと思ったのに……」

「……さすがに困るの……」

おや？ 先程まで笑顔だった彼女達のに急に落ち込んでしまったぞ。何かあったのかな？

「おいおい、どうしたんだよ三人とも。そんな暗い顔して。そんな顔してると不幸になるぞ」

「……もうなってるわよ……」

これはどういうことだろう。さらに落ち込んでしまった。むう、そうやら三人とも機嫌がよろしくないようだ。ここは一度引くか。

「じゃあ俺はクラスに戻るよ。また後で来るからね」

そう言い残し、俺は自分のクラスにもどった。

最後に振り返ってみると彼女達は最初の笑顔にもどって楽しそうに話していた。よかった、随分と早いがもう機嫌は直ったようだ。よし、次の休み時間にまた来るとしようか。

こんな感じの生活を続けて約半年。事件は起きた。

.....

「いい加減にしなさいよ！」

俺はいつも通り休み時間に彼女たちの所に言った。そしていつも通り彼女達に話しかけていると、突然アリサがキレた。

「ど、どうしたんだよアリサちゃん。いきなりキレ出して。俺が何かやったかい？」

「何かですって？ ええ、やったわよ、約一年間も鬱陶しく付きまとい続けてくれたわよ。もううんざりなのよ！ あんたのその態度が！ 言動が！ もう私達に迷惑かけないでよ！」

「……え？ 俺が鬱陶しい……俺が迷惑……」

「ハ、ハハ、中々キツイ冗談だね。あまり面白くないよ」

「冗談じゃないわよ！ なのはもすずかも迷惑してんのよ！ もう私達に付きまとうのはやめてよ！」

俺はなのはとすずかの方を向く。

「そ、そうなのか……？ 俺は迷惑だったのか……？」

なのはとすずかは少し戸惑ったが、意を決して言った。

「うん。最初は少し変わった人だなんて思う程度だったけど、ここまで来ると流石に変わってるじゃすまないよ」

「私も、あまり言いたくないけど、ちょっと迷惑なの……」

「……そうか……ごめんな。クラスに、戻るよ……」

そう言っつて、俺はなのは達のクラスを去り、自分のクラスに戻った。

その後のことは何も覚えてない。ただ気がつくとな既に放課後になっていた。クラスにはもう俺しか残っていなかった。俺も帰り支度をして、屋敷に帰ることにした。

話は冒頭に戻る……

*

ここは屋敷の中庭。普段は見習い達が修行をしている場所だが、既に修行の時間は終わっている。誰もいない。だから一人でいたい俺には最高の場所だった。

迷惑と言われたとき、俺は不思議な感じがした。以前にも同じ事を言われたような……。ああ、思い出した。前世だ。前世で家族に言われたんだ。

『お前はこの家の疫病神だ！』

父が言う。

『親不孝者！ あんたなんか出て行きなさい！ いつまでもこの家にいられると迷惑なのよ！』

母が言う。

『全く……。少しは仕事で大変な俺の苦勞も分けてやりたいよ。学校にも行かずにダラダラと……。迷惑な奴だ』

兄が言う。

『兄ちゃん、いい加減ダラダラしてるのやめなよ。ぶっちゃけ言う
と迷惑なんだよ』

弟が言う。

まさか前世で散々言われた言葉を今更聞かされるとは思ってもなかつた。いや、そう思いたくなかったのかな。何と言われようと何も思わないし感じないと思つてたつもりだったけど、本当は心のどこかで恐れてたんだ。拒絶されることを、否定されることを。

だから俺は二次元に逃げた。

二次元は俺の全てを受け入れてくれる。だから二次元の世界に行けばその全てが俺を受け入れてくれる。そう勘違いしていたんだ。

結果はこの様だ。夢も理想も粉々に砕かれた。

どっかの赤い弓兵さんも言つてたなあ……。理想を抱いて溺死するか。ははっ、いいね、最高だよ。理想も全て失つて絶望の中で死ぬくらいなら、理想を抱いて死にたいね。最も、もう手遅れだけど……。

気づくべきだったんだ、もっと早くに。これが一つの現実であるということを。そうすればこんなことにはならなかった。

大和家の伝統に従って剣士と使用人の修行、付き人としての態度、礼儀をしっかりと学んでいたらどうなっていたんだろう。少なくとも父さんに失望されることはなかっただろう。この前、父さんが自棄酒をしながら「大和家はもう終わりだ」と言っているのを聞いた。

あときは原作のことしか頭になかったから気にしなかったが、今改めて考えると俺は父さんに対してとても酷いことをした。帝様にもだ。あの人はいつも俺を心配してくれていた。これじゃあ前世の二の舞じゃあないか。

……死のう。それが俺にできる唯一の償い。願わくば、来世ではこんなことにならないよう祈る。

そして俺は、部屋から持ってきた刀を鞘から抜く。

これで最期だ。そう思ったときだった。

「何しけた面してんだよ」

誰かが言う。振り返ると、そこには自分と同じく見習いの冬海雪政がいた。

六話（後編）（前書き）

今回は長いです。

初めての戦闘描写なので違和感があるかもしれません。

六話 後編

「よう、何しけた面してんだって聞いてんだよ」

雪政は威嚇するような態度でこちらに向かってくる。この人はあまり好きじゃない。口が悪いし、チャライから前世でカツアゲされたDQNを連想してしまう。そのくせ見習いの中では一番強いのだが文句も言えない。

「・・・別に何でもありませんよ。それよりなんでこんなところにいるんですか？」

「ああ？ 素振りでもしようかと思って来たんだよ。ま、随分としかけた面した野郎がいたがよ」

「そうですね。では俺はこれで。頑張ってください」

流石に人前で自殺する気にはなれない。場所を変えよう。そう思っ
て俺は立ち去ろうとする。

だが雪政が立ち去ろうとする俺の肩を掴んできた。

「待てよ」

「何ですか。離してくださいよ」

「聞きたいことがあるんだよ」

「俺にはありませんね。それでは」

そう言つて振り払おうとしたが、思いのほか肩を掴む力が強く振り払えない。全く、この屋敷では身体能力チートなんて飾りだな。

「まあそう邪険にするなよ。ちょっとくらいいいだろ？」

「………分かりました」

抵抗は無駄と判断して、仕方なく俺は話を聞くことにした。

「で、何ですか？」

「単刀直入に聞け。テメエ、ここで何しようとしてた」

なんて答えよう。流石に自殺しようとしてましたなんて言えない。何でもいい、ごまかそう。

「最近俺って修行してないじゃないですか。だから俺も素振りをしてよう」と

「嘘ついてんじゃねえぞコラ」

見破られた。おまけにすごい殺気を放っている。次嘘をついたら俺は斬られるだろう。死のうと思ってたわけだしそれも悪くないが、この人に斬られて死ぬのは納得がいかない。この人に殺されるくらいなら自分で死ぬ。

「……死のうとしてました」

「ほう、なんでまたそんなことを？」

このまま根掘り葉掘り聞いてくるつもりか。嘘はつけない。仕方ない、包み隠さず言つか。

「……自分がどれだけ多くの人に迷惑をかけてたか自覚したんで

すよ。だから償いの意味もこめてこの命を絶とうと思ったんです」

「へえ、やっと気づいたのか。確かにテメエはいろんな奴に迷惑をかけた。だが、それだけか？」

「それだけか、とは？」

「俺に嘘は通用しねえ。分かってんだろ？」

「……俺は誰にも必要とされてない。父さんにも、帝様にも、その他多くの人たちから俺は必要とされてない。だから俺に生きる価値なんてない。だから死ぬんですよ」

「……なるほど、よく分かった。そんなテメエに言いたいことがある。 やっぱテメエは気にいらねえ！」

「 ツー！」

そして、雪政はいきなり俺に斬りかかってきた。一瞬のことだったので回避が遅れてしまい、腕を少し斬られた。

「くっ、何しやがる！」

「うるせえ、刀を抜け。修行をサボってたとはいえ、掟くらいは覚えてんだろ？」

そう、日本流剣術にはある掟がある。

何故日本流剣術の技は抜刀術しかないのか。それは剣術の技はあくまで暗殺用。この国の敵を確実に排除するための剣だからだ。決して戦いの剣ではない。

『相手を敵と認め、全身全霊を持って戦うときは抜刀して戦わねばならない。尚、抜刀後は剣術の技の使用を禁じる。抜刀後に使用していいのは拳術と堅術、そして剣術は奥義を使用して戦わなければならぬ。手加減は一切無用。自分の力の全てを使って相手を倒せ』

修行をサボらず、真面目にやっていた頃によく父さんと御國さんが言っていた。これだけはよく覚えている。

だから、刀を抜くという行為が何を意味するかもよく分かっている。雪政は俺を殺す気だ。雪政は既に刀を抜いた状態。屑に成り下がったとはいえ、この勝負から逃げることは許されない。

俺は刀を抜いた。奴が俺を殺す気で来るなら、俺もそれに応える。

「生憎だが俺は奥義を使えない。型は覚えちゃいるが、まだ未熟だ。

未熟な状態での奥義の使用は禁じる。これも分かってんだろ？ テ
メエもまだ使えねえはずだ。つまり、純粋な斬り合いの決闘だ」

俺は頷く。この屋敷で、俺の身体能力チート、そして魔力チートが
アドバンテージになりえないのは十分に分かっている。そして俺は
何年間も修行をサボっている。対する雪政は一度も修行を休んだこ
とがない。尚且つ個人練習を欠かさない努力家だ。どちらに分があ
るかは一目瞭然だ。

だが、この勝負は負けるわけにはいかない。礼儀とかそんなんじや
ない。単純に俺も雪政が気に入らないからだ。特に理由はない。だ
が気に入らないのだ。だから負けるわけにはいかない。二回どころ
か三回でも四回でも言っつていくくらい大事なことだ。

「お喋りはここまでだ。

行くぜッ!!」

雪政とは3メートルくらい離れていたが、奴は一瞬で間合いを詰め、
俺に斬りかかる。さっきと違い俺も臨戦態勢だったから避けるのは
簡単だ。

「甘い！ テメエが避けるのハナから読んでたぜ！」

雪政は刀を振った時の勢いに任せて、俺に蹴りを放った。これは避
けられない。

「っがは！ イテエなチクシヨウ・・・」

流石に俺もトサカに來た。

「今度はこっちから行くぞ！」

雪政が間合いを詰めたときよりも速く、俺は奴との距離を詰める。流石の雪政もこれには驚いたようで一瞬動きが止まった。

それが命取りだ。

この隙を見逃さず、俺は雪政に全力で斬りかかる。だがその瞬間、雪政の姿が消えた。

「あの体勢からの回避！？ これは・・・『韋駄天』か！」

「その通りだ。使えねえと思っただか？ 連続はできねえが、テメエを倒すのには一回できれば十分だ」

これはまずい。まさか雪政が『韋駄天』を使えるとは思ってなかった。もし奴が『啄木鳥』も使えたら、俺の勝ちは難しい。

俺は修行をサボっていたから何も技が使えない。奥義は奴も使えな

いとはいえ、拳術が使えることは今分かった。この差は非常に大きい。

「流石に焦ったぜ。テメエ、あんなに速く動けたんだな……だつたら尚更気にいらねえ！」

「くっ……速い！」

今度は『韋駄天』で奴は間合いを詰めてきた。それから息もつかせぬほどの連続攻撃が俺を襲う。捌くのが精一杯だ……。

俺に攻撃を続けながら雪政は言った。

「確かにテメエは皆に迷惑をかけた！俺達にも、暁文さんにも、帝さんにもだ！だがな、テメエは一つ勘違いしてるぜ！誰にも必要とされてないだと？んなわけねえだろうが！」

雪政が上から斬撃を放ってくる。俺はそれを刀で受け止める。その時、腹にとんでもない衝撃を感じて俺は吹っ飛んだ。

上からの斬撃は囷……本命はパンチだったってことか……。

一旦攻防が止み、雪政は話を続ける。

「俺はデメエが気にいらねえ。修行はサボるし迷惑はかける。だから俺はデメエを必要としてない。だが、帝さんは違う！あの人はデメエを必要としていた！デメエのことをいつも心配していた！何も知らねえくせに勝手なことを言うな！」

・・・え？

そんな馬鹿な・・・俺は散々あの人に迷惑をかけたんだ・・・そんなはずがない・・・。

「・・・嘘だ」

「嘘なもんかよ。あの人のことに関して俺は絶対に嘘はつかねえ。なんだったら直接聞いてこいよ。俺を倒してからだがな」

「・・・ああ、そうさせてもらっ」

どうやら死ぬのはもう少し先になりそうだ。まずやるべきことしてきた。

俺は一瞬で雪政との間合いを詰める。『韋駄天』ほどではないが十分速い。そして一気に斬りかかる。俺が出せる最高速度でだ。『韋駄天』が使えても雪政の実力ではこれは回避できまい。それに奴の肉体はそろそろ限界のはずだ。

「ぐっ……。テメエ、今まで手え抜いてやがったな」

「そんなことしませんよ。……いや、無意識の内に手を抜いていたかもしれないね。技が使えるとはいえ、あんたの体はまだ子供。たった二回の『韋駄天』でも日本、もしくは大和の血統でないあんたの肉体では耐え切れない。だから本気を出せなかったのかもしれないね」

「テ、テメエ……。俺をなめやがって……ぶっ殺す！
！」

雪政から溢れんばかりの殺気が放たれる。そして俺から少し離れる。

何をする気だ……。

雪政は刀を上段に構える。すると雪政の体の輪郭が歪む。ゆらゆらと風に吹かれるように。

まずい……アレは……っ！

「流石の俺もトサカに来たぜ。こいつでとどめだ。日本流剣術・奥義『真・かげろ』」

「そこまでです！」

雪政に向かって飛来する物体がある。アレは……扇子か？

雪政は構えを解き、飛んできた扇子を掴み取る。

扇子が飛んできた方を見ると、そこには使用人見習いの夏野鈴がいた。

「テメエ、鈴！ 邪魔すんじゃない！」

「黙りなさい！ 未熟な状態での奥義の使用を禁じる、そういう掟があるはずです！ あなたは今奥義を使おうした！ あなたを今から軍団長の下へ連れて行きます。そこでしかるべき罰を受けてもらいます」

「……ちっ、分かったよ……おい、流。決闘は中断だ。よかったな、命拾いしたぜテムエ」

「さあ、命拾いしたのはあんたの方じゃないですか？」

「さっきまで死のうとしてた奴が偉そうに……。テムエはこれからやることがあるだろ。さっさと行ってこい」

「言われなくても行かせてもらいますよ。感謝します、雪政さん」

「ちっ、さっさと行け！」

おお、真のシンデレラここにあり。誰得だよホントに。

そんな下らない事を考え、俺はその場から立ち去った。

*

「ふん、ちったあマシな面になったじゃねえか。まあ、この後奴がどうなるうと俺の知ったことじゃねえがな」

アイツの去っていくのを見ながら俺はため息をついた。

未熟な肉体で二回の『韋駄天』。体にかかる負担は相当なものだった。悔しいが、アイツの言うとおりだ。むしろ同じ年で連続使用と方向転換を行える帝さんは化物だ。

当然本人の前では言えないが……。

「何カツコつけてるんですか。ほら、あなたには軍団長直々の罰が待ってます。他人の心配より、まずは自分の心配をしなさい」

「げっ、そうだった。あゝやだなあ。あの人掟とかにめっちゃ厳しいから絶対キレるって……。くそ、もうちょい冷静になるんだつた……」

「今更言っても後の祭りです。さあ、行きますよ。さっさと歩きなさい」

そう言って鈴はを蹴ってくる。痛んだ体にはとても響く。すごく痛い。

「ちょっと、痛いって、蹴るなよ鈴。分かった、分かりましたよ。おとなしくしますから蹴るのはマジ勘弁してくれよ。疲れてんだから」

これから受ける罰を想像しながら、俺はため息を吐いた。

*

着いた。

今俺は帝様の部屋の前にいる。そしてノックする

「流か、いるのは分かってる。入りなよ」

前に気づかれた。相変わらず凄い人だ。

とりあえず了承を得たので、部屋に入らせてもらおう。中では帝様が椅子に座って俺を待っていた。

「何の用だい？」

「ちょっと帝様に聞きたいことがあるんです」

「へえ、流から質問されるのは何年ぶりだろうな。今日は何かいいことでもありそうだ。何でも聞いてくれよ」

「では単刀直入に聞きます。……帝様にとって俺は必要ですか？」

「そうだね」

即答だった。

あまりに早さに俺は一瞬戸惑った。だがすぐに気を取り直す。

「………本当ですか？」

「うん、当たり前だろ？ 随分変わった質問をするね。何かあったのかい？」

少し迷ったが、俺は全てを話すことにした。前世のことも、神のことも、転生のことも、これまで修行をサボっていた理由も。そして、この世界のことも。

その全てを話し終えた後、帝様はしばらく沈黙していた。

10分が過ぎた頃、ようやく帝様は口を開いた。

「随分とぶつ飛んだ話だね。にわかには信じがたいよ」

「そう、ですよね」

「だけど僕は信じるよ。目を見れば分かる。君が嘘をついてないこと」

「そんなことで分かるんですか」

「何を言っている。口ではいくらでも嘘は言えるが、目はいつだって真実しか語らない。そして流の目は嘘を言っていない。何よりも信用できるよ」

これが日本の血統の実力か。目を見て判断するなんて俺には到底できない。

「しかし、流が自害しようとしていた、ね……。しかもその理由が皆に迷惑をかけたことへの償い、そして誰にも必要とされてない、か……」

「ええ、俺は父さん、帝様、そして原作キャラ達にたくさん迷惑をかけました。そして俺は必要とされてないと思っただけです。だからこの命を絶とうとしたんです」

「……確かに流はたくさんの人に迷惑をかけたね。暁文も僕も心配していたんだよ。君が修行もせずになんか没頭してたって聞いたときは。そして君がその、原作キャラだっけ。まあ、クラスメートの女の子達に迷惑をかけていたってことは僕がまだ在学中に聞いたことある。それについては反省してるね？」

「無論です」

「うん、よろしい。それと誰にも必要とされてないだつて？ そんなことがあるわけないじゃないか」

「はい、雪政さんも同じ事を言つてました。帝様だけは俺を必要としてくれているつて」

「僕だけなもんか。たくさんの人が君を必要としているよ。父上も、暁文も、親衛隊の人も、軍団長も、軍兵も、見習いも、使用人も、みんなが君を必要としているよ。いいかい？ この世に必要じゃないなんて人間はいない。全員が誰かに必要とされているんだ」

「だけど俺は、前世で誰にも必要とされてなかった」

「前世は前世、今は今だ。それに、君がそう思っているだけで、絶対誰かに必要とされていたはずだよ。少なくとも君が助けた男の子は、君がいなけりゃ死んでいたんだ。その男の子の未来のためにも君は必要だったんだ。言い方は悪いが、必要な犠牲つてやつだよ」

「同じ必要でも、それは違ふと思います」

「ああ、そうだね。だが形はどうあれ、必要とされてない人間なん

ていないんだよ。それに今は皆に必要とされている。生きていて欲しいと思われている。人は変わることができる。迷惑をかけてそれを償うために死ぬのではなく、迷惑をかけた人たちのためにも君は変わるんだ。前世を断ち切れ、過去に打ち勝て。君は『大和流』だ。この国にも、この日本家にも必要とされている大事な人間だ」

・・・・・・・・・・・・・・・・あぁ、やっと分かった。

いつも思ってたことだ。俺は一体何がしたいのか。なんのために生きているのか。

俺は誰かに認めて欲しかったんだ。

そして、全てはこの瞬間のために俺は生きてきたんだ。

・・・変わるう。

前世を断ち切ろう。

俺は『

』じゃない。『大和流』だ。

ならばまず、捨てなければならぬものがある・・・。

「帝様、俺は今をもって前世を捨てます。その様を見届けてくださ
い」

「ああ、いいよ」

そして俺は手を赤い目の方に添え

目を抉り取った。

「ぐっ……ッ!!」

痛い。目が焼けるように熱い。今すぐにもやめたくなる。だがそれはできない。

これは試練だ。

過去に打ち勝てという、未来への糧としろという、俺への試練だ。

そして抉り取った目を、口元へ運び、喰った。

口いっぱい血の味が広がる。そして俺は目を咀嚼し、飲み込んだ。

目が痛い、血がダラダラと流れている。口の中は血でどろっとして、とても気持ち悪い。

だが、まだ終わっていない。

帝様の部屋の隅あつた墨汁を手に取り。頭にぶっかけた。

そう、この銀髪も前世を断ち切るために捨てなければならぬもの。

本来、大和家にあるべき色へと戻すのだ。

鮮やかな銀髪が漆黑へと染まる。

俺は、俺に勝った。

「これは忠義の証。この大和流、今日をもって帝様への絶対の忠誠を誓います。今俺は前世を捨てました。後悔はありません」

「うん、見事だよ。流」

「俺はこれから全てを取り戻します。これまでの時間を。本来あるべき姿へと戻します」

「ああ、手伝うよ。たった今、君は生まれ変わった。

誕生日おめでとう、『大和流』」

それから半年、俺の姿を見たものはいない。

これまでは序章。

序章は終わり、物語は加速する。

六話〜後編〜（後書き）

次の次の話くらいから原作が始まる予定です。
初めての長文疲れました。

これから大分変わる予定です。キャラとか。
それと、もっと戦闘を増やす予定です。
技設定まで作つといて戦闘が少なすぎると思っている方もいるかと思つので。

実際に私の友人が言っていました。

戦闘描写につきましては、初めてなので大変難しかったです。
なのでどこかおかしな点があるかもしれないですね。
これからもっと鍛えていこうと思います

七話（前書き）

最近キャラの口調とか間違っていないか心配です。

七話

「行ってきます」

「ああ、行ってこい」

いつも通り帝は朝の7時には家を出る。そしていつも通り鞆の中身の確認を終えると、屋敷を出て階段を使わずに森から山を降りる。

中学生になってもこの生活は変わらなかった。そしていつも通り人間のレベルを超えた速さで山を駆け降りて行く。

「それにしても・・・あそこまで変わるものか。たった半年だというのに、もう直属親衛隊と互角に戦えるまでになるとは。人間は面白いな」

それが誰のことを言っているのかは分からない。

ただ、帝の顔はとても楽しそうだった。

「ああ、楽しみだ。これからどうなるのか。・・・魔法少女リリカルなのは、ね。この国で、しかもこの海鳴で戦いが起こるのか。まあ、しばらく僕の出番はなさそうだ。流の話聞く限りでは・・・

「

もし日本に害を及ぼすようなら話は別だけどね。

そしていつも通り、『韋駄天』を使い一瞬で山のふもとの町に着き、学校へと向かっていった。

*

私、高町なのは。今日から三年生です。いつも通り、アリサちゃんやすすかちゃんと一緒に学校へ行くの。

今日から新しいクラス。私達は学校に着くと一目散にクラス発表の掲示板に向かう。急がないと人だかりができてしまつて掲示板を見ることが困難になってしまう。しかしどうやら遅かつたようで、既

に掲示板の前には人だかりができていた。

「にゃっ、すごい人の数なの」

「あゝ、ちよつと遅かったわね」

「そうだね。仕方ないけど、人が少なくなるのを待とうよ」

そして数分すると人がだんだんと確認を終えた人が自分のクラスに向かっていったので私達もようやくやく見ることが出来る。

「あ、私達一緒のクラスよ！」

「え？ あ、本当なの！ やったー！」

「三年も一緒だね。なんだか私達運がいいね」

「あ、ちよつとまって、あの大和も一緒のクラスよ」

アリサちゃんは露骨に嫌そうな顔をする。

確かに私もちょっと苦手だけど、私達が酷いことを言ってから学校に来ていないらしいのでちょっと心配なの。

「まあいいわ、とりあえず私たちのクラスに行くわよ」

「そうだね、ここにいると後ろの人たちの邪魔になるし。行こうなのはちゃん」

「うん」

そして私達は自分のクラスに向かった。

*

既に時刻は8時を回っている。掲示板に人は少なく、遅れてきた生徒がさっさと自分の名前を見つけて決められたクラスに向かう。

その中に異様な雰囲気を纏った少年の姿があった。他の生徒は遅刻しないように走っているが、その少年だけは歩いていった。

何でそんなに余裕なのか。少年を見たものは皆そう思った。

あんな子いたかな？ そう思う人もいた。

少年は自分のクラスへと向かいながら呟いた。

「高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずか。また同じクラスになるとは……面白いこともあるもんだ」

これも神の仕業か。否、奴はこの程度のことには干渉しない。単純に運の問題だろう。

一年前と同じようなことを考えている内に、自分のクラスに着いた。

*

私達三人は新しいクラスの中で集まって話していた。

「まだ、大和は来てないようね」

「まあ、いつも遅刻ギリギリに来てたからね。今日もそうなんじゃないかな？」

「にゃ……あの時から学校に来てなかったらしいからちょっと心配なの」

それでも苦手意識は中々消えない。

そしてまた新しくクラスに入ってくる子がいた。

「……ねえ、すずか、なのは。あんな子いたかしら？」

「私も思った。何組の子だろう……。一目見たら忘れなさそうなんだけど全然分らない」

「うーん、私も分らないの」

私達は三人とも首を傾げていた。

クラスに入って来た少年を必死に思い出そうとしている。それでも全然分らない。もし見ていたら絶対に忘れないと思うんだけど。

そうして考えてる内に先生が来て、私達は自分の席に戻った。

先生は自分の自己紹介をする。

今度の先生も優しそうなもの。

そして生徒の自己紹介が始まった。私も自己紹介をして、スムーズに事は進んでいった。そして最後の子の番になった。

最後は……。あの変わった子だ。あれ？ 大和くんは？

「じゃあ次は大和流く……。ん？ あの、流くん……。よね？」

「もしこの学年に大和流という名前が一人しかいないのなら、それ

は俺ですね」

「そう、ね。確かに大和流くんは一人しかいないわ。ごめんなさいね。それじゃあ自己紹介をお願い」

「はい、大和流です。家庭の事情で半年ほど学校を休んでいました。俺を知っている人は、以前と少し違うので驚かれるかもしれませんが、一年間よろしく願います」

驚いた。

私だけじゃない。アリサちゃんもすずかちゃんも、このクラスの全員が驚いている。少しなんてもものじゃない。全く違う。全然気づかなかった。

だって前までの大和くんは長い銀色の髪で、片方の目が赤色でもう片方の目は黒色でいつも笑っているというのが特徴だった。

でも今の和くんは・・・真っ黒の長い髪を下の方で結んでいて、赤色の目があった場所には眼帯が着けられている。そしてあの個性的な笑みを全く出さず、いかにも真面目って言う感じの顔をしている。そしてなぜか竹刀袋をずっと手に持っている。

気づく要素があるだろうか。否、ないの。

「少しどころか全然違うから先生とっても驚いちゃったわ。丁寧な

自己紹介ありがとう。これで全員終わったわね。じゃあ、この後の予定を伝えます」

そして前と同じく予定を伝えると解散になった。私はアリサちゃんやずずかちゃんと集まって話をしていると、大和くんがこっちに向かって歩いてきた。

「な、何か用？ 手短にお願いするわ」

「無論。時間は取らん」

口調まで違う。そのことにも驚いていると大和くんは私達に向かっていきなり土下座をした。

「高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずか。今までの無礼を詫びる。本当にすまなかった。・・・許してもらおうとは思わない。だが謝罪を受け取って欲しい」

今日は驚きの連続なの。

とっても綺麗な土下座なの。しかも床に頭をこすりつけている。ここまで誠意を感じる土下座は初めて見たの。

三人とも驚いて数秒間止まってしまっていた。気を取り直して私は

言った。

「別にそこまでしなくていいよ。謝ってくれただけでも十分だよ」

「しかし・・・」

「いいの。私は許すよ。アリサちゃんもすすかちゃんもいいよね」

「うん」

「・・・君達の寛大な心に感謝する。ありがとう。それでは御免」

そういうと大和くんは帰っていった。

クラスに残る意味もないので私達も帰ることにした。

.....

帰り道。

私達はいつも通り談笑しながら歩いていると、すずかちゃんが唐突に言った。

「それにしても驚いたね」

「え、何が？」

「今日の大和くん。半年前から比べるとすっごく変わったよね」

「そうね。なんていうか、武士って感じよね」

「私も思ったの。それに流くん、土下座するときもずっと竹刀袋を放さなかったの。とっても大事なもののかな？」

「私も分からないわ。ただ良い変化なのは間違いないわね」

「そうだね。なんていうか格好良くなったよね」

「え、何？　　すずか、あんたまさか・・・」

「そ、そういう意味じゃないよ」

そんな話をしながら帰っていた。

そのとき私は頭に強い衝撃を感じた。あまりの衝撃に立っていられず、私は倒れこむ。倒れこみながら横を見ると、アリサちゃんもすずかちゃんも誰かに頭殴られて倒れている。どうやら気絶してしまっているようだ。

そして私も意識を失った。

*

数人の男達が、気絶したなのは達を見ながら言った。

「よし、急いでコイツ等を車に運ぶぞ」

「ああ」

男達は気絶したなのは達を車に運び込む。男達はこの手の作業に慣れているようで、すぐに運び終わった。

「よし、行くぞ」

「ああ」

車のエンジンが鳴る。

車の中で一人の男が、気絶した三人を見ながら言った。

「それにしてもバニングス家の娘と月村家の娘、こんな上玉が簡単に捕まえられるとはな。身代金でも取ってコイツ等を奴隷商人にで

も売り飛ばしちまえば俺達は大儲けだぜ」

そして男はなのはを指差して言った。

「そつえばこの娘はどうする？」

「あゝ別にコイツからはそんなに身代金とれなさそつだしな。好きにすりゃいいだろ」

「へへへ、やったぜ。俺はこのくらいの娘が大好きなんだ。たつぷり可愛がつてやるぜ」

「このロリコンが」

そして車は去っていった。

そしてその場所に一人の少年が現れた。

「修行のつもりで500メートルほど刀閃圏を展開していたら・・・
・随分と面白いものを感じてしまった」

その少年とは大和流であった。流は車が去っていった方向を見なが

ら眩いた。

「……………あっちか」

そして流の姿は消えた。

……………

海鳴市のとある廃ビルに、先程の男達はいた。

男達は誘拐した三人を縄で縛り、地面に無造作に置いた。

「よし、早速電話の準備だ。バニングス家からかけるか」

「その前によ、この茶髪の娘で遊んでもいいか？」

「この変態め。まあいい。存分に楽しむがいいさ」

「へへ、じゃあお言葉に甘えて　　ぐふっ」

なのは近づいた男が突然倒れた。男は胸から血を流している。まるで何かに斬られたようだ。

「お、おい。どうしたんだよ。なんでこんなでかい裂傷ができてんだよ」

「俺が斬ったからだ」

入り口の方から声が聞こえた。

「な、なんだ!?!」

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ。悪を罰せと俺を呼ぶ。闇あるところに光あり。悪あるところに正義あり」

男達が声が聞こえた方を見ると、そこには眼帯を着け、刀を持った少年がいた。

「だ、誰だ!？」

「ふん、下郎に名乗る名などない! と、言いたいが此度は我が初陣。華々しく飾るため、下郎とは言えど高らかに名乗らせてもらう。我が名は大和。日本家当主直属親衛隊次期隊長、大和流なり! 罪を犯し、あまつさえ幼き女子までも犯そうとするとは畜生にも劣る所業! 恥を知れ、しかるのち死ね!」

「くっ……なめやがって、このガキがあ……お前等、やっちなえ!」

そして男達は流に向かって銃を向け、発砲する。しかし弾は流に当たらない、当たる前に全て斬り落とされてしまうのだ。

「ば、馬鹿な……」

「大人しく武器を捨て、捕まるのであれば生かしておいたものを……
・そうまでして死にたいかア! ならば殺してくれる!
『陽炎』!!!!」

その瞬間男達の動きが止まる。そして流が指をパチンと鳴らすと、男達は粉になって風に吹かれて飛んでいった。

「ふん、貴様等の失敗はこの国で、この地で、この俺の近くで罪を犯してしまったということだ。さて、彼女達をなんとかせねばな」

そして流はなのは達をいつぺんに抱え込むと廃ビルを後にした。

*

「ん……………」

目が覚めるとそこは公園だった。横を見ればアリサちゃんとすずちゃんもいる。二人とも気絶したままだ。

「アリサちゃん、すずかちゃん。起きて」

「……………ん……………なの？」

「……………ここは……………公園？」

よかった。二人ともなんともないようだ。

「なんで私達、公園にいるの？」

「確か帰り道の途中で誰かに頭を殴られて、それから……………思
い出せない」

「とりあえず二人とも無事なようでよかったの！」

「……………そうね、なんともないようだし。何かを盗られたわけで
もないようだし。帰りましょ」

「そうだね。もう6時だよ。早く帰らなきゃ叱られちゃう」

そして私達はそれぞれの家に帰ることにした。

七話（後書き）

次から無印が始まる予定です。

そろそろキャラ設定とか出したほうがいいのか？

要望があるようなら出します。

ないようならもう少し後に出します。

もうちょっとオリキャラを登場させてから出そうと思っているので。

八話（前書き）

これから原作開始です。
ちよつと急いで書いたんで誤字脱字があるかもしれません。

八話

……誰か……僕の声聞いて……

……力を貸して……

……魔法の力を……

*

深夜の日本家の屋敷、その中庭で数人の男女がいた。

その先頭に立っているのは日本帝、その傍らに立っているのは夏野鈴と冬海雪政。

そしてその後ろでは大和流を含む、日本家の魔導師達がいた。

「……………ッ!」

「ん? どうした流」

流は他の魔導師たちと顔を合わせ、頷きあう。そして帝の方を向くと言った。

「今、魔導師による念話を感知しました。助けを請うものです」

「という事は、つまり……………」

「はい、ついに始まりました。原作が」

「そうか……………この場にいる魔導師に告ぐ。至急、その少年の所に向かい監視しろ。数人は逃げた思念体を追え。殺すなよ、あくまで監視だ。ただ、町に被害が出ないよう誘導しろ」

『御意!!』

そしてその場にいた魔導師全員が姿を消した。流も行くとしたが帝に肩を掴まれ止められた。

「帝様、俺も行きます」

「流、君は明日学校だろう。監視はアイツ等に任せて君は寝るんだ。それに君は高町なのはの監視という役割も兼ねているんだ。自身の責務を全うすることこそが重要だ。それにアイツ等だっここで修行してたんだ。たかだか化物一匹に遅れを取るような奴はこの家に一人もいない。安心しろ」

「……御意」

流は渋谷部屋へと戻っていった。

「雪政、鈴。君達も寝ろ。この件に僕達の出る幕はなさそうだ」

「そうっすかね。かあ、一度でいいから戦ってみたいっす。そのジュエルシードの思念体って奴と」

「何言ってるんですか。私達がまず考えるべきはこの国の安全です。全く血の気が多い……これだから困るんです」

「そうかい？ 僕は頼もしいと思うよ。雪政が戦って勝てば結果的にはそれがこの国の安全に繋がるんだ。雪政も楽しんで、平和は守られて、まさに一石二鳥じゃないか」

「そつだぜ鈴。やっぱり帝様はよく分かってるっす！」

「帝様まで……。まあいいです。とにかく私もそろそろ寝ます。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

鈴も部屋に戻っていった。

その後、雪政と帝もそれぞれの部屋に戻っていった。

*

俺はいつもより早く起きた。

帝様の命令に従い、少しでも早く登校し高町なのはを監視するためだ。

そのため、普段やっている朝の修行の量を減らし、朝食をいそいで食う。準備を終えると玄関に向かった。そして靴を履いているとき、父さんが駆け寄ってきた。

166

「おい、流。もう学校に行くのか？」

「そつだよ父さん。帝様の命令なんだ」

「そつは言ってもまだ6時だぞ」

ん？ ああ、まだ6時だったのか。気付かなかった。

「そうだね。何か問題がある？」

「はぁ・・・素晴らしいまでの忠誠心だよ。まあいい、お前のことだ、好きにしろ。・・・変わってくれたことは非常に嬉しいが、これは少し心配になるぞ・・・」

「大和家としては喜ばしいことだろ？」

「まあな」

「じゃあ行ってくるよ」

「ああ、行つてらっしゃい。言う必要はないと思うが、交通事故はないようにな。車に気を付けるよ」

「分かってるって、心配するなよ父さん。車ごときじゃ俺は死なないよ」

俺は玄関を開け、門へと向かう。すると後ろから父さんの呟きが聞こえた。

「……………車の方を心配したんだがな、俺は……………」

……………それもそうか。

……………

「うむ、やはり早く着きすぎてしまったようだ」

父さんの言うことに一理あったので、少し遠回りしてきたんだが。

時刻は7時にもなっていない。無論、誰もいない。

想像していただけるだろうか、眼帯を着け、常に傍らに竹刀袋を置

いている男が、仏頂面で腕を組み教室で一人、席に座っている姿を。

「よし、一番乗り！・・・って大和！？」

今教室に入って来た男子は『二階堂佐久間』と言いクラスで委員長を務めている男だ。

初めてこの名前を聞いたときは「随分と字数の多い名前だ。テストの時に苦労しそうだな」と思った。

とりあえずお約束と思い、俺は委員長と呼んでいる。

「おはよう、委員長。随分と早いな、委員長の鑑だ」

「あ、ああ、おはよう大和。お前の方が早いんだがな……。ちなみに何時に来たんだ？」

「うむ、6時30分の段階で孤独の境地を実感していた」

「早くね！？俺よりめっちゃ早くね！？もうお前委員長やれよ！俺よりよっぽど適任だよ！」

「何を言うか委員長。クラスの者達は君を適任と判断したから委員

長にしたんだ。ならばその期待に応えるのが道理」

「ちげえよ！ 皆面倒くせえって言うてくじ引きでこうなったんだよ！ なるべくしてなったんじゃないなくて、成り行きでこうなったんだよ！ てかお前あの時いただろ！ 何で覚えて無いんだよ！」

「ああ、その時はこの太陽の光を浴びていたんだ。俺の席は窓際だろう？ クラス委員を決めていた時間帯は正午。ちょうど太陽は天へと昇りきり、俺に春の暖かい陽光を届ける。それに身を任せるとまさに天にも昇る気分になるのだ」

「つまり寝てたんじゃねえかッ！！ 何カッコよく言ってんだよ！ 居眠り程度にそこまで言う奴初めて見たわ！」

「否、断じて俺は寝ていない。ただ少しばかり脳の休息の意味もこめて、日光浴に興じていただけだ」

「往生際悪っ！ ネタは上がってるんだよ！ 無意味な抵抗してんじゃねえ！」

「む、ああ言えばこう言う。それは度が過ぎるとしつこいと思われろぞ委員長」

「どの口がそれを言うか！」

全く、頭に血が上りすぎているな。このままではラチがあかん。

教室にも少しずつ人が増えてきている。このままいらぬ注目を集めるのは監視の任務を任されている俺にとって非常に好ましくない。

少々手荒ではあるが仕方ない。俺は委員長の後ろを指差して言った。

「委員長、あれは何だ！」

「え？ どれだよ　ぐふっ」

委員長にボディブローを決め強制的に落ち着いてもらうことにした。

許せ、委員長。よし、誰にも見られていないな。次は偽装工作だ。

俺は気絶した委員長を抱えながら「おい、どうした委員長！ 何？ 具合が悪い？ 分かったならば保健室に連れて行ってやるう！」と敢えて大声で言う。そして教室にいる人間に「委員長の具合が悪いようなんだ。喋るのも辛いらしい。保健室に連れて行くから遅れるかもしれない。先生が来たら伝えておいてくれ」と言い教室を出る。

時刻は既に7時10分を過ぎている。まだまだ早い時刻ではあるが廊下にはそこそこ生徒の姿があった。

とりあえず「大丈夫か委員長！ 保健室までの辛抱だ！ 頑張れ！
無理に喋ろうとするな！」と言っておき、廊下の生徒への偽装工
作を忘れない。同じようなことをもう二回ほどやって、ようやく保
健室に着いた。

俺は未だに気絶している委員長を抱えて「失礼します」と言い保健
室の扉を開ける。保健室の中には先生がいた。

ふっ、都合がいいな。

「あら、大和君。その抱えてる子は・・・二階堂君よね？ 一体何
があつたの？」

「俺と話している最中にいきなり具合が悪いと言つたんです。喋る
のも辛い様子でした。あまりに辛かつたようで今は寝ています。ベ
ッドに寝かしてやつてもらえませんか？」

「ええ、分かつたわ。この子は先生に任せて、大和君は教室に戻り
なさい」

「はい、分かりました。委員長をお願いします」

そう言って俺は保健室を出て、教室に戻った。

.....

教室に着くと、既に高町なのはは登校していた。アリサ・バニングスと月村すずかも一緒だ。

彼女達は俺のことを完全に許してくれているようで、今では普通に世間話をするような仲になっている。名前も流と呼んでくれている。本当に良い子達だ。

とりあえず挨拶をしておこう。日本家の使用人たるもの礼儀は常に欠かさず、だ。

「おはよう、高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずか。今日も三人で登校してきたのか？」

「あ、おはよう、流くん。私達はいつも一緒に登校してるよ」

「うむ、仲良きことは美しき哉。貴君等の美しき友情にこの大和流、

真に感動した」

「大げさね。そういえば流は知ってる？ 朝、二階堂が倒れたんだって」

うむ、情報は確実に浸透しているようだ。作戦成功だな。

「知ってるも何も、その後委員長を保健室まで運んだのは他でもないこの俺だ。委員長は今保健室のベッドで寝ている」

「あ、そうだったの。大丈夫かなあ」

高町なのは。彼女は本当に良い子だ。この子が今夜には魔法と関わり、過酷な運命を強いられることになる考えると非常に胸が痛む。

これも神の仕業か。こればかりはそうであろう。嘆かわしい……。

「まあ、授業が始まるまでには回復するだろうさ。………。そういう風に殴ったからな……」

「え？ 後の方が聞こえなかったんだけど」

「いや、何でもない。俺はそろそろ席に戻るとしよう。先生も来る頃だろうし」

そして俺が席に座ると同時にチャイムが鳴り、先生が入って来た。

そしてその後委員長が戻ってきた。

ジャスト授業が始まる直前。我が拳に狂いなし。

*

私、高町なのはは、授業を終えると屋上に行き、アリサちゃんやすずかちゃんと一緒に昼食を取ることにした。

「将来かぁ……」

爪楊枝に刺してあるタコさんウィンナーを眺めながら、さっきの授業の内容を思い出し言った。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、もう結構決まってるんだよね？」

「家は、お父さんもお母さんも会社経営だし……。いっぱい勉強してちゃんと後を継がなきゃ、ぐらいだけど」

「私は、機械系が好きだから……。工学系で、専門職がいいなあ、と思ってるけど」

「そつかぁ、二人とも凄いやね……」

「でも、なのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

「うん、それも将来のヴィジョンの一つではあるんだけど……。やりたいことは何かあるような気もするんだけど、まだそれが何なのかはつきりしないんだ。私、特技も取り柄も特にないし……」

「バカちゃん!」

いきなりアリサちゃんが私にレモンを投げつけてきた。

レモンは私の頬に張り付いた。・・・冷たいの。

「自分からそういうこと言うんじゃないの!」

すずかちゃんも続けて言った。

「そつだよ。なのはちゃんにしかできないこと、きつとあるよ」

「大体あんた、理数の成績はこの私よりいいじゃないの! それで取り柄がないとは、どの口が言うわけ?」

そう言ってアリサちゃんは私の頬を抓ってきた。

い、痛い・・・。

「だ、だってなのは、文系苦手だし! 体育も苦手だし!」

「ふ、二人とも、駄目だよ。ねえ! ねえったら!」

すずかちゃんの静止の声を無視してアリサちゃんは私の頬を抓ってくる。

うまく喋れず、そのまましばらくあうあうと叫んだ。

そしてやっとアリサちゃんが私の頬から手を放してくれた。

うう、まだちょっと変な感じがするの……。

そして食事を再開する。

「そついえばさ……」

アリサちゃんが手を止め話しかけてきた。

「流はどうするのかな」

「え？ どうして？」

「だってあの容姿でしょ？ 普通の企業じゃ雇ってもらえないと思うんだけど。……まあ、なんだったら家で働かせてあげるつもりだけど……」

「流くんか、確かにね。どうするんだろ・・・」

確かに私も想像できないの・・・。

スーツを着て職務に励む眼帯を着けた流くん・・・シユールなの・・・。

「俺なら、既に働く場所は決まっている」

・・・え？ 気のせいかな？ 確かに流くんの声が聞こえたと思っただけだ。

アリスちゃんとすずかちゃんの方を見ると、二人も聞こえたようで流くんの姿を探している。

「上だよ、上」

上を向く。

すると屋上に設置されているフェンスの上に流くんが立っていた。

「ちよ、あんた、どこから話かけてんのよ!？」

「うむ、確かにそうだな、頭上からで御免。大変無礼であった」

「そう言うことってんじゃないわよ！ 危ないでしょ！」

「そ、そうだよ流くん。降りたほうがいいよ」

「にゃ、お、落ちたら痛いじゃすまないと思うよ」

確実に死ぬと思うの……。

「む、これは気遣い痛み入る。では降りるとしよう」

そして流くんはフェンスから飛び降りた。

冷や冷やしたの……。

「でもあんた、なんてどこから現れるのよ……」

「誰かが俺を呼ぶ声がした。だから教室の窓からここまで上がって

来たというわけだ」

「窓からって……どうやって？」

「無論、上の階に飛び移りながらだ」

「き、危険すぎるの……。よくできるね」

「修行の成果だ。役目は果たしたようなので、これにて御免」

そして流くんは屋上から去っていった。

その後しばらく私達はぽかんとしていた。

なんだか嵐が通り過ぎたような気分なの……。

八話（後書き）

0時ジャストに投稿するつもりだったんですが少し遅れました。ちよっと残念です。

九話（前書き）

一度全部原作を見直したほうが良いかな・・・。
キャラの口調とかよく掴めない・・・。

九話

時刻は放課後。

俺は高町なのはを監視すべく一足早く教室から立ち去り、彼女の下校ルートで張っているという作戦にしようと思い、帰り支度をする。そのときアリサに話しかけられた。

「ね、ねえ。よかつたらなんだけど・・・あんたも一緒に帰らない？」

・・・これは困った。

以前の俺であれば嬉々として飛びついていたであろう甘言だ。だがしかし今の俺には何より大事な帝様の命令がある。

ここで一緒に下校すればより身近に監視できていいのではないか？
否、いざと言う時自由に動けなくなってしまう。

しかし彼女達には色々を負い目を感じている。彼女達の要望は可能な限り引き受けてやりたい・・・。

決断の時は・・・今・・・。

.....

「ねえ、今日のすずか、ドッジボール凄かったよね」

「うん！ かつこよかったよね」

「そ、そんなことないよ・・・」

「いやいや、そう謙遜するな月村すずか。君の動きは男子にも勝る素晴らしいものだった。誇っていいぞ」

「な、流くんまで・・・」

ああ、選んだよ。一緒に帰る方をね。

思えば、ユーノや思念体は家の魔導師達が監視してるんだ。そこまで焦る必要はなかったな。

それに彼女達は今日は塾なので、途中まで一緒に行くと言う感じだ。彼女達と別れた後でも時間はたっぷりある。

と言うわけで俺は高町なのはの監視を最優先にすることにした。だから一緒に帰って、身近で監視しようと言う結論に至った。

さて、問題はどこで別れるか、だ。

「ああ、こっちこっち。ここを通ると塾に行くのに近道なんだ」

「え？ そうなの？」

「ちよっと、道が悪いけどね」

来た、このタイミングだ。

「ふむ、では俺はここで別れるとしよう。俺の家の方向はあっちなのでな」

そう言って俺は彼女達の行く道と違う方向を指差す。

まあ、日本家の屋敷の位置は指差した方向に見える山の上だからな。嘘は言っていない。

ここで別れ、十分に距離を空けてから再度尾行することにする。

しかしそうは問屋が卸さない。

「何言ってるの。あんたも行くのよ」

「む？ 何故」

「女の子三人がもう暗くなる頃に、こんな危険そうな道を通ろうとするのに不安じゃないの？」

「では危なくない道を行けばいいではないか」

「う、うるさいわね！ いいからあんたも行くのよ！」

「解せぬ」

俺の反論はごとごとく無視され、結局彼女達に付き合っはめになった。

まあ原作のなのはとユーノの邂逅シーンは前世の是非ファンとしても生で見たいものだ。

む、どうやらまた前世のことを考えてしまった。いかんいかん、俺はもう大和流なのだ。軟弱な考えは捨て、帝様の命令を最優先にすべきなのだ。

しかし、ここで彼女達を無視して帰るわけにはいかぬ。

アリサ・バニングスの言うことも確かだ。

日本家の武人たるもの、常に国民の安全を第一に考えねばならぬ。ましてや俺がいなかったせいで彼女達をを危険にさらしてしまつては腹を切らざるをえない。

まあ俺がいなくて、通常通りの原作が始まるだけと思うが……。

その時、高町なのはの動きが止まった。

ユーノは近いか……。

試しに刀閃圏を半径500メートルほど展開してみる。そしたらユーノと思わしき生物と、それを近くで監視している日本家の魔導師を感知した。向こうも俺の刀閃圏に気付いたようだ。

「どうしたの？」

「なのは？」

アリサ・バニングスと月村すずかが心配そうに話しかけている。

「あ、ううん、何でもない。ごめんごめん」

「大丈夫？」

「うん」

とりあえず俺も声をかけておこう。

「体調でも悪いのか？」

「なんでもないよ。心配してくれてありがとう、流くん」

「どづいたしまして。ただ、何かあったらすぐに言えよ。不安になるから」

「うん」

「じゃあ、行く」

アリサ・バニングスの言葉を合図に俺達は再び歩き出した。

しかし、高町なのはは動かない。

そんなのはに再度月村すずかが呼びかける。

「なのはちゃん？」

「何をしているのだ高町なのは。日が暮れてしまっぞ」

「あ、うん」

ようやく高町なのはは動き出した。

しかし、原作を知らねばかなり不安になるな。この状況は。

俺達は再度歩き始める。しばらくすると念話が聞こえた。

『助けて!』

高町なのはの動きが止まる。

やはり彼女も聞こえたか。しかし俺は動じない。悟られてはいけない。

「なのは?」

「今、何か聞こえなかった?」

「何か?」

「何か、声みたいなの……」

「別に……」

「聞こえなかったかな……」

「うむ、俺もだ」

高町なのはは辺りを見回す。

するとまた念話が聞こえた。

『助けて!』

そして高町なのはがいきなり走り出した。

「「「高町(なのは)ちゃん!?!?!」」」

俺達は走り出した高町なのはを追いかける。

「多分・・・こっちの方から・・・」

そして高町なのはは止まり、しゃがみこむ。何かを抱えているようだ。確認するまでもない。ユーノだ。

そして俺達も追いついた。

百目を使い周囲を確認する。・・・いた。木の上に日本家の魔導師がいた。

「どうしたのよなのは? 急に走り出して」

「あ、見て。動物？ 怪我してるみたい」

「うん。うん。どうしよう・・・」

「どうしようって・・・とりあえず病院？」

「じゅ、獣医さんだよー！」

「ええと、この近くに獣医さんてあったっけ？」

「えーと・・・この辺りだと確か・・・」

「待って。家に電話してみる」

「その心配は無い。俺が案内しよう」

「え？ 本当？」

「無論だ。その動物のことも気になる。すぐに行こう。ついてこい」

そして俺は三人を連れ、獣医のところに向かった。

.....

俺達は獣医のところに来ていた。

フェレット状態のユーノを診終わった院長が言った。

「怪我はそんなに深くないけど、随分衰弱してるみたいね。きっと、ずっと一人ぼっちだったんじゃないかな」

「院長先生、ありがとうございます!」

高町なのはが院長にお礼を言う。

俺達も続けて言う。

「」「」「ありがとうございます」「」「」

「いいえ、どういたしまして」

院長は笑顔で言った。

うむ、良い院長だ。

そして俺達はユーノのもとに向かった。

寝ているユーノを見ながらアリサ・バニングスが院長に問う。

「先生、これってフェレットですよ？ どこかのペットなんですよか……」

「フェレット……なのかな？ 変わった種類だけど……。それにこの首輪に着いているのは……宝石、なのかな？」

院長がユーノの首に着いている宝石に触れようとする。そのときユーノは目を開け、起き上がった。

「あ、起きた！」

ユーノは何かを探すようにキョロキョロと周りを見回している。

ここで高町なのは目を付けるんだっただけ。しかし、高町なのはより圧倒的に魔力量が多い俺がここには俺の方に目を付けてしま

う。
だが、そこは抜かりない。ここまで奴に接近するのは予想外だったが、万が一のためにリミッターをかけておいたのだ。だから俺の今の魔力量は一般人と同じくらいになっている。

案の定、ユーノは原作通り高町なのはの方を見た。

「見てる……」

「なのは、見られてる……」

アリサ・バニングスが高町なのはに呼びかける。

高町なのははユーノを見たままボーっとしていたようで、アリサ・バニングスの呼びかけに気付くと少し慌てたようだった。

「え？ あ、う、うん。えっと、えーっと……」

高町なのははユーノに指を近づける。するとユーノは高町なのはの指をペロっと舐めた。

……フェレットの姿だが、これが人間だと分かってる俺はこの現場を見て非常に歯痒い思いになる。

このクソガキが二次創作で淫獣呼ばわりされる理由も分かる気がする。ええい、八つ裂きにしてくれようか……。

しかし彼女達は彼奴が人間であるなど微塵も知らない。よってこのクソガキの行動はペットが自分に懐いてくれる程度にしか感じない。

実際に彼女達は顔を綻ばせている。

そしてしばらくユーノを眺めていると、再び奴は気絶した。

「しばらく安静にした方が良さそうだから、とりあえず明日まで預かっておこうか？」

院長の提案に俺達は顔を合わせ頷きあう。

「はい！ お願いしますー！！」

「よかつたら、また明日様子を見に来てくれるかな？」

「「「分かりました！」「」」

元気の良い子達だな。俺も童心に帰ってみたくなる。

そしてアリサは時計を見て慌てだした。

「あ、やば！ 塾の時間！」

「ほ、ホントだ！」

「じゃあ院長先生、すみません。また明日来ます」

院長は笑顔で手を振って見送ってくれた。

「さて、では俺もそろそろ行くか。もういいだろう、アリサ・バニ
ングス」

「ええ、ありがとね流」

「また明日ね！ 流くん」

「じゃあね」

「うむ、また明日だ」

彼女達は走って塾へと向かっていった。

さて・・・ここからが本番だ。

「監視班はこのまま監視を続ける」

「御意」

「誘導班、いるか？」

「ここに」

「思念体の方はどうだ」

「今は身を潜めています。しかし、あの少年もといフェレットに目を付けているようです。今夜辺り襲いに来るでしょう」

「うむ、ここまででは順調。原作通りの展開だ」

さてさて、どうなるかな。

このまま原作通りに終わってくれればいいけど・・・。

.....

心配しすぎだったようだ。

案の定高町なのはユーノの指示によりレイジングハートの起動に成功。その後原作通りジュエルシードを封印し彼女はユーノの連れ帰宅。それを見届けた俺は屋敷に帰ることにした。

流石にもう暗い。小学生である俺がこんな時間に外をうろついているのはお巡りさんに補導されてしまう。

急いで帰るか……ん？

俺は目の前に光る物体があるのを確認した。それに近づき、拾い上げてみる。

これは宝石か。しかも形状どこかで……。

そしてこの宝石から感じる満ち溢れた魔力、これはもしや……むむ！？

俺は背後に気配を感じ、振り向こうとする。しかしその前に魔力の刃が俺の首に添えられた。

この黄色の刃……やはり……。

「そのジュエルシールドをこっちに渡してください」

「暗がりです、しかも後ろからいきなりの脅迫とは無礼千万。何奴」

「答える必要はありません。それをこっちに渡してください。そうすれば危害は加えません」

「分かってないな。脅しの前にまずは話し合いから始めるべきだ。そうしなければ平和的解決は望めない。親から教わらなかつたか？」

彼女、フェイト・テスタロッサの家庭の事情は知っている。

この言葉で動揺を誘い、一気に距離をとる。しかし動揺したのはこの子だけではないようだった。

突如上から気配を感じた。

「あの鬼婆からまともな教育を受けていたらこんなことしないよ！」

む、確か……アルフだったか……。原作通り、随分と感情的な奴だな。

上からの奇襲か……。悪くは無いが、随分とノ口いな。

俺はアルフの奇襲を難なく回避する。

「ちっ、避けるんじゃないよ！」

「使い魔か。随分とカラフルな狼だな……。面妖な」

「うるさい！ いいからさっさとそのジュエルシールドを渡しな！」

「おお、怖い怖い……。腹に石ころを詰めて川に叩き込んでくれようか、狼」

ふむ、急な展開にフェイト・テストロッサが置いていかれてるぞ。

主人より目立つとは、従者として失格だぞ。

「さて、俺はここいらで帰らせてもらう。まだ晩飯を食っておらんだ。腹が減って仕方ない」

「あ、こら！ 待ちな！ 逃げるんじゃないよ！」

「逃げるだと？ 勘違いするなよ狼。貴様等程度、仕留めるのは至極容易。生かされているのは貴様等なのだ。ではさらば」

俺は『韋駄天』を連続使用し一瞬で奴等から見えないところまで移動した。

この暗闇だ。顔は見られてないだろう。

後はこのジュエルシールドだな。ここで俺が下手に干渉すれば原作が狂う恐れがある。仕方ない、ここに捨てていこう。奴等にばれない

よう見つけにくいとるに置いておっつ。

よし、帰るか。

まだ原作での一話目だと言つのにこれか……。先が思いやられるな。

俺は天を仰ぎ、ため息を吐いた。

九話（後書き）

今回は一足早くテストタロツサさんの家のお子さんに出演していただきました。

それにしてもまだ一話なんですよね・・・。
先は長いです・・・。

十話（前書き）

「」は普通の会話

『』は電話、念話、不特定多数の人間の同じ台詞

「」はデバイスの音声

という風にします。

もしかしたら、度々変わるかもしれませんが。

十話

朝の6時。

日本家の屋敷の大広間、通称『太陽の間』と呼ばれる部屋で、流は帝に状況の報告を行っていた。

「一話目は無事終了いたしました、帝様」

「そうか、被害は僕も聞いてるよ。負傷者も出ず、損害もそこまで大きくないようで良かった」

「しかし、一つ問題が・・・」

「ん？ なんだい？」

「はい。昨晚俺が高町なのはの監視を終え、帰宅している途中、ジュエルシードを発見し、無印で高町なのはの敵となるフェイト・テスタロッサ、およびその使い魔のアルフと接触してしまいました」

「ほう、それで？」

「辺りは外灯も少なく、暗闇でしたので顔は見られてないと思いますが接触したことにより少なからず原作は変わるかもしれません」

「しかし、君の話を聞く限りではそのフェイトという子が、時空管理局が介入するまでに保有しているジュエルシードの数は4つ。月村邸で1つ、海鳴温泉の森で1つ、その際高町なのはとの決闘で1つ、そして街での戦闘での1つだったんだらう？　ということは君の行動によって原作が守られたと言う可能性もある」

「しかし接触したのもまた事実。これからはもう少し慎重に行動します」

「あまり意識しすぎるなよ。僕達がいる時点で原作に多少の変化は生じている。むしろ君の行動は褒められるものだよ。ジュエルシードの保有数の変化はこの国にとって一番困るものだからね。下手したら世界が減びかねないんだっけ？」

「はい。改めて近くでジュエルシードを見ましたが、アレに含まれる魔力量は異常です。世界が減びかねないというのは誇張ではありません。確かにありえます。世界とはいかずとも、確実に日本は滅びます」

「そうか……。それだけは阻止しないとね……。さて、次は神社だったね。魔導師を待機させておこう」

「お願いします。．．．では俺はそろそろ学校に行きます。早く行って高町なのは監視をしないといけませんから」

「あゝ、確かにそれはいいんだけど．．．まだ6時だよ？ 流石にまだ登校してないだろう」

「何を仰いますか！ 日本家の使用人、しかもその長たる者、常に完璧に！ かつ迅速に行動せねばなりません！ 時間は足りなくなるより余る方がいいのです！ では行ってきます」

そして俺は屋敷を出る。

ついぞと思い、昨晚の高町なのはの戦闘の被害を確認するため、一度昨日の病院に寄ってから学校に行った。

．．．．．

教室に着いたのは6時30分。

昨日より少し遅いな。まあ、高町なのはまだまだ来ないのでさしたる問題ではない。

昨日と同じく一人で過ごすか、と思い教室に入ると、そこには先客がいた。

「ふふふ、ふはははは。どうだ大和！ 僕の勝ちだ！」

教室にいたのは二階堂佐久間、通称『委員長』だ。

隈ができた目でこちらを見ながら、狂ったように笑っている。

勝ったのはめでたいと思うが、一つ解せないことがある。

彼は俺の一体何に勝ったんだろうか……。

試しに問うてみる。

「委員長よ、俺は一体君と何の勝負をしていたのだろうか」

「ふっ、知れたこと。俺はお前より早く来た！ よって飾りの称号
とはいえ委員長としての面子は保たれたと言っわけだ！ つまり僕
は勝ったのだ！」

うむ、さっぱり分からん。どうやら混乱しているようだ。だがしか
し彼の委員長としての責任感は素晴らしい。それは賞賛に値する。

「ほう、流石だ委員長。どの生徒よりも早く来て、自らの威光を示
そうとするとは中々の頑張り。生憎、時刻が早すぎるためこの場
には俺しかないが、その努力を称えよう」

「ふはは、そうだろうそうだろう。ふはは、あはははははは」

昨日俺より遅く来たことがそこまでショックだったのか。はたまた
別の理由か。

もうよい、委員長。もう眠れ。

俺は未だに笑っている委員長の延髄に手刀を決める。すると彼は糸
が切れた人形のように机に突っ伏した。彼にはしばらく休んでいて
もらおう。他の生徒に委員長のあの姿は些かショッキングだからな。

なに、授業直前には目が覚めるぞ。

.....

時刻は7時30分を回り、学校には既にたくさんの生徒が登校していた。

そして今日は珍しく、アリサ・バニングスと月村すずかだけで登校していた。

「おはよ、流」

「おはよう流くん」

彼女達が俺に挨拶する。

「おはよう、アリサ・バニングス、月村すずか」

俺も挨拶を返す。

「いつも早いね、流くんは」

「本当。いつも何時に家出てるのよ、あんたは・・・」

「今日は特に早く、6時には家を出て、6時30分に教室に着いた」

「ろ、6時!? 早すぎるでしょ!」

「す、すごいね、流くん・・・」

「うむ、だが俺より委員長の方が早く来ていたぞ。少し眠かったのか、今は寝ているが」

「二階堂くんが? 本当だ、寝てる・・・」

「随分とぐっすり眠ってるようだけど、起きられるのかな」

「大丈夫だろう。授業直前には起きるな。・・・そういっ

風にやったからな……」

「え？ 後の方が聞こえなかったんだけど」

「いや、なんでもない。気にするな」

「「？」」

そして彼女達は自分の席に向かい、鞆を置くと二人で話し始めた。

ふむ、高町なのはもう少し後に来るのかな。

予想通り、しばらくすると高町なのは「おはよー」と生徒に挨拶しながら教室に入って来た。

高町なのはが来たのを確認したアリサ・バニングスと月村すずかが彼女の方に寄っていく。

「なのは、昨夜の話聞いた？」

アリサ・バニングス高町なのはに尋ねる。

「え？ 昨夜って？」

「昨日行った病院で車の事故か何かあったらしくて、壁が壊れちゃったんだって」

ふむ、昨日の戦闘による被害だな。修理には我ら日本家も『日野一家』として手を貸しているからすぐに直るだろう。

「あのフェレットが無事かどうか、心配で・・・」

「うん・・・」

「あ、えっとね・・・その件は、その・・・」

高町なのはが事実をぼかしつつユーノのことを教える。

「そっかぁ・・・無事なのはの家にいるんだ」

「でも凄い偶然だったね。偶々逃げ出してたあの子と道でばったり会うなんて」

そして二人は顔を見合わせ「ねー!」と同意しあう。

高町なのはよ、君の頑張りは分かるが、その言い訳はちと苦し過ぎるぞ。小学生でなければまず疑ってかかるな。まあ、彼女達が親友同士だから信じたというのもあるか。

うむ、素晴らしき哉、友情。

しかし高町なのは、今すぐその引きつった笑みを止めたまえ。親友を騙すことによる後ろめたい気持ちは分かるが、怪しまれては全てが無駄になるぞ。

「ああ、それでね。なんだかあの子、飼いフェレットじゃないみたいで、当分の間家で預かることになったよ」

「そうなんだあ」

「名前付けてあげなきゃ！ もう決めてる？」

「うん、ユーノくんって名前」

「ユーノくん？」

「うん、ユーノくん」

それからしばらくするとチャイムが鳴り、先生がやってきて、授業が始まった。

その直前に委員長が目覚めた。

ジャスト授業開始直前。我が手刀に狂いなし。

*

先生の喋る声と、黒板に文字を書くチョークの音が教室に響く。

私はそれを聞いていると、いきなり頭の中でユーノくんの声がした。

これが今朝ユーノくんが言っていた念話っていう魔法なんだ。

『ジユエルシードは僕等の世界の古代遺産なんだ。本来は、手にした者の願いを叶える魔法の石なんだけど・・・力の発現が不安定で、昨夜みたいに単体で暴走して、使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあるし、偶々見つけた人や動物が間違っ使用してしまっ、それを取り込んで暴走することもある』

『そんな危ない物がなんで家のご近所に？』

『・・・僕の、せいなんだ・・・。僕は故郷で遺跡発掘を仕事にしているんだ。そしてある日、古い遺跡の中でアレを発見して、調査団に依頼して保管してもらったんだけど、運んでいた時空艦船が事故か、なんらかの人為的災害に遭ってしまった。21個のジユエルシードがこの世界に散らばってしまった。今まで見つけられたのはたった二つ・・・』

『後19個かぁ・・・』

そして授業が終了して次の授業が始まる。

「きりーっ」

クラス委員長の二階堂くんの号令を合図に立ち上がり礼をして、着席する。そして先生が話し始め、再び先生の声とチヨークの音が響く空間が出来上がった。

私はユーノくんに再び念話をかける。

『ん？ あれ？ でもちよつと待って。話を聞く限りでは、ジュエルシードが散らばっちゃったのって、別に全然ユーノくんのせいじゃないんじゃない？』

『だけど、アレを見つけてしまったのは、僕だから・・・全部見つけて、ちゃんとあるべき場所に返さないと駄目だから・・・』

『なんとなく、なんとなくだけど、ユーノくんの気持ち、分かるかもしれない。真面目なんだね、ユーノくんは・・・』

『・・・え？』

そこでユーノくんの声が止む。

先生の声に意識を戻すと、先生が軽い冗句を言ってクラスの空気を和ませている。

そしてまたユーノくんの声が聞こえた。

『えっと・・・昨夜は巻き込んだじゃって、助けてもらって本当に申し訳なかったけど、この後は僕の魔力が戻るまでの間、ほんの少し休ませてもらいたいただけなんだ。一週間・・・いや、五日もあれば力が戻るから、それまで・・・』

『・・・戻ったら、どうするの？』

『また一人で、ジュエルシードを探しに出るよ』

『・・・それはダメ』

『だ、だめって・・・』

『私、学校と塾の時間は無理だけど、それ以外の時間なら手伝えるから』

『だけど、昨日みたいに危ないことだってあるんだよ？』

その言葉を聞いて、頭に昨夜の戦いを思い出す。

思わず「ふふふ」と笑ってしまう。それを見た隣の子が不審そうにこちらを見る。しかし、それほど気にすることもなかったのか、

すぐに黒板の方に目を向けた。

気をつけなきゃ。

そして再び念話を続ける。

『だって、もう知り合っちゃったし、話も聞いちゃったもの・・・ほっとけないよ。それに、昨夜みたいなことが近所で度々あったりしたら、皆さんのご迷惑になっちゃうしね。ユーノくん、一人ぼっちで助けてくれる人いないんでしょ？ 一人ぼっちは寂しいもん・・・私にもお手伝いさせて!』

そして授業終了のチャイムが鳴る。

座ったままで堅くなった体を解しながら念話を続ける。

『困っている人がいて、助けてあげられる力が自分にあるなら、その時は迷っちゃいけないって・・・これ、家のお父さんの教え』

その時誰かが私の髪を掴む。とっさのことでバランスを崩し、ばたばたと慌てる。

犯人はアリサちゃんだった。すずかちゃんと二人して、慌てた私を見て笑ってる。私は二人をじっとと恨めしそうに睨む。

アリサちゃんは笑いながら手を振って、簡単に謝罪した。

放課後になり、アリサちゃん、すずかちゃんと一緒に帰ることにする。

念話は帰りながらも続けていた。

*

まる聞こえなんだよね、この念話。

いやいや、思ったより簡単だったな。念話の盗聴という奴は。

この技術は、元犯罪者である直属親衛隊所属の唯一の魔導師ジヨネス・バートンさんに教えてもらったものだ。効率良く管理局の手か

ら逃れるためには必須技術だったらしい。

しかし高町なのは、とても素晴らしい考えの持ち主だ。俺が言うのもなんだが、同じ小学生とは思えない。

他人のために自分から進んで頑張れる人はそうそういないからな。彼女のような人は珍しい。

だからこそ悔やまれる。こちら側の世界に入ってしまったことが・・・。決まっていた運命とはいえ、残酷なものだ。もし彼女が魔法を知らずに生きていたらどうなっていたか・・・。

まあ、考えるだけ無駄か。もとよりここは創作の世界。ifを求めるなぞ無駄。

俺達の使命は、彼女がこれから巻き込まれる事件の数々からこの国を守ること。そのためなら全てを斬り捨てるくらいの覚悟が必要。最悪、原作キャラとて斬り捨てる覚悟が・・・。

「おい、大和？ 何ボーっとしてんだ？ もう放課後だぞ？ もしかして眠いのか？」

話かけてきたのは委員長だ。朝の狂った様子はもう見えない。

「いや、少し考え事をしてただけだ・・・。心配をかけた、すまん」

「いってことよ。それよりさ、この後校庭でサッカーしないか？
今メンバー集めてんだよ」

ふむ、確かこの後、神社で戦闘があるんだっとな。

委員長にはすまないが、ここは断るか　　ん？

いきなり俺の携帯電話が鳴った。画面には『帝様』と映っている。
何の用だろうか……。

とりあえず出る。

「もしもし、流です」

『気にしなくていいよ。現在高町なのはは僕が見張ってる。神社には日本家の魔導師だっている。安心して君は友人と遊んでいたまえ』

そして電話が切れる。

それと同時にバツと後ろを向く。誰もいない……。周囲を見渡して
みるが、やはり怪しいものはない。

……何故知っているんだ？　　というか、さりげなく俺
の心が読まれている……。

改めて自分の主の凄さを実感する。同時に感謝する。

「委員長、俺も参加する。メンバー集め、手伝わせてもらおう」

「そうこなくっちゃ！ じゃあ行こうぜ！」

「応」

せっかくの休みだ。存分に楽しませてもらう。

*

「ふう、これで、いいのかな・・・」

「うん。これ以上ないくらいに」

ユーノの賞賛を聞いたなのはは笑顔になる。

しばらくすると、気絶していた犬の飼い主が目を覚ます。

「・・・ん・・・あれ？　転んで頭でも打ったかな・・・」

その飼い主に、先程ジュエルシードから解放された犬が駆け寄る。

その飼い主は犬を抱きかかえると、神社から去っていった。

なのはは去っていく犬とその飼い主を見ながら呟いた。

「お疲れ様・・・かな？」

「うん、そうだね」

なのはとユーノも神社を後にする。

そして、誰もいなくなったはずの神社に突然人が現れた。

数は6人。その内の一人、日本帝は、神社を後にするなのとはユーノを見ながら言う。

「これがジュエルシード……。なるほど、流の言うことは正しいな。これほど危険なものがあと19個もこの町に散らばっているのか」

「回収しようと思えば、いつでもできますが……」

「いや、それはできない。流の言う原作通りなら、この町に与える大きな被害はこの後に起こる大樹のみ。ここで僕等が介入して、余計な混乱を招くような事態は避けたい。仕方ないが、僕等にできることは監視しかないってことだ」

「……辛いものですね。町が破壊される惨状を見ていることしかできないのは……」

「……そうだね……」

帝は強く拳を握る。誰にもぶつけることのできない怒りを自分自身にぶつけることで、落ち着くことができる。

ジュエルシードの件が終わっても、より危険な災いがこの地に起こ

る。本来なら自分達で終わらせてしまいたい。全てを、今すぐにも。

しかし、できない。やるわけにはいかない。

「……引き続きジュエルシードの搜索を続ける。見つけても手は出すな。あくまで位置の確認だ。もし発動した場合、高町なのはが現れるまでは被害を最小限に抑えるよう誘導しろ」

「『『『御意』』』」

魔導師達の姿が消える。

帝はそれを見届けると、屋敷に戻ることにした。

十話（後書き）

戦わせたい。

無双させたい。

だけどタイミングがない。

今後の展開について少し悩んでおります。

十一話（前書き）

ちよいと長いかな？

十一話

深夜の学校。本来、生徒も教員もいなかったはずのその場所で、一人の少女がこの世の物とは思えぬ異形と戦っていた。

少女の名は高町なのは。対する異形はロストログリア・ジュエルシードによって生み出されたもの。

そしてその戦いは既に終盤を迎えていた。

「リリカルマジカル！ ジュエルシード、シリアル??、封印！」

[Sealing]

その声と共に、異形が光に包まれ、砕け散る。そしてそこから一つの宝が出てきた。ジュエルシードである。

レイジングハートは出てきたジュエルシードを回収する。

「なのは、お疲れ様」

労いの言葉を投げたのは、世にも不思議な喋るフェレット・・・ではなく、フェレットに化けた少年、ユーノである。

事を終えたなのはとユーノは学校から去っていく。

そして木の上からなのは達を監視していた少年もまた、なのは達が去っていくのを確認すると姿を消した。

*

おはよう、諸君。俺は大和流である。

本日は日曜日なり。本日は晴天なり。

実に素晴らしい。こんな日は外に出て、のんびりと散歩に興じるのが一番だろう。

しかし解せぬ。解せぬのだ。

「皆がんばれー！　こら、流！　あんたもしっかりやりなさい！」

「流くん、がんばってー！」

何故・・・何故俺はサッカーなどしているのだろうか・・・。いや、理由は分かっている。

そう、アレは今朝に遡る・・・

～回想～

『太陽の間』で俺は帝様に昨晚の戦闘の報告をしていた。

「これで、高町なのはの保有するジュエルシードは3個。順調に原作は進んでいます」

「うん。だけど、この次が一番被害の大きい事件じゃなかったかな？」

「……はい、本来なら発動前に俺は処分したいですけど……」

「いいよ。気持ちは僕も同じだ。だから発動した時、少しでも負傷者を減らすように避難誘導をしてくれ。それが僕達にできることだ。何もせず見ているよりはずっといい」

「……分かりました」

重い空気が部屋に漂う。

その時、いきなり襖が開いた。

入って来たのは雪政だ。

「帝様、いるっすか？」

「雪政、入る前にちゃんと声をかけろ。敵襲かと思って斬り捨てるところだったじゃないか」

「帝様、冗談でも怖すぎるんでそう言う事言わんでください」

「悪かったね。ところで、何か用かい？」

「ああ、今日河川敷で俺が助っ人としてよく出ていた翠屋JFCが試合するんですよ。ちよっくら一緒に見にいかないっすか？」

「翠屋JFCというと、土郎さんがいるだろう。前にも言ったと思うけど、僕はあまり彼等の前に姿を現さないほうがいい。だから遠慮しておくよ」

「あゝ、そうだったっす・・・アレ？ 流？ お前いつからいたの？」

「・・・最初からいたよ、この戯けが・・・！」

「ああ？ なんだとメエ・・・喧嘩売ってんのかコラ・・・！」

「先に喧嘩を売ってきたのはそっちだろう・・・！ 表へ出る。どちらが上かを分からせてやる・・・！」

「上等だコラ・・・。後で後悔すんなよ・・・？」

「それは俺の台詞だ……。さあ、ついてこい」

「待て、流」

そして俺と雪政が部屋を出ようとする、がその前に帝様が俺を呼び止める。

そして、帝様から凄まじい威圧感が放たれる。

俺達は思わずすくみあがってしまった。

「君はまず高町なのはの監視と言う役割があるだろう。確か、さっき雪政が言ってた翠屋JFCの応援に彼女は行ってるとるんじゃないかな？ 君はそれを無視して、喧嘩を優先するのか？」

帝様から放たれる威圧感が場を支配する。

俺も雪政も、恐怖のあまり体が震えてしまう。

……殺される……下手なことをすれば一瞬で斬られる。そんな考えて頭がいっぱいになる。

それでも精一杯口を動かし、言葉を返す。

「す、すみませんでした帝様……。で、ではこの大和流、帝様の命に従い、高町なのはの監視に向かいます……」

「ああ、気をつけてね。それと、さっきも言ったけど土郎さんも同じ場所にいるはずだ。あの人に警戒されては今後彼女に近づくのは困難になりかねない。だから刀は置いて行くんだ」

「そ、そんな……。我が魂とも言つべき愛刀を置いて行けと？ そんな殺生な……。それに刀がなくてはいざと言う時戦えません」

「拳術があるだろう？ それに君には例のアレもある」

「た、確かにそうですが……」

「つべこべ言うんじゃない。全ては国のためだ」

「わ、分かりました……」

アレか……。できればまだ使いたくはないんだが……。

「では、行ってきます」

「ああ、行ってらっしゃい」

「おい、流！ テメエ、帰ったら決着つけるぞ！」

「・・・雪政・・・少し黙れ・・・」

「ひっ・・・す、すいませんでした・・・」

ふはは、ざまみる雪政。

少し良い気分になりながら俺は屋敷を出て、河川敷へと向かった。
った。

.....

河川敷に着くと、そこにはたくさん少年がいた。

どうやらまだ試合は始まっていないようで、パス回しなどをして
いた。

ふむ、今はアップ中か。さて、高町なのはは……いた。

ターゲット
目標である高町なのははアリサ・バニングス、月村すずかと一緒に
いた。そして彼女達の横に立っているのは……何者だ？ 全く隙
がない。なるほど、アレが高町士郎か。

二次創作でチート扱いされる理由も頷ける。戦わずとも俺には理解わかる
奴は強い。

だが……俺の方が強い。強くとも所詮は人間の内の話。直属
親衛隊クラスはありそうだが、俺や父さん、御國様や帝様には到底
及ばない。直属親衛隊でも上位の奴には勝てないだろう。

だが、刀を持って行かない方がいいという帝様の言葉の意味も今な
ら分かる。奴との距離は10メートル以上あるのに、奴は俺に気付
いている。それでいて少し警戒されている。見られていることにも気
付いているのだろう。

これ以上の観察は任務に支障が出かねない。

俺は高町士郎から視線を外す。すると奴も俺への警戒を解いた。

あまり近づきすぎると良くないな。大人しくここで見ているか

「あ！ アレ、流じゃない？ 流ー！ そんなところで何してんのよー！」

気付かれた。

当たり前だ。高町士郎ばかり警戒していて、彼女達への警戒を怠っていた。

何たる失態……。いつそ殺せ……。

少し自己嫌悪に陥りながらも、声をかけたアリサ・バニングスに返事をする。

「散歩をしていたいたら偶然サッカーの現場に出くわした。やることもないので見ていたのだ」

「え？ 何？ 聞こえない。近くに來なさいよー！」

うつむ、已む無し……。

俺は土手を降りて、アリサ・バニングスの方に寄って行く。そして再度同じ台詞を言う。

「散歩をしていたいたら偶然サッカーの現場に出くわした。やることもないので見ていたのだ」

「ふーん、じゃあここで見なさいよ。そのほうが見やすくいいでしょ?」

くう、良くも悪くも予想外。

思わぬ事態に俺は少し焦る。

その時、アップをしていた少年の一人が、足を引きずりながら高町士郎に寄っていく。どうやら怪我をしたらしい。

しかもその少年、どうやらスタメンの一人だったらしく、高町士郎や他の選手達も困っていた。まあ、代えの選手もたくさんいるから大丈夫だろう。

しかし、そのとき事件は起きた。

何を思ったのか、アリサ・バニングスが高町士郎の所に行き、突然言った。

「おじ様、流をいませんか?」

「え？ 流って・・・もしかして、その眼帯の子のことかな？」

「はい！」

高町士郎は俺を見て言った。

「君、名前はなんて言うのかな？」

「大和流です。以後お見知りおきを・・・」

できれば今すぐ忘れてくれ。

「丁寧な子だな。君、サッカーは得意か？」

「いえ、そんなことはありません。精々、体育の時間にやる程度で、そこまで得意では・・・」

「そうか・・・」

よし、このまま押し切る。

しかし神は俺がお嫌いなようだ。

「嘘つくんじゃないわよ。あんたこの前、クラスの男子達とサッカーした時すごく上手かったって聞いたわよ」

「……おい誰だ、そんなこと言ってた不届き者は」

「あんたがいない時に教室で二階堂が大きな声で言ってた。『あいつは天才だ、このまま成長したらメツシにだって勝てる』とか『一対全員でやったけど、誰一人として奴からボールは奪えなかった』とか『自陣のゴール前からシュート打って入れやがった』って言うてた。他にも」

おい、誰かこの子を止める。

高町なのはと月村すずかの尊敬の眼差しが俺に突き刺さる。高町士郎や他の選手も俺に興味を示したようだ。

というか委員長、盛りすぎだ。流石の俺もメツシには……いや、身体能力で押し切れれば勝てるか？ いや、技術力で圧倒的な差があるから無理か？

ともかく、委員長にはいつか復讐してやる。

「そんなに凄いのか君は……」

「あ、いや、俺は・・・」

「流くん！」

高町なのはが大声で俺を呼ぶ。

「な、なんだ高町なのは・・・」

「お願い・・・出て。このままじゃ、みんな試合できない」

「い、いや、だから代えの選手が・・・」

「お願い・・・」

高町なのはの目が潤む。

おい、それは反則だぞ。

.....仕方ない.....。

〜回想終了〜

ざっとこんな感じだ。

その後ユニフォームに着替えさせられ、こうして試合に参加しているのだ。

とりあえず自陣の真ん中辺りで待機しておく。

本気を出すわけにはいかんからな。手加減してやるか。

そう考えていると俺の足元にボールが転がってくる。敵チームの選手たちが一斉に俺に向かってくる。

ふむ、敵陣のゴール前に味方がいるな・・・彼にパスを出そう。

そしてボールを蹴る。手加減してだ。

しかし、パスのつもりで蹴ったボールは凄い速さで味方に向かう。あまりの速さに恐れをなしたのか、味方は俺のパスを避ける。

ボールはそのままゴールに向かい 入った。

「ゴール！」

審判が叫ぶ。

高町なのは達も歓声をあげる。

おいちょっと待ってくれ。そんなつもりじゃなかったんだ。

その後も俺は味方にパスを出し続ける。しかし、皆避ける。そしてゴールに入る。

この繰り返しだ。

皆は俺に駆け寄って来て次々に賛辞をする。貴君等、俺ばかり褒めているが、さつきからキーパーも中々素晴らしい働きをしているぞ。彼も褒めてやるべきだ。

結果俺達は勝った。俺とキーパーの働きによって10対0という圧倒的なスコアだ。

原作だと2対0ではなかったか？ 俺がいることで原作になんらかの変化は生じると思ったが、まさかこんなところでは……。

しかしその後は原作通り、高町士郎が俺達選手のために翠屋を貸しきって食事をご馳走してくれた。

他の皆が、それぞれの友達と集まって和気藹々と食事を取っている中、俺は一人で黙々と食事を口に運んでいた。

そんな俺に高町士郎が近寄ってきて言った。

「どうかな流君。家の料理は」

「大変美味でございます。素晴らしい腕前だ。ホテルのシェフにも引けを取らない」

「ははは、そんなコメントをしてくれた小学生は君が初めてだよ。ありがとう」

「いえ、どういたしまして」

「ところで流君。どうして君は眼帯なんかしているんだ？ 目を怪我してるのか？」

「……言わなければ駄目ですか？」

「いや、言いたくないなら無理して言わなくても良い。ただちょっと気になってね」

「そうですね。できれば言いたくないことなんで……すみません」

「いいよいいよ。いきなり聞いた俺も無礼だった」

そして高町士郎は別の子の所に行って、試合の感想を言い合っている。

俺は、キーパーだった子に視線を向ける。

彼はマネージャーと恋仲のようで、二人して仲睦まじく話している。

この二人が原因であの災害が起こるのか……。

気を引き締める。本来の役目を果たそうと思い、俺は高町士郎に一言帰ることを伝えると店を出た。

店の外には高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずかがいて、ユーノに芸をさせて遊んでいる。そしてアリサ・バニングスが帰ろうとする俺に気付いた。

「流、もう帰っちゃうの？」

「うむ、用事があるのでな」

「そう、じゃあまた明日、学校でね」

「じゃあね、流くん」

「また明日ね」

高町なのは、月村すずかも俺に別れを告げる。

「ああ、ではまたな」

俺は翠屋から数百メートル離れると、高町士郎に気付かれないギリギリの範囲で刀閃圏を展開し、待機する。

翠屋から皆が出てきた。どうやらもう解散らしい。

そして皆はそれぞれの家の方向に向かって歩いていく。件のキーパーの子とマネージャーは合流し、二人並んで歩き出す。

そして俺は尾行を開始する。

尾行を続けること30分。彼奴等、家の距離遠いな。まあ、二人で喋りながらゆっくり歩いているというのもあるが……。

そして二人は横断歩道の信号が変わるのを待ったため、一旦足を止める。

二人は相変わらず仲睦まじく話している。

そして、少年の方がバッグに手を入れ、中から小さな宝石を取り出した。

間違いない、ジュエルシードだ。

少年はそれを彼女にプレゼントしようとする。それを受け取るようにして二人の手が重なった瞬間、まばゆい光が二人を包んだ。

光は大きくなり、巨大な木の根となって町中を這う。

「とんでもないとは思っていたが……これほどは……」

突如、後ろから叫び声が聞こえる。

振り向くと、女性を木の根が押しつぶそうとしていた。

「くっ！ 『墮天』！！」

俺は『墮天』で木の根を破壊する。女性は無事なようだ。

「今すぐ逃げろ！　ここは危険だ！」

女性は走って逃げる。

あちこちから悲鳴が聞こえる。

くっ、刀なしでは一つずつしか相手にできない……。

できればアレは使いたくない。下手したら原作が狂う恐れがある。だが、このままでは……。

迷いが募る。自分を見失っていく感じた。

その時だった。

「キヤアアアアアアア！」

一際大きな叫び声が聞こえる。声のした方を見ると子供が無数の木の根に襲われている。

それを見た時、俺の中でなにかが切れた。

『韋駄天』で子供に近づき、拳で木を破壊する。

「……無事か？」

「……うん！　ありがとう。お兄ちゃん……」

「そうか……。よし、急いでここを離れるんだ」

そして子供が走り去っていく。

迷いは吹っ切れた。

躊躇ってなどいられない。

俺が最優先にすべきは任務以上に国民の安全だ。

それを脅かそうとするものがあれば全力で排除する。

それが日本家オシたちだッ！

俺はポケットに手を突っ込み、中から小さな宝石を取り出す。

そしてそれを天に掲げ、叫ぶ。

「
」
声紋認証『大和流』と断定

『
カグツチ
軻遇突智』起動します

十二話

俺の体を光が覆う。そしてその光が解けると、俺は普段の服装ではなく、黒で統一された衣装に簡単な防具が装着されているという姿になった。これが俺のバリアジャケットだ。ちなみにこの衣装にはフードもついているので顔を隠すこともできる。暗殺にも適した、動きやすいバリアジャケットである。

そして起動した軻遇突智はガントレットとなつて俺の右手にあつた。

できれば無印では使いたくなかつたが、今回は別だ。日本家本来の役割を優先する。

コイツを使いたくなかつた理由の一つは高町なのはに俺のことを気付かれ、原作が狂う可能性があるからというのが一番だが他にもある。それは

「ヒヤハハハハ！！！！ 久しぶりの娑婆だぜえ！！！」

コイツが最高にイカれたデバイスだからだ。

このデバイス『カグツチ軻遇突智』は、ジョネスさんに作ってもらった物だ。元犯罪者のジョネスさんが面白半分でAIを構築した結果、世の中の精神異常者も吃驚なイカれデバイスが出来上がったと言うわけだ。

もしこんなのを使つてると高町なのは達に知られたらどんな反応をするか怖くて想像できない。

「おはよう、軻遇突智。久しぶりの起動だ。不調はないな？」

「ヒヤハッ！！ 不調どころか最高の気分だぜ！ 今なら硫酸野郎ジョン・ジョージ・ヘイケもブルっちまうような殺人ができそうだぜ！！」

「頼もしい限りだが、本当にやるなよ？ では 出陣だ！！」

「イエッサー！！ マスター！！」

俺は跳躍し、近くのビルの上に立つ。そして軻遇突智を装着した右手を、未だに止まらず町中を這い続ける木の根に向ける。

「軻遇突智、リミッターを外すぞ」

「いいね！ そうこなくっちゃ！！！」

俺はリミッターを外す。すると、体の中から溢れんばかりの魔力を感じる。

久しぶりの感覚だ。最近ずっとリミッターかけたままだったからな。

「よし、全力で行くぞ！ 『破軍』！！！」

「大地もろとも焼き尽くせってなあ！！！」

軻遇突智から放たれる破壊の奔流。それは木の根を次々と破壊する。

「ヒヤッハア！！ 絶景だねえ！ 最高の見世物シヨウだねえ！！ 一度しか味わえない絶頂感だねえ！！！」

相変わらず軻遇突智はテンションが高い。しかしこの性格のおかげで少しは勇気が出た。

流石に破壊を楽しむのは無理だが・・・。

「マスター！ まだまだ壊し足りねえぜ！ さっさと次をやるうぜ！！！」

軻遇突智は俄然やる気のように、俺に破壊を催促してくる。

さて、どうやってコイツを落ち着かせようか・・・。まだ高町なのはは現れてないから俺のことにはまだ気付いてないはず。だけどこれ以上、今みたいな大技を続けると流石に気付かれるかもしれない。

俺が軻遇突智の対処法を考えていると、別のビルから大きな魔力を感じた。

これは・・・ようやく現れたか、高町なのは。既にバリアジャケットも纏っている。

念のため、バリアジャケットに着いてあるフードを被っておく。これで一目で俺とは分からないだろう。

「マスター、例の小娘が現れただぜ。どうする？」

「彼女が現れた以上、『破軍』みたいな大技は出せない。それにここにいると俺が危ないな。仕方ない・・・軻遇突智、撤退と攻撃を同時に行うぞ」

「ってことは、アレか？」

「うむ」

「アレは酔いそうになるから嫌いなんだよ。吐いたらどうする」

「デバイスが何を言うか。機械が吐くなんて聞いたこともない。それにアレを使った方が普通に飛ぶより圧倒的に速い」

「ちっ、了解しましたよ、マスター。じゃあ、行くぜ。『バリアロ
ード』！」

*

「ひどい・・・」

私は町の惨状を見て眩く。

「多分、人間が発動させちゃったんだ。強い思いを持った者が願

をこめて発動させた時、ジュエルシールドは一番強い力を発揮するから……」

ユートくんが私の肩に上って説明してくれる。

やっぱり、あの時の子が持ってたんだ。私、気付いてたはずなのに……。こんなことになる前に、止められたかもしれないのに……。

「なのは……」

ユートくんが私を見て心配そうに呟く。

私のせいだ……。私がちゃんとしていれば、こんなことには……。

その時だった。

何かを蹴るような音が聞こえる。一体なんだろうと思って、俯いていた顔を上げる。

空中には無数の魔方陣ができていた。不規則に、しかし何かの道のように、無数の魔方陣が空中に描かれている。

「アレは……防御魔法？　なのは？　アレは君が？」

「う、ううん、違うよ。私じゃない」

そしてさっきの何かを蹴るような音が段々と大きくなってくる。

その音の方を見ると、私は吃驚した。

人が、空中に描かれている魔法陣を蹴りながら移動している。

一つ蹴っては、また次の魔方陣に向かって飛び、そしてまたそれを蹴って次に移る。そして、それを繰り返しながらも、町中に広がっている木の根を破壊している。

「別の魔導師！？ 何て移動の仕方、しかもすごく速い・・・」

ユーノくんがそれを見て驚愕している。

そう、何よりも驚くのはあの異常な速度。やっていることは単純なのに、新幹線みたいな速さで移動している。

速すぎる上に、フードを被っているから誰がやっているのかさっぱり分からない。

そして謎の魔導師さんは私の前を通り過ぎると、あっという間に去っていった。

謎の魔導師さんのおかげで大分木の根が減っている。

後は・・・私がやらなきゃ・・・。

「アレは・・・何だったんだろう・・・。一体誰があんな・・・なの？」

「ユーノくん、どういつ時はどうしたらいいの？」

「え？」

「ユーノくん！」

「あ、うん、封印するには接近しないと駄目だ。まずは基となる部分を見つけないと。でもこれだけ広い範囲に広がっちゃうと、どうやって探していいか・・・」

「基を見つければいいんだね？」

「え？」

私はレイジングハートを掲げる。

「Area Search」

レイジングハートから光出し、私の周りに魔方陣ができる。

「リリカルマジカル・・・探して！ 災厄の根源を！」

そして、町中に光が散らばる。

目をつむると、町中の様子が頭に流れ込んでくる。あの魔導師さんのおかげで、大分探しやすい。

そして、一際大きい木の中で、一組の男女が光に包まれている映像が流れた。

「 見つけた！！！」

「 本当！？！」

「 すぐ封印するから！！！」

「ここからじゃ無理だよ！ 近くに行かなきゃ！」

「できるよ！ 大丈夫！」

私はレイジングハートに呼びかける。

「そつだよね、レイジングハート？」

[Shooting Mode · Set up]

レイジングハートは私の問いに行動で返す。

そしてレイジングハートは形状を変え、シューティングモードとなる。

私は変形したレイジングハートをこの災害の基がある方角に向ける。

「行って！ 捕まえて！」

レイジングハートから桃色の光が放たれる。

光は一直線に基へと向かう。そして光は基を捉えた。

「Stand by・Ready」

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル？、封印！」

*

俺は高町なのはが封印するところを500メートル程離れたビルの上から見ていた。

既にリミッターをかけたので追跡は無理だろう。立つ鳥跡を濁さず、つてな。

「それにしても、国民の安全のためとはいえ、原作にないことをしてしまったのは事実。帝様からお叱りを受けるだろうな」

「おいおい流石に帝の旦那も大目に見てくれるだろ。俺達は使命に従っただけだぜ」

「その通りだよ流。君は何一つ悪くない」

突然後ろから帝様の声がしたので驚いた。振り向くと、帝様と雪政がいた。

「み、帝様・・・何故ここに？」

「僕も一部始終見させてもらったんだ、別の場所からね。それにしても流、君の中で僕はそんなにも酷い人間なのかい？」

「い、いえ、そんなことはありません」

「原作に介入したことにより少なからず影響は出る。確かに僕達はそれを恐れて介入をあきらめた。でも君はそれよりも日本家の使命を優先した。これを咎める理由はない」

「しかし・・・」

「くどいよ流、それにもう過ぎたことだ。過ぎたことをいつまでも言っているより次のことを考えるべきだ」

「そうだぜ流。悔しいが、今回はテメエが正しい。それなのに惨めな面してんじゃねえよ。誇れ、胸を張れ」

「！！　あの・・・雪政が・・・デレた・・・？」

「やっぱぶっ殺すぞテメエ！！！」

「落ち着け、雪政。とりあえず今回の君の行動は不問とする。でも次からは気をつけなよ」

そういつて帝様は俺に笑顔を向ける。

俺は帝様に土下座をする。

「感謝します、帝様」

「ヒヤハハハ！！ 流石は帝の旦那だ！ 器がでかいねえ！！」

「おい軻遇突智、うるさいぞ。お前の役目は終わった。もう眠れ」

「おいふざけんなよ！ 久しぶりの娑婆だつてのにもう終わりかよ！ もっと暴れさせろやあ！！」

「次回な。停止しろ、軻遇突智」

「おい、ちよつと待て・・・や・・・テ・・・メエ・・・
『軻遇突智』停止します」

停止といつても、このAIをおとなしくさせるだけだ。こんなのを常時起きたままにしておくとうるさくて敵わない。だから以前起動した時にジヨネスさんに頼んでON/OFFができるようにしてもらったのだ。もちろん常時起きたままにすることもできるが・・・。

軻遇突智を停止すると、俺達は屋敷に帰ることにする。

次は月村邸か・・・。

侵入方法考えておかなきゃな。

あ、そうだ。まずやるべきことがある。

危うく忘れるところだったよ・・・復讐を・・・。

*

俺は二階堂佐久間。自分でも随分字数の多い名前だと思っている。
この名前のおかげでテストの時に非常に苦勞する羽目になる。

俺は今日友達と遊んでいた。でも親がいきなり帰ってくるように言
ってきたから渋々家に帰った。

後で聞いた話だと、近くで意味不明な災害があったらしい。

現在の時刻は夜の10時。俺は自宅でのんびりテレビを見ていた。

『今日、海鳴市内で、巨大な木が生えるという事件がありました。その木は、午後5時頃突然消えたということですが、その被害は大きく警察は』

「おいおい、怖いなー。俺結構危なかったんじゃないか？ 前にも近くの動物病院の壁が派手にぶっ壊れたって事件があったな、何か最近妙なことが多いなあ・・・」

その時俺の携帯電話がなった。

誰だ？・・・非通知？ 怖いな・・・出るべきか？ いや、無視するか？ いいや出てしまえ。

「もしもし、誰？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「おい、誰だって聞いてん」

「

『オマエヲコロス』

「え？」

そして電話が切れた。

・・・・・・え？

「怖！！ え！？ 何これ！？ めっちゃ怖！！」

そして次はメールが来た。

差出人は不明。そして画面には「オマエヲコロス」という文字が画面一杯に書かれている。

なんだよこれ！？ 怖い怖い怖い！！！！

そしてその日、俺は眠れなかった。

*

俺は携帯電話をしまう。

明日どうなってるかが楽しみで思わず顔がにやける。

「ん？ 流、何かいいことでもあったのかい？ 随分にやけているけど」

「あ、いえ、何でもありませんよ帝様。ただちょーっとささやかな仕返しというものをしてみただけです」

「？ まあいいけど、そろそろ寝なよ。明日も忙しいんだから」

「はい、分かりました」

そして帝様は自分の部屋に戻っていく。

俺は部屋に戻り、電気を消して布団に入る。今夜はよく眠れそうだ。

ふはは、いたすら作戦完了ってね。

十二話（後書き）

やっと原作の三話を終えました。

このままじゃ無印が終わるのは随分後になりそうだ。

後、流君がやった移動の具体的な動きが知りたいって人はy o o u
tubeで

第3次スーパーロボット大戦 終焉の銀河へ 真・ゲッター技集

と言う動画のゲッタートマホークという技を見てください。

大体分かります。

ゲッターマジカツコイイ

それでもよくらからない人はめっちゃ速い壁キックを連続で行って
るイメージで。

十三話（前書き）

徹夜してそのまま執筆したんで少しおかしい文章になってるかも
りません。

十三話

早朝。海鳴市に太陽が昇る頃、フェイト・テスタツロッサは使い魔のアルフと共に、ビルの上に行った。

「少し前に見たあの子が持っていた宝石。間違いなくジュエルシード。アレがないと……。あの子は一体……」

アルフはフェイトの言葉で、あの時の少年を思い出し、憎憎しくうなる。

「すぐにも手に入れないと……。母さんのためにも……」

フェイトは眼下に広がる町を見渡す。アルフもその視線を追い、町を見る。そして自身の怒りを表すかのように大きく吠えた。

海鳴市に狼の遠吠えが響く。

そしてそれを、遠く離れた所から、大和流は見ていた。

「くはは、これぞ負け犬の遠吠えか？ 悔しかろう……。たかだか9歳の餓鬼に一杯食わされたのだからな。いや、あの狼は俺より年下か？ さてさて、フェイト・テスタツロッサ運命は狼を連れて本格的に動き出した。主人公たる高町なのはの運命や如何に」

フェイト達はビルから飛び降り、太陽が照らし出したばかりの町をいく。

流はその様子を見届けると、準備を整えるために屋敷へと帰っていった。

*

俺の名前は蒼峰流也。

こんなこと言つと正気を疑われるかもしれないが転生者をやっている。

俺が転生者になった経緯を簡単に説明すると・・・

新作の魔法少女リリカルなのはのゲームを買いに行く。

帰り道に信号無視して突っ込んできたトラックに跳ね飛ばされる。

神に会う。

俺の死は神のミスと言うことで、好きな能力を得ることと、好きな世界に転生させてもらえるという特典を得る。

俺は前世好きだった能力を授かる。

魔法少女リリカルなのはの世界に転生する。

自身のハーレムを築き上げるため、原作キャラの過酷な運命を変えるため、理由は様々だが結局は自身の野望のため奔走している。

と、何と言うか、どこかで聞いたことあるようなごく一般的な二次創作的経緯である。

ちなみに俺が授かった能力は上条当麻の『幻想殺し』だ。魔法という異能が基本のこの世界で、これほどの強みはない。そして俺はこの能力をうまく扱えうため、独自の体術も身につけた。

どうやら神曰く「他の転生者もこの世界に何人かいるようなので好き勝手やるなら注意しろ」ということだ。なので、俺はソイツ等に遅れを取らないようにこうして鍛えたのだ。そこらの魔導師や格闘

家なんぞには負けん。自身は大いにある。

そして、今日が原作の4話であることは、前にニユースでやっていた病院の謎の破壊後、巨大な木の発生の事件から分かっている。

俺は不運にも原作キャラ達と同じ学校になれなかった。だからニユースなどでしか原作の進み具合が分からないのである。

他にも転生者がいると分かっている以上、迂闊に動くことはできない。しかし、ここまでで原作に特に変化があるようには見られない。もし他に俺と同じ考えを持った転生者がいるなら、3話の木の事件は事前に防ごうとするだろう。あれは少なからずなのは心にダメージを与えているからな。

しかし、原作通り事件は起こった。これは他の奴等が干渉しないとやっているようなものだろう。では俺が動くまでだ。

場所は月村邸。ここで介入し、俺の存在を彼女達に覚えさせる。これで土台を作り、それから介入を続け、確実に原作キャラとの良い関係を築き上げる。これにより安全で、かつ確実に俺のハーレムは形成されるだろう。他の転生者とはできるだけ仲良くするようにし、本命の子がいるならばそいつは譲るといふ方針で行く。

無印で大きな介入が見られない以上、無印に登場するキャラに本命はいない、もしくは原作キャラそのものに興味がないと見ていいだろう。俺の本命はなのはとフェイトとアリサとすずか。まさしく無印の主要キャラ達なのだ。彼女達さえいれば後は別にいい。

さて、長々と語っている日は暮れてしまふ。そろそろ行くか。

*

私は今日、すずかちゃんのお家でお茶会をする予定です。

準備を済ませて、私の付き添いと言う大義名分の下、すずかちゃんのお姉さんの忍さんに会いに行くというお兄ちゃんに声をまけます。

「おまたせー！」

「じゃあ行くか。バスの時間ギリギリだぞ」

「はい、ユーノくん、おいで」

お姉ちゃんの腕に抱かれていたユーノくんを呼ぶ。ユーノくんは「キュッ」と可愛らしい声で返事をする。お姉ちゃんの腕から降りて私の肩に登ってくる。

「じゃ、行ってらっしゃーい」

お姉ちゃんが見送ってくれる。

「ああ」

「行って来ます！」

私とお兄ちゃんは、見送ってくれるお姉ちゃんに返事をする。家を出る。

そして、家の近くのバス停でバスを待つ。

少し待っているとバスが来たので、私達はそれに乗る。

バスの中には、私達と同じ行き先の人に乗っていた。

「おはよう、流くん！」

*

「おはよう、流くん！」

高町なのはが笑顔で俺に挨拶してくる。今日も元気一杯だなこの子は……。

「おはよう高町なのは」

とりあえず返さぬのは礼儀に反すので俺も挨拶をする。

「君が流君か。なのはから話は聞いてるよ。なのはの兄の恭也だ。よろしく」

「大和流です。恭也さん、よろしくお願いします」

この人が恭也さんか……。士郎さんと同じく隙がないな。全く……。恐ろしい一家だ。

「それと……。これがあのフェレットか。確か、ユーノ……。だったか？ よろしく」

俺はユーノに手を差し出す。ユーノはそれに答えるように「キュウ」と鳴き、俺の手に自身の手を乗せる。

こうして見ると賢い動物にしか見えないな。

「流くん、今日は楽しみだね」

「ああそうだな。しかし、俺が君達のお茶会に呼ばれるとは思ってもなかった」

今でもずっと気になっている。何故俺は彼女達のお茶会に呼ばれたのだろうか……。

「うん、ごめんね。流くんの予定も考えずに勝手に決めちゃって……。アリサちゃんも反省してたから……。」

「いや、どうせ暇だったからな。もし誘ってくれなかったら俺はこの休みを無駄に過ごすところであった。むしろ誘ってくれて感謝だ。」

「にゃはは、そう言ってくれると嬉しいよ。」

そう、そもそもこうなったのはアリサ・バニングスが前に学校で無理やり俺も来るように言ったからだ。

ちなみにその時の会話はこんな感じだ。

「こ、今度すずかの家でお茶会をするんだけど……ど、どうしても来たいって言うなら、あんたも来て構わないわ。」

「アリサ・バニングス、話が掴めない。いきなり何だ？」

「だ、だからすずかの家でお茶会をするから、あ、あんたも来なさいって言うてんのよ」

「ちょっと待て、さっきと言ってる事が微妙に違うぞ。命令形になっている。第一、当の月村すずかから了承を得ているのか？」

「う、うるさい！ つべこべ言わずにあんたも来なさい！ 今度の休みよ、分かった！？ 道が分からなかったらなのはに聞きなさい」

そう言うてアリサ・バニングスは足早に俺から離れていく。

「おい、待て……行ってしまった、一体なんだと言うのだ。月村すずかよ、本当に俺が行っても構わんのか？」

「うん、いいよ。というか、来てくれないとアリサちゃんがどうなるか怖いからね」

「流くん、道分かる？」

「いや……月村すずかの家は大きいと言うことは聞いてはいるが、

道は知らぬ」

本当は知っているかな。

「そう、なら私と一緒にいこうよ！ この時間のバスに乗ってね。私も後で乗るから」

「うむ、助かる」

）

こうして無理やり俺の月村邸行きは決まったのだ。

ある意味嬉しい誤算ではあるが、俺が2時間かけて考えた月村邸侵入方法が無駄になってしまった。

アリサ・バニングスめ、ユーノの時といい、サッカーの時といい、俺に何か恨みでもあるのか？

いや、彼女は俺の事情を知らない。恨みあつての行動ではないだろう。では何故だ。解せぬ……。

まあいい、アリサ・バニングスのおかげで容易に月村邸内部に入ることが出来る。高町なのはの監視も大分やりやすくなった。しかし、それによる弊害も少なからずある。

それは……刀を置いていかなければならないということだ。

理由は恭也さんにある。彼なら俺が竹刀袋で刀を隠していても簡単に見破ってしまい、高町なのはから遠ざけようとするだろう。だから帝様に持っていくと言われた。つまり……またあのイカレデバイスのお世話になると言うわけだ……。

俺は思わずため息を吐く。

「どうしたの流くん？ やっぱり迷惑だった？」

俺がため息を吐く姿を見た高町なのはが心配そうに俺を見てくる。

「い、いや、そんなことはない。昨日500円を落としてしまったな。それを思い出してしまったんだ」

「え？ 本当？ だったら警察に言わなきゃ」

「いや、500円程度警察に言ったところで相手にしてもらえないだろうよ。過ぎたことだし忘れることにするよ。気遣い感謝する」

「ううん、どういたしまして」

そうしてしばらくするとバスは停まり、俺達はバスを降りる。そして少し歩くと大きな西洋風の屋敷が見えた。

前にも少し見たことがあるが、改めてみると随分とでかいな。日本家の屋敷ほどではないが……。まあそこは多くの大人子供が住んでいるからな。当たり前か。

月村邸の門の前に着くと、高町なのはがインターホンを鳴らす。そして少し待つと、メイド服で身を包んだ綺麗な女性が俺達を出迎えてくれた。

「恭也様、なのはお嬢様。いらっしやいませ」

「ああ、お招きに預かったよ」

「こんにちは！」

そしてメイドさんは小さく会釈をすると俺の方を向く。

「あなたが流様ですね。すずかお嬢様から話は聞いております。私はこの屋敷のメイド長を勤めさせていただきます。ノエル、と申します。どうぞよろしく願います」

そしてノエルさんは深く頭を下げる。うむ、流石はメイド長か。見事な礼だ。次期とは言え、同じ使用人長となる俺もこれに負けないよう返さねばなるまいて。

「丁寧な挨拶感謝します。俺は向こうに見える山の上の日野一家で次期使用人長を任されています。大和流と申します。よろしくお願います。従者見習いとして、貴君の働き、勉強させて頂きます」

俺もノエルさんに負けなくらい深く頭を下げる。完璧な礼であると自負している。

「あの日野一家の、次期使用人長、ですか……。それでは私もお手本となるよう、精一杯務めさせていただきます」

俺とノエルさんはお互いに深く頭を下げた状態だ。そして、二人とも同じタイミングで頭を上げる。既に従者としての勝負は始まっているのだ。負けるわけにはいかない……。

「え？ 流くん、日野一家って？ ていうか、次期使用人長？ 一体どうということなの？」

高町なのは意味が分からないようであたふたしている。恭也さんは日野一家の事を一応知っているようで、少し驚いた顔をしている。

家は表向きじゃ市民に優しいヤクザとして有名だからな。子供の高町なのは知らずとも、恭也さんが知っていてもおかしくはない。

挨拶を終えると、俺達はノエルさんの案内に従い屋敷の中に入る。

しかし・・・何と言うか・・・猫屋敷、だな・・・。

お客様、右手をご覧ください、猫です。次は、左手をご覧ください、猫です。・・・そんな感じだ。

ノエルさんに案内された部屋に入ると、太陽の光が差し込むガラス張りの明るい部屋で、月村すずか、アリサ・バニングス、そして月村すずかの姉である月村忍さんが優雅に紅茶を飲んでいた。

俺達が部屋に入ると、彼女達はこちらに気付く。

「なのはちゃん、恭也さん、そして流くん」

「すずかちゃん！」

「こんにちはだ、月村すずか、アリサ・バニングス」

そして、月村すずかの隣で控えていたメイドが高町なのはに言う。

「なのはちゃん、いらっしやい」

ふむ、元気の良いメイドだな。そしてそのメイドは今度は俺の方を向く。

「君が流くんね。初めまして、すずかお嬢様の専属メイドのファリンです。よろしく」

ファリンさんは、先程のノエルさんと同じように深く頭を下げる。
・
・
が、未熟。ノエルさんに比べると幾分か劣る。

明るく元気なのは素晴らしい美点だが、従者に必要な優雅さはまだ足りない。

やはり、この月村家、好敵手はノエルさんと見た。いざ尋常に勝負
・
・
。

俺はノエルさんを見る。向こうもこちらの意図は分かっているようで、俺を見るノエルさんの目には勝負の火が灯っている。ふっ、一筋縄ではいかんな。

俺とノエルさんの間にはバチバチと電流が走っているようにも感じ
てしまう。

俺とノエルさんが目線のみで激しい攻防を繰り広げていると、月村忍さんが椅子から立ち上がり、恭也さんの方に歩み寄る。

「恭也、いらっしやい」

「ああ」

そして二人は見つめ合う。このような場で戦うことは無粋であるな。ここは一旦休戦と行こう。

俺とノエルさんは一時休戦することをアイコンタクトで伝え合う。そして、意識を互いに前へと戻す。

しかし、目の前で堂々といちゃつかれると何とも言えぬ気分になる。爆発しろ、とは言わぬが自重して欲しい。

「お茶をご用意致しましょう。何がよろしいですか？」

ノエルさんが恭也さんに問う。

ノエルさんや、感謝するぞ。この桃色の空間は俺にとって些か毒であつたからな。

恭也さんは月村忍さんからノエルさんに視線を移す。

「任せるよ」

「なのはお嬢様は？」

「私も、お任せします」

「かしこまりました。ファリン」

「はい、了解です。お姉様」

ファリンさんはノエルさんに敬礼しながら返事をする。ノエルさんの隣に向かう。

そして月村忍さんが恭也さんと自室に行くことをノエルさんに告げる。

ノエルさんはお茶を部屋に直接届けると言うと、ファリンさんと共に部屋を出る。そして恭也さんと月村忍さんも部屋を出て自室へと向かう。

高町なのはと俺は、椅子で寝ていた猫をどけて座る。

ふう、ようやく落ち着くことができた。

「相変わらず、すすかのお姉ちゃんとなのはのお兄ちゃんはラブラブだよねえ」

「うん」

「確かに。しかし、ああも堂々と見せ付けられると、少しは自重して欲しいと思う」

「あはは、でもお姉ちゃん、恭也さんと知り合ってからずっと幸せそうだよ」

「家のお兄ちゃんは・・・どうかな？でも昔に比べて、なんだか優しくなったかな。よく笑うようになったかも」

「そっか」

「それはそれは、良いことだ」

ふと、視線を下に向けると、ユーノが猫に目を付けられ、焦っているところだった。ふはは、余興か。

そんな感じで俺はユーノを眺め、一旦視線を戻すと、高町なのは達はなんだか真面目な雰囲気になっていた。

この俺が展開に追いついてない、だと・・・。不覚・・・ッ！

「流、あんたも最近ずっと何かを気にしてるようだけど、何かあったの？」

「え？ い、いや・・・特に何もないが・・・」

話を聞いてませんでしたなんて言えない。ここは誤魔化す。

「そう・・・あ、あんたも何か心配事があるようならいつでも話しなさいよ。た、助けになるかもしれないから・・・」

む？ ああ、そういう状況か。高町なのは最近の態度に違和感を感じ心配している、といった感じか。

しかし俺の事も勘付かれていたとはな・・・。アリサ・バニングスは結構人の態度の変化に敏感なんだな。他人に勘付かれているようでは俺もまだまだ未熟、ということか・・・。

「ふふふ、アリサちゃん、流くんのことにも気付くなんてすごいね。私全然分からなかったよ」

「私もなの」

「え、そ、そんなことないわよ！ よく見れば誰でもすぐ分かる」とよー！」

「そこまで俺を気遣ってくれていたとは……恐悦至極……」

「た、たいしたことないわよ……大げさね」

その時、ユーノの泣き声が部屋に響き渡った。

皆一斉にユーノの方を見ると、猫がユーノを追い掛け回していた。

「ユ、ユーノくん!？」

「アイン、駄目だよ!」

「ふはははは、よい余興だ！ 逃げる逃げる」

「そんなこと言ってる場合じゃないわよ！ 早く助けてあげないと」

しかし悪いことは連続して起こるものだ。

部屋にお茶とお茶請けを運んできたファリンさんが入って来たのである。

「はい、お待たせしました！ イチゴミルクティーとクリームチーズクッキーです！」

おい、なんだその組み合わせは。甘い菓子に対して甘い飲み物とはこれ如何に。

そしてユーノは原作通り、猫と共にファリンさんの足元でぐるぐると回っている。

ファリンさんはそれを避けようと、その場でくるくると回ってしまい、目を回している。そしてバランスを崩し倒れそうになる。高町なのはと月村すずかがギリギリでそれを受け止める。

俺は思わず拍手してしまった。そしてアリサ・バニングスに殴られてしまった。解せぬ。

.....

そして場所を外の庭へと移して俺たちはお茶会を続ける。庭には、室内よりも多くの猫がいた。

皆と会話しつつ、俺はその場にいる全ての猫の動きを刀閃圏で感じ取っていた。そして先程ユーノを追い掛け回していた猫が奥の森の方へと向かっていくのを感じた。

さらに刀閃圏を広げると、高い魔力を秘めた物質を感知した。間違いない、ジュエルシールドだ。

高町なのは目を向けると、硬直していた。どうやら彼女もジュエルシールドの魔力を感じたらしい。

ユーノが念話で高町なのはに呼びかける。高町なのははアリサ・バニングスと月村すずかを気にして上手く動けないようだ。

その時ユーノが走り出して森へと入っていった。高町なのはもユーノを探してくるといって森へと入っていった。

そしてしばらくすると、結界が張られるのを感じた。

くそ、結界の中は刀閃圏では感知できない……仕方ない、行くか。

「二人とも、やっぱり高町なのは一人では心配だ。俺も探してくる」

「え？ だったら私達も・・・」

「いや、不要だ。俺一人で問題ない」

「そう・・・だったらお願いね」

「応」

俺は森へと入っていく。

さて、まずは結界内に侵入しなければな。

「やっぱり・・・使わないといけないよなあ・・・仕方ない。
起動しろ！ 『カグツチ軻遇突智』！！」

「 声紋認証 『大和流』 と断定 『カグツチ軻遇突智』 起動します
」

そして光が俺を包み、バリアジャケットが展開される。軻遇突智も
籠手カントレットとなつて俺の右手に装着される。

起動を終えると、あの喧しい声が森に響く。

「ヒヤハハハハ！！！！ 天上天下唯我独尊軻遇突智様、参上つてな
あ！！！！！」

ああうるさい、煩い、五月蠅い。なんてうるさい奴だコイツは。

「喧しいぞ軻遇突智。もし森の外にいる二人に聞こえたらどうする」

「堅えこと言うなつてマスター！ バレちまったら解体バラしちまえば
いいんだよ！ 現代に蘇りし切り裂き魔ジャックつてなあ！！ ヒヤハハハ
！！！」

「やってみろ。二度と復活できないように木っ端微塵にすると
罰が貴様を待っているがな」

「じよ、冗談だつて・・・本気マジになんなよマスター」

「全く、この時間が惜しい。さて軻遇突智、この結界の中に入るぞ」

「玄関から堂々と？ 煙突からこそそと？」

「煙突からこそそとだ。赤色の服でなくて残念だがな。それに、赤は赤でもサンタクローズの赤じゃなくてルパン？世の赤ジャケットの赤だ」

「自らコソ泥って認めちまったよ！！ クールだねえマスター！！
そついうとこ最高だぜ！！！」

そして俺は軻遇突智を前にかざす、すると軻遇突智が光を発す。結界に干渉しているのだ。製作者（コソ）にばれない様にだから少し時間がかかる。

しばらくすると軻遇突智から光が消える。

「終わったぜマスター。侵入成功だ」

「こつ苦労。さて、状況は……は？」

俺は啞然とした。

前方に見えるのは高町なのはとフェイト・テストロッサ。ここまで
はいい。

だが……奴は何者だ？

そう、高町なのはとフェイト・テストロッサの間に謎の人物がいる。

「俺は蒼峰流也！ 君達の戦闘は無意味だ！ 今すぐやめろ！！」

十三話（後書き）

クリスマスイヴに私は執筆を休みましたが、私は誓って女などに現を抜かしていたわけではありません。

私は24日の9時から1時30分くらいまで、石鹼屋というバンドのネットラジオを聴いていました。

彼等を崇拜している私はこれを聴き逃すわけにはいかないので執筆を休ませていただきました。

これが私のイヴの過ごし方です。

何か、犯人取調べみたいだ・・・カツ丼プリーズ

十四話 多少グロイ表現があるので注意(前書き)

大分力を入れました。
いろいろと・・・。

十四話 多少グロイ表現があるので注意

俺は、神からもらったデバイスを起動して結界内に入ると、ちょうどなのはとフェイトが戦っている所だった。

ちなみにバリアジャケットは俺の右手には装着されていない。幻想殺しに触れて消滅してしまうからだ。

「俺は蒼峰流也！ 君達の戦闘は無意味だ！ 今すぐやめろ！！」

二人は俺の突然の登場に驚いたようで、少し固まっていた。

「にゃ！ い、いきなり何！？」

「新手の魔導師？」

下を見ると、ユーノとフェイトの攻撃を受けて倒れている巨大な猫がいる。

さて、まずはフェイトの説得といこう。

「フェイト！ 君は自分の母親に利用されているだけだ！」

「ッ！！！！・・・あなたに・・・母さんの何が分かる！！！」
フェイトは俺にデバイスを向ける。

ん？ 間違えたか？ 何故怒る？ このネタを出すのは少し早かったかな？

そんな事を考えているとフェイトは俺に砲撃を放ってきた。

俺は焦らず、右手を前に出し、幻想殺しで砲撃を無効化する。

「！？ 防御魔法も展開せずに止めた・・・？」

「俺に魔法による攻撃は無意味だ。さあ、戦闘をやめろ！ 俺は君の力になれる！」

その時だった。

横から大きな魔力反応を感じ、右手を出す。だが間に合わず俺は砲撃を喰らう。俺は数十メートルも吹っ飛ばされた。

「な、なんて威力だ・・・。転生者か？」

しかし砲撃が飛んできた方を見ても誰もいない。

俺がいきなり吹っ飛ばされるのを見て、なのはとフェイトも驚いている。

しかしフェイトはすぐに気を取り直し、完全にノーマークになっていた猫へと向かう。どうやらこの隙にジュエルシールドを封印して逃げるようだ。

「だがそうはいかない！」

俺も全速力でフェイトへと向かう。だがまた謎の砲撃が俺に向かって飛んできた。

「くっ！ 二度も喰らうか！」

俺は幻想殺しで無効化する。そして砲撃が飛んできた方を見ると、そこには右手に籠手ガントレットを付けて各部位に簡単な防具が装着されている黒衣を纏った魔導師がいた。

黒衣に着いているフードを目深に被っているので正体は分からない。だが、ここに現れるということは転生者であることは間違いない。

「誰だお前は！ 転生者か！」

「……………」

謎の魔導師は何も喋らない。

フェイトの方に向かっていているなのは見える。彼女もフェイトを止めようとしているようだ。

そして謎の魔導師はなのはに籠手を付けた右手を向け一言呟く。

「……………岩砕……………」

奴の前に小さな魔法陣が数個浮かび上がり、そこから砲撃が飛んでいく。

俺に喰らわせたのもあの技か……………。

砲撃はなのはに飛んでいく。なのはいきなり飛んできた砲撃に、防御が間に合わず撃墜される。

「なのはッ!！」

ユーノの音が響く。墜ちていくなのはをユーノが魔法陣を展開し衝撃を減らすように受け止める。

そして奴はフェイトの方に向かっていく。

フェイトは向かってくる奴をみて構える。

「敵……ッ！」

「……俺は味方だ……今はな……それより早くジュエルシードを回収しろ……手助けはしてやる……」

「……ありがとう。バルディッシュ」

[Sealing form・Setup]

バルディッシュが変形する。フェイトは変形したバルディッシュを猫に向ける。

「捕獲！」

そしてバルディッシュから砲撃が放たれる。砲撃は猫に直撃し猫からジュエルシードが出てくる。

アレを奪われるわけにはいかない……！

「させるか!!」

フェイトに突撃するが、その前に謎の魔導師が俺の前に現れ、籠手を向ける。

そして魔法陣が浮かび上がり、その中心に魔力が集まっていく。

しゅ、集束型の砲撃!? マズイ!!

「・・・お前は消える・・・破軍・・・」

砲撃が放たれる。俺は回避も防御も無効化も間に合わず直撃した。

圧倒的な威力に、俺はさつきよりも遠く吹っ飛ばされた。

さっと起き上がると、飛び去っていくフェイトと謎の魔導師が見えた。

「くっ! 逃がすか!」

俺は奴等を追いかけていった。

*

「……しつこいな……あの男……」

俺はフェイト・テストロッサと共に転生者から逃げていた。結界内から出たと言うのにまだ追ってくる。全く以ってしつこい。

「……仕方ない……おい、貴様……名前は？」

「……フェイト、フェイト・テストロッサ」

「……そうか……ではフェイト・テストロッサ……あのし

つこい男は俺が何とかする・・・貴様はその隙に逃げろ・・・それでお別れだ」

「・・・分かった。あなたの名前は？」

おっと、この状態の時の名前を考えていなかった。

当初の予定では俺は原作キャラの前に姿を見せることはない予定だったからな。無理もない。

さて・・・どうするか・・・そうだ。

「・・・俺は・・・カグツチ、とでも呼んでくれ・・・」

「・・・分かった。カグツチ、ありがとう」

そしてフェイト・テストロッサは速度を上げ、一気に俺から離れていく。

さて、次は奴か。

俺は振り返り、奴と対峙する。

「・・・しつこいやつだな・・・」

「逃げるお前が悪い。答える。お前は転生者か？」

「……いかにも」

まあ、ここは答えて問題ないだろう。名前は明かさんが。

「なら聞こう。……誰が本命だ？」

……は？

「……何を……言っている……？」

「だから、誰が本命かって聞いてるんだ」

「いや……何が言いたいのか……全然分からん……」

「だから、原作キャラの誰を狙っているのかって聞いているんだ。俺はできれば他の転生者と仲良くしたいと思っている。さっきの戦闘で分かったが、お前は強い。できれば敵にしたくない。だから誰を狙って介入したのか教えて欲しい。俺はソイツをお前に譲る」

・・・そうか・・・そういう事か・・・。

「・・・つまり・・・協力しよう・・・ということか？」

「そういうことだ。分かってくれて何よりだ。じゃあ早速誰を狙っているのか教えてくれ」

・・・コイツは・・・下衆だ・・・。

「・・・ここで話すのもなんだな・・・7時くらいに神社に来てくれないか？」

「神社？」

「・・・原作二話の舞台となった神社だ・・・分かるだろう？」

「ああ、そういうことか。確かにその場所は分かる。では7時にな

「・・・ああ・・・」

そして奴は去っていった。俺も早く戻らないとな。なのはを探しに行くって行って出てきたわけだしな。

「おいマスターよう」

「ん？ ああ、済まない軻遇突智。お前のことを忘れていた」

「全くだぜ……正体を隠すためとはいえ、喋るなつてのは……拷問だぜ」

「そう言うな。俺にとってはずっと黙っていてくれてもいいんだぞ」

「そりゃあんまりだ。そんなの俺じゃねえ。大体なんだよ、カグツチとでも呼んでくれ……って。俺の名前をそのまま偽名にすんじやねえよ」

「他に名前は思いつかなかったんだ。別にいいだろう？ どうせ彼女達の前に現れる時はお前は喋らないんだから」

「そうだけどよ、なんか複雑な気分だぜ」

「さて、お喋りもここまでだ。そろそろ戻らないといけないしな」

「・・・おいマスター。まさかあんなだけ俺を黙ったままにしておいて停止なんて言うんじゃないだろうな？」

「そのまさかだ。停止しろ、『軻遇突智』」

「おい冗談だろ！？ マスター！ テメエ・・・覚え・・・て・・・やが・・・
『軻遇突智』停止します」

「安心しろ軻遇突智。どうせまたすぐお前を起動することになるぞ」

さて、戻るか。

.....

月村邸の森に戻り、当初の目的通り高町なのはを探す。

しばらく歩くと、気絶している高町なのはを見つけた。その傍らにはユーノもいる。

冷静すぎるとユーノに怪しまれるので、慌てている演技をする。

「お、おい高町なのは！　しっかりしろ！　おい！」

高町なのはの頬を叩く。数回繰り返すと、ようやく高町なのは目が覚めた。

「……………う……………ん……………流、くん？」

「おお、無事か、高町なのは……………。一体何があったのだ？　ユーノを探しに行くと言って、森の中で寝ているとは……………」

「う、うん。ユーノくんが木の上において降りられなくなっていたみたいだったから、私が登って助けようとしたの。そしたら私が木から落ちちゃって気絶してたんだ」

なるほど、そういつ言い訳でいくのか。

「そうだったか・・・大丈夫か？ 頭とか痛くないか？」

「だ、大丈夫。特に問題はないよ・・・」

「そうか・・・無事でなによりだ。では戻るか。随分遅くなってしまったから月村すずかもアリサ・バニングスも心配しているだろう」

「そうだね。早く戻ろう」

そして俺達は二人の所に戻っていった。

.....

「あ、なのはちゃん、流くん！ 随分遅かったね、何かあった？」

そう聞いてくる月村すずかに高町なのはが先程俺に言ったことをそのまま言う。

「そうだったんだ……。なのはちゃん、怪我とかない？」

「だ、大丈夫だよ……」

「流、あんた気絶しているのはに変なことしてないわよね」

「無論。俺を外道と一緒にするな」

「とりあえず、二人とも無事でよかったよ。結構遅かったから私達も探しに行こうとしてたんだ」

「すまなかったな月村すずか。随分心配かけてしまった」

「ごめんねずかちゃん、アリサちゃん。私はもう大丈夫だから」

そしてお茶会は再開した。

そして数時間後、解散することになった。

アリサ・バニングスは迎えが来るまで月村邸に残っていると聞いた。
なので俺と高町なのはが先に帰る形になった。

ちなみに高町恭也はもう少し残るようで、俺が高町なのはを家に送っていくことになった。

延長戦か。自重して欲しいなバカップルめ……。

「じゃあね、なのはちゃん、流くん」

「また明日ね、なのは、流」

「じゃあねずかちゃん、アリサちゃん！」

「さらばだ月村ずか、アリサ・バニングス」

俺達は月村邸を後にする。

そしてバス停でバスを待つ。その間俺たちは他愛のない話をする。そうしてしばらくするとバスがやってきたので乗る。

そしてバスが高町なのは家の近くのバス停に停まり、俺達は降りる。そして高町なのは家に着き俺達も別れることになった。

「今日は楽しかったね」

「ああ、そうだな。今度からユーノがどこかに行つて、それを探しに行く時は俺にも声をかける。見つける度に気絶していたら敵わん」

「にははは・・・気をつけます・・・。じゃあね流くん、また明日」

「ああ、ではな高町なのは」

高町なのはは家に入っていく。

時刻は6時30分。約束の時刻は7時。後30分。

さて・・・殺るか。

「・・・起動しろ、『軻遇突智』」

「 声紋認証『大和流』と断定 、『カグツチ軻遇突智』起動します
」

軻遇突智が起動する。バリアジャケットが展開され、軻遇突智は俺の右手に装着される。

「・・・おい、どういふことだよマスター。一日で二度も起動するなんて初めてだぜ？」

「お前も聞いていただろ？ これから蒼峰流也に会いに行くんだよ。バリアジャケットを展開して行かなきゃバレるだろう」

「ああ、そういうことかよ。ところでよマスター、当然・・・殺るんだろ？」

「・・・無論だ」

「・・・ヒヤ、ヒヤハハハハハハ！！！！ すごくなくっちゃマスター！ 最近殺したりねえって思ってたんだよ！！ いやいいね！ 最高だよ！ 俺ああいう「自分は絶対に殺されない」なんてこと考えてそんな奴を殺すの大好きなんだよ！！」

「コイツ・・・忘れてないか？　ここが住宅街のど真ん中だったこと・・・。」

「どうやら辺りに人はいないようだけど、このままだとまずいな。とりあえず飛ぶか。」

「マスター！　どういう殺し方でいくんだい？」

「そつだな・・・ああいうのにはやっぱりアレかな・・・？」

「おお、アレか。俺もそれがいいと思ってたんだよ」

そして俺達は同時に叫ぶ。

「「斬首の刑！」」

*

俺は謎の魔導師が言った神社に、約束どおり7時に来ていた。

「なんだ、アイツはまだ来てないのか」

自分で呼びつけておいて遅刻とは・・・いやここは我慢だ。アイツと俺では実力差が大きいということは既に証明されている。俺のハームを築くためにも奴とは手を組んでおいた方がいい。大丈夫、奴は必ずこの話に乗る。

しかし、10分待っても奴は現れない。もう太陽は沈み、辺りは暗くなっている。神社を照らしているのは数本の外灯だけだった。

「まさか・・・乗らないと言う事か？ いや、まさかな」

その時、神社を照らしていた外灯が消えた。

「な、なんだ？」

突然の暗闇に俺は焦る。

そして辺りを見回していると、突然神社に歌が響きだした。

かゝごゝめ かゝごゝめ

「い、一体なんだ？」

よゝあゝけゝのゝびゝんゝにゝ

「おい！ 頼むからこんな悪ぶぢけはやめてくれー！」

つゝるとかゝめがすゝべったあ

「おい！ 聞いているのか！！？？」

いじつひのじつひ

「え？」

「「だあゝあれ？」」

歌が最後だけ俺の後ろから聞こえた。

振り向こうとしたが、動けない。

視界が傾く。世界が傾く。

そして俺が最後に見たのは……。

俺が……首がなくなって血が噴水のように溢れている俺の体
を見ているという……不思議な光景だった。

*

「全く、こんな奴の名前に俺の名前と同じ字が使われているなんて・・・反吐が出る」

俺は転がっている蒼峰流也の頭部を踏み潰す。

それによって脳味噌が辺りに飛び散る。全く・・・性根が汚い奴は死してなお汚い。

「しかしよお・・・マスターも中々エグいこと考えるよなあ。流石の俺もここまでやるとは思わなかったぜ」

「ふん、ああいうのはむかつくんだよ」

昔の俺を見ているようでな・・・。

「あの蒼峰って奴も可愛そうだねえ・・・恐怖を感じたまま死んでいくなんてよお・・・我がマスターながらゾクゾクするぜ！！やっぱ最高だよマスター！！！！」

「ふん、そう褒めるな」

「ところでマスター。この死体ミユはどうするんだ。仮にもここは神社だぜ？ 神の御前で死体ミユ晒したまま帰るのかよ」

「そうだな。しかし困ったことがあるんだ・・・」

「なんだよ、処理法か？ だったら全部燃やしちまえばいいじゃないかよ！」

「いや・・・ゴミは分別しなきゃいかんだろう・・・燃えるゴミと燃えないゴミの区別が難しいんだ。骨って何に分類されるんだ？」

「・・・あゝ、考えたこともなかった・・・とりあえず・・・ゴミ袋に詰めようぜ？」

「そうだな・・・」

そして俺は死体ミユを袋に詰める。

そして神社を後にした。

さて・・・ジョネスさん辺りに聞いてみるか。

十四話 多少グロイ表現があるので注意（後書き）

かごめかごめを平仮名で書いたのは、その方がより皆様の恐怖感に刺激を与えられると感じたからです。

多少読み辛いですが、そこは我慢してください。

十五話（前書き）

まずは原作5話の日常パートです。

十五話

流の言う原作の4話が終了した。

4話の日は色々と驚きの連続だった。

流が月村すずかの家で開かれた子供達だけのお茶会に参加した。そこまでは良かった。しかし、6時50分くらいにバリアジャケットを纏ったまま帰ってきたかと思ったら、刀だけ持ってまたすぐ出て行った。

僕達は流の謎の行動に首を傾げていた。しかし7時30分にまた帰ってきた。今度は随分と真つ赤なゴミ袋を持って。

どうやら別の転生者が現れたらしく、そいつは原作にもこの国にも必要のないただの犯罪者予備軍だったようで、流が独断で処理したようだ。

・・・確かに、直属親衛隊級の者は独断での処理が許されてる。処理法も別に決めてはいない。だけど、わざわざゴミ袋に入れて持って帰ってくることはないだろう。

しかしこれはさしたる問題じゃあない。本当の問題はこの後だ。

日本家では直属親衛隊とその隊長、そして当主は同じ時間、同じ間で食事をする決まりだ。流の帰宅が遅いので少し遅れたが、僕達は流が帰宅後夕食を食べていた。

その時、突然流が親衛隊三番級のジョネスに「ジョネスさん、人体

のゴミの分別に困ってるんですが、骨とかはどれに分類されるんですか？」と聞いたのだ。食事時にいきなりそんな言葉が聞こえてきたものだから、流とジョネスを除いた全員は各々口に入れていたものを吹き出してしまった。

にも関わらずジョネスは冷静に「そりゃ燃えるゴミだろうな。ちよつと今食卓に出ているこの鶏肉の骨も燃えるゴミとして処理されるからな」と言った。

まさか今食卓に出ている食べ物で例えられるとは思ってもなかった。おかげでこの場にいる流とジョネスを除いた全員からこの鶏肉を食べる気を根こそぎ掻っ攫っていった。

その後ジョネスは「どうした皆、急に箸を止めて。飯が冷めるぞ？」と言ったものだからさあ大変。

流以外の全員がジョネスに『韋駄天』で詰め寄り、一発ずつ殴った。無論、僕もだ。

何の警戒もせず、いきなり、そして同時に直属親衛隊の奴等、暁文、父上、そして僕の拳を喰らったジョネスは中庭まで吹っ飛んでいった。廊下や中庭から「な、何じゃあ!？」、「て、敵襲!？」、「ジョネスさん!？」、しつかりしてください!！」と言う声が聞こえてくる。そんな仲間思いの彼等に、僕達は「よい、捨て置け」と言う。

圧倒的に立場が上の僕達にそんなことを言われたら捨て置かざるを得ない。ジョネスの周りにいた日本兵や使用人達は一斉にそれぞれの仕事に戻る。ちなみに夕食を食べ終えた親衛隊の数人は去り際に倒れているジョネスに近寄り、蹴りを入れている。その他の追い討ちもあって、結局この後数時間、ジョネスは中庭で気絶していた。

ちなみにその次の日の燃えるゴミのゴミ収集車に流が転生者の死体が入ったゴミ袋を詰め込んでるのを見て、僕は彼の脳天に手加減して『墮天』を叩き込んだ。そのまま気絶した彼を引きずり、ゴミ袋とともに回収した。「どうせ燃やすんだから家で燃やせ」という僕の意見で、日本家の屋敷の中庭で燃やした。

改心してからの流は完璧主義者のようになっていて、少し完璧の方向性が違う気がする。我が部下ながら心配である。

さて、明日はとうとう5話。

流が言うには、海鳴温泉の近くで戦闘が行われるらしい。転生者が介入してきたことによりこれまで以上に原作が狂うかもしれない。だから僕は流に原作通りの結果にするためなら積極的に介入していくことを許可した。本当は何もないのが一番だけど……。

しかし、それ以上の問題が、流をどうやってそこまで連れて行くか、ということである。

海鳴温泉はここから大分離れている。といっても、僕達が本気で走ったら10分で着く距離ではあるけど、事前に向こうにいた方が介入は容易だしタイピングも計りやすい。慰安旅行と言うことで数人と共に向かわせるのも悪くない。

いや、大きな問題がまだあった。高町士郎、恭也の存在だ。彼等がいては警戒されてしまう恐れがある。

さて……どうしようか……。

*

俺は帝様と共にどうやって5話に介入するかを話していた。

しかし、その時俺の携帯電話がなった。画面にはアリサ・バニングスと表示されている。

この忙しい時に一体なんだ・・・。

俺は帝様に断りをいれ、電話に出る。

「何用か、アリサ・バニングス。生憎だが俺は今忙しい。できればまた後にかけ直して欲しいのだが？」

『すぐにすむから大丈夫よ。あんたって、日野っていうヤクザの屋敷に住んでるのよね?』

「いかにも。俺は日野一家の次期使用人長として屋敷で住み込みで修行している」

そういう設定だ。でなきゃ怪しまれるからな。この情報は委員長も知っている。それだけ一般的な情報なのだ。まあ情報操作によるものだが……。

『そう、わかったわ。じゃあ今からそっちに向かうから』

「は? おい、何を言っている。何故君が屋敷に来るのだ。君は今日、高町なのは、月村すずか、及びその家族と共に温泉に行くと学校で言っていたではないか。この屋敷は海鳴温泉とは反対だぞ。何故だ、おい」

『つべこべ言わない! いいから待ってなさい!』

電話が切れた。

解せぬ……。

「どうしたんだい、流。一体何があつたんだい？」

「は、すみません帝様。どうやら、アリサ・バニングスがこの屋敷に向かっていると言うことで……」

「ほう、アリサ・バニングスが……。一体何故？」

「それが……。俺にも分からぬのです」

「ふむ、もしま……くっ、くはははは」

「どうしました帝様？ いきなり笑い出して……」

「いやいや、僕の予想が正しければ、随分と楽しくなると思ってね」

「は？ 仰る意味がよく分からないのですが……」

「まあ、待つてなよ。全てはアリサという子がくれれば分かることさ」

それから数分後、交代で門に立っている使用人の一人が間に入ってきた。

「流様、アリサ・バニングスという女の子がお見えになっていますが」

「ああ、分かった、今行く」

そして俺は使用人に案内され、門へと向かう。

屋敷の門の横には、小屋があり、そこは応接間となっている。屋敷の中を見られるわけにはいかないもので、一般の来客の際にはこの部屋に通すという風になっているのだ。

中に入ると、アリサ・バニングスとその横に控えている男の姿があった。恐らく執事だろう。

アリサ・バニングスは優雅に紅茶を飲んでいる。俺が部屋が近づくと、こちらに気付きカップを置いた。

「おはよう、アリサ・バニングス」

「おはよう、流。あんたって結構凄いとこに住んでるのね。私はヤクザのお屋敷ってもっと怖いところを想像してたわ」

「君のその想像はあながち間違いとも言えん。こんな部屋が設置されているのはこの一家くらいだ」

「そうなの？ まあいいわ。それより流、急いで泊まりの準備をして」

「は？ いきなりなんだ。泊まり？ 何の話だ」

「あんたも知ってるでしょ？ これから皆で温泉に行くのよ。当然あんたもよ」

何だこの展開は。もしかしてまたアリサ・バニングスに無理やり連れて行かれるというパターンか？

甘いな、もうその手には乗らん。

「おいおい、初耳だぞ。そういうことは事前に伝えておいてくれ」

「伝えたらあんたは来るの？」

「一概にそうとは言えぬ」

「だったらどつちも一緒じゃない。いいから早く準備しなさい」

「まあ待て。お誘い頂き真に光栄なのだが、俺にも屋敷の仕事というものがあつてだな。こつ無理やりでは俺のスケジュール上問題が発生するのだ」

「え？ そうなの？」

よし、後一押しだ。

「ああそつだ。だから事前に伝えておいてくれたら俺も予定を空けることができたかもしれない。残念だが、諦めてくれないか？」

「そ、そんな・・・」

アリサ・バニングスの目が潤む。今にも泣き出しそつだ。

おい、ちよつと待つてくれ。何でそんな顔をする。俺か？ 俺が悪いのか？ 仕方ないだろう！ 俺の言い分は間違つてはいない！ 実際に俺にも屋敷での仕事はある。これまでは仕方なく父さんに断りをいれていたのだ。これ以上父さんに迷惑はかけられない。

だが、神は常に女の子の味方のようだ。

「待ちなよ流」

帝様がいつの間にか部屋に入ってきている。全く気付かなかった。アリサ・バニングスも、その執事も全く気付かなかったように目を見開いている。

「確か、アリサ・バニングス、だったね？」

「はい、そうですけど・・・あなたは？」

「僕は日野帝。この日野一家の若頭っていう立場になるのかな。ちなみにその流の直属の上司っていう立場でもある。いつも流がお世話になってるようで」

帝様は恭しく礼をする。

「あ、い、いえ、こちらこそ」

アリサ・バニングスも慌てて礼を返す。

「ほ、本当!？」

「うむ。ほら、さつさとその紅茶を飲んでしまえ。それを飲み終わったら早速出発だ」

「う、うん!」

アリサ・バニングスはすっかり冷めてしまった紅茶を一気に飲み干すと立ち上がった。

「じゃあ行くわよ流! 大分遅れたけど、まだまだ時間に余裕はあるわ!」

「急に元気になったな……。ところで、どこで待ち合わせなんだ?」

「なのはの家よ。多分すずかももう行ってると思う」

「む、彼女達を待たすのは悪いな。遅れた原因である俺が言つのもなんだが、急ぐか」

「当然！」

そしてアリサ・バニングスは一足早く車に向かう。俺はその前に帝様に聞く事がある。

「帝様、まさかとは思いますが・・・今回も刀は」

「無論、なしだ」

やっぱりか……。俺はサヨナラ負けした甲子園のピッチャーのように、その場がっくりと膝をつく。

「・・・・・・・・てことは・・・まさか・・・」

「そのまさかだよ、ほら」

帝様は俺に宝石を渡してくる。確認するまでもない・・・軋遇突智だ。つまりまたコイツだけを使うと言うわけだ・・・。

「帝様、ぶっちゃけてもう限界です。刀を持っていかせてください、斬らせてください、殺させてください」

「段々物騒になっていったよ。君、そんな性格だったか？ 転生者を殺したことで変な性癖に目覚めてないだろうね……。それに前に刀を使っただろう？ それで十分じゃないか」

「十分なものですか。もっと斬りたいのです。そりゃあもう粉になるくらい」

「……軼遇突智を持たせたのは失敗だったかな？ 思考が段々彼よりになっていっている気がする……」

「俺をあの快樂殺人鬼な人格のイカレデバイスと一緒にされるのは心外です。俺はまだまだ正常です」

「正常な人間は殺したいなんて言わないさ。そもそも死体をゴミ収集車に詰めるような人間が正常なものかよ」

「それは違います帝様。アレはそもそも人と同列に扱うものではありません。あのような下衆には燃えるゴミと共に回収されるという末路がお似合いなのです」

「まあ、処理法は独断でいいと言った僕にも非はあるし、この件は不問としよう。実際にアレはこの国において害でしかなさそうだっ

たしね。だけど次からは僕にも一言言っておけ」

「御意。では帝様、アリサ・バニングスを待たせていますのでこれにて御免」

「ああ、行ってらっしゃい。気をつけてね」

俺は応接間を出て、下山用の長い階段を駆け降りる。下では既にアリサ・バニングスが車に乗って待っていた。

「あ！ 遅いわよ流！ 早く乗りなさい！」

「ああ、すまないアリサ・バニングス。それでは失礼する」

俺は車のドアを開けようとする。だが、俺が開ける前に執事がドアを開けてくれる。

むむ、この執事・・・できる。

俺は敬意と若干の敵意を持って執事を見る。執事もまた俺を睨み返す。

ふふふ、奴もまたノエルさんと同じく従者の血が流れているということか・・・面白い。

「何二人で睨みあってんのよ。時間がないんだからさっさと乗りなさい。鮫島も一体どうしたのよ」

「失礼しました、アリサお嬢様。しかしこの少年、中々面白いですな。将来が楽しみです」

「お褒めに預かり恐悦至極。名前を伺ってもよろしいか？」

「鮫島、と申します。バニングス家の執事兼専属運転手を勤めております。ところで君の名前も教えてくれないか？」

「無論。俺は日野一家の次期使用人長を任されている、大和流と申す。鮫島殿、貴方とは良き友になれそうだ」

俺は手を差し出す。彼とはぜひ仲良くなりたい。

鮫島殿も微笑み、握手をする。

「何やってんのよ二人共、早く行くわよ」

「はい、それでは出発いたします。流殿、この続きはこの旅行が終

わってからでな」

「うむ、心得た」

そして俺は車に乗る。奴ほどの従者はノエルさんを除いて父さんくらいしか他にはいないだろう。

全くこの地にはつくづく面白い事が絶えない。こういった意味でも転生して良かったと思える。

車は出発する。目的地は翠屋。既に月村すずか、高町なのは、及びその二人の家族は到着しているらしい。

さて、この5話、無事に終わってくれればいいが……。

.....

状況は一気に飛び、現在は海鳴温泉に向かうため、車に乗っている最中だ。

俺は高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングスが搭乗している車に乗っている。原作では3人が座っていた後ろの席だったが、俺が入って4人となっている。流石に少し窮屈だ。

彼女達との会話の合間に高町なのはを見ているが、なにやら思いつめた表情をしている。ユーノが念話で彼女を励ましているから少しはマシになってはいるが、それでも親友である月村すずか、アリサ・バニングスの目は誤魔化せんだろう。

全く、利口過ぎるといふのも考え物だな。全部一人で背負い込もうとしてしまう。何とかしてやりたいが、原作の進行上、余計な動きはできない。悔しいが、しばらくは静観だな。

そして、車は海鳴温泉に到着する。緑も多く、素晴らしいところだ。さて、諸君。ここは温泉である。温泉なのである。ということは分かるだろう。

あの真面目で無垢な少年が……淫獣と呼ばれる由縁となった場所であるということ……！

その火蓋を切ったのは我等が主人公、高町なのである。

「じゃあユーノくんも温泉入ろっか!」

「キコ？」

そして高町なのははユーノを連れ、婦人の湯と書かれた暖簾をくぐる。

ようやく自分の状態に気付いたユーノは助けを求めるように鳴く。だが時既に遅し。奴はもう立派な犯罪者予備軍だ。

獣に化け、数多の女子の柔肌を覗こうとするとは不届き千万。本来ならこの場で切って捨てるが、ここは抑えておこう。

女性陣が女湯への暖簾をくぐっていく中、アリサ・バニングスは足を止め俺の方を向く。

「あれ？ な、流、あんたはそっちに入るの？」

アリサ・バニングスが俺に問うてくる。

一体何を言っているのだこの子は……。

「……………何を言っているアリサ・バニングス。男が男湯に入るのは当たり前のことであるっ」

「でも、10歳未満の子供は女湯に入っていて書いてあるわよ……」

アリサ・バニングスが顔を赤らめながら壁を指差す。そこには貼紙があつて、今アリサ・バニングスが言った事が書かれていた。

「い、いや、こういうのは保護者がいない場合の話だろう。生憎だが、この場には恭也さんもいる。第一、男の俺と一緒にいては入り辛いだろう。折角のお誘いだが、ここは遠慮しておく」

「そ、そう……私は別に気にしないけど……」

アリサ・バニングスがなにやら言っているが敢えて無視する。これ以上はマズイと思い俺は男湯に避難する。アリサ・バニングスめ……最近奴の奇行に拍車がかかってきている。俺が何かしたか？もしそうなら謝っておかねばならんが、心当たりがない……。

解せぬ……。

そして時は過ぎ、ここは男湯。俺は恭也さんと共に温泉に浸かっていた。

「ふう、いい湯だな」

「ええ、素晴らしい湯加減です」

俺達は互いに無口であるが故に会話は弾まぬ。だが、この素晴らしい湯の中で騒ぎ立てるのは無粋。俺達はそれを理解しているからこそ敢えて会話しないのである。

だが、恭也さんは俺の肉体に刻まれたいくつかの傷を見て、沈黙を解いた。

「しかし、流君。君、凄いたくさんの傷があるな。一体どうしたんだい？」

「俺は日野一家の修行の際に付いた傷ですよ。そういつ恭也さんだつて体にたくさん傷がついているじゃないですか」

「ああ、これか。これは剣術の修行でついた傷だ」

「へえ、随分過酷な修行ですね」

「君もな」

なんだろう。彼とはどこか分かり合える気がする。会話の数こそ少ないが、それで十分だ。十分奴の意思は伝わってくる。

これが高町家か……つくづく恐ろしい一家だ。

そんなこんなで俺達の温泉での時間は過ぎていった。

十五話（後書き）

次が戦闘パートとなる予定です。

本当は一話でまとめたいんですけど、そうすると時間が足りないのです。

ちなみにこの作品で出て来る他の転生者は基本的に使い捨てです。前回みたいな死に方も多くやります。その方が私的には面白いので。

十六話

俺と恭也さんは、それからいろいろ話して、30分ほど経ってから風呂を出た。

どうやら女性陣はまだ上がってないようだ。恭也さんは一足先に部屋に戻つてると言い、去っていく。俺は高町なのは達を待つために牛乳瓶を片手に温泉の前の自販機の側で待機していた。

それから約10分、ようやく高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングスが浴衣を着て出てきた。アリサ・バニングスの手にはユーノがいる。のぼせたのか羞恥によるものかは知らんが、随分くたびれているようだ。一緒に入っていた月村忍さんと高町美由希さんはまだ入っているらしい。

やれやれ、女性と言うのは随分と長風呂だな。のぼせないのだろうか……。

そして、牛乳瓶を片手に待機していた俺に気付いた三人が駆け寄り寄ってくる。

「流くんはもう上がってたんだ。もしかして待っていてくれた？」

「いや、俺が出たのは約10分前だ。ここで牛乳を飲みながらゆつくり休んでいたら君達が出てきたのだ。さて、ちょうど牛乳も飲み終えたし、行くか？」

「うん、そうだね」

俺達は4人で旅館の中を探検することにした。子供の内は何故か旅館とかホテルの中を探検したくなる。やはり自分の家でない所というのが物珍しいのだろうか。

一通り回った俺達は、縁側を歩きながら次は何をするかを考えていた。

最初に意見を出したのは月村すずかだ。

「ねえ、温泉で汗流したし、卓球しない？」

「えー、卓球？」

不満の声を上げるのは高町なのはだ。

「うーん、私さあ、ちょっとお土産見たかったんだけどなあ」

第二の意見を飛ばすのはアリサ・バニングス。

「卓球、うむ、素晴らしいな。俺も一度でいいから温泉旅館で温泉から上がった後に卓球と言つある種の定番を体験してみたかったのだ」

賛成意見を飛ばすのはこの俺だ。

「うん、私もこういつのあまりやったことないからね。ちょっと楽しみだったんだ」

「ほう、分かっているではないか月村すずか。君とは気が合いそうだ」

「うん、ありがとう」

「あ、ああそういえば私もなんか妙に温泉後の卓球ってやってみたかったのよね！ 流もなの？ へえ、奇遇ね」

「ほう、アリサ・バニングス。君も中々分かっているではないか」

ちなみに俺達が話している後ろで高町なのはは「私、卓球はちょっと・・・」など、不満を言っている。しかしこの二人には聞こえていない。

既に状況は卓球の方に傾いている。今更高町なのは一人の抵抗では逆転はできないだろう。大人しく我等と苦を共にしようじゃないか。その時だ。

前方に奇妙な気配と若干の魔力を感じ、視線をそっちに向ける。

そこにはグラマラスな女性が立っていた。しかしこの気配に覚えがある。原作の情報を思い出し、この人物の正体が分かった。

フェイト・テストロッサの使い魔のアルフだ。そういえば人間状態の姿は妙に美人だったな。興味はないが……。

しかし随分好戦的な表情だ。今にも飛び掛ってきそうだ。確か原作ではアルフは高町なのは達に酔っ払いのように絡んでくるのだったな。

「ハア、おチビちゃん達」

アルフが俺達に話しかけてくる。いきなり知らない女性に話しかけられた三人は戸惑っている。

俺でも流石にいきなり知らない人に慣れ慣れしく声をかけられたら、不審者と勘違いして斬ってしまうかもしれない。

そしてアルフは俺達を一通り見ると、狙いを定めたように高町なのはに近づく。俺はアルフが何か妙な動きを見せたらいつでも殴り飛ばせるようにしておく。

「ふんふん、君かね。家の子をアレしてくれちゃってるのは」

そして高町なのはにずっと顔を近づける。

文章にしてみたら、随分頭の悪そうな物言いだと改めて思う。

ぶつちやけ何を言いたいのかが掴めない。事情を知っている俺でなければコイツはただの馬鹿にしか見えないう。ふはは、からかい甲斐があるわ。

「あんま賢そうでも強そうでもないし・・・ただのガキンチョに見えるんだけどなあ」

アルフはさらに高町なのはに顔を近づける。高町なのはも困惑して後ずさる。そんな高町なのはとアルフの間にアリサ・バニングスが割り込む。

アリサ・バニングスは敵意を込めてアルフを睨んでいる。

「なのは、お知り合い？」

「う、う、う」

「・・・この子、あなたを知らないそうですが、どちら様ですか？」

ふむ、随分勇敢だな。真に良い友だ。

アルフは少し退いて、面白そうにアリサ・バニングスと高町なのはを見ている。随分鬱陶しいな。

さて、俺も助太刀もとい遊んでやるか。

俺は圧倒的な殺気を込めてアルフを睨む。

「ひっ！！？？」

とても驚愕した目で辺りを見回す。そして殺気の発生源である俺に目を付けると、精一杯睨み返してくる。

ふはは、怯えた狼の睨みなど春風ほどにも感じぬわ。自然界の厳しさを学んでから出直してくることだ。

アルフは俺の殺気だけで圧倒的な実力差を悟ったのか、無意識に後ずさっている。そんなアルフの急な態度の変わりように、見ていた三人は首を傾げている。

無論だ。殺気はアルフのみに一直線に放っている。他の者には何も感じぬ。

「い、ごめんごめん。人違いだったかな、知ってる子に良く似てたからな」

「あ、なんだ・・・そうだったんですか」

謝ってくれたことで高町なのはも安堵したようだ。しかしアリサ・バニングスは不満なようで、未だにアルフを睨みつけている。

俺も一旦殺気を解く。このまま遊んでもいいが、さっきからアルフが怯えた目でチラチラとこっちを伺っているので鬱陶しい。

殺気が消えたことで安心したアルフは、先程の強気な態度で高町なのはに近づく。

「アツハツハ、可愛いフェレットだね！」

アルフがユーノに手を伸ばし、撫でる。

「よしよし、撫で撫で〜」

高町なのはも笑顔になっている。

その時頭の中に声が響いた。これは念話か。この周囲に放っている

ようだ。

高町なのはとユーノは突然の念話に驚いている。対するアルフは好戦的な目で高町なのはとユーノを見ている。

コイツは高町なのはとユーノしか聞こえないと思っっているようだ。まあいいむしろ好都合だ。盗聴の手間が省ける。

『今のところは挨拶だけね。忠告しとくよ、子供は良い子にしてお家で遊んでなさいね。おいたが過ぎるとガブツといくわよ』

高町なのははいきなりの脅しに困惑している。

「さーて、もう一風呂行ってこよーっと」

そしてアルフは去っていく。

おいおい、忠告するのは何も貴様だけではないのだぞ。

アリサ・バニングスがアルフに対して憤慨している。高町なのはと月村すずかがアリサ・バニングスを宥めている。

今ならできるな。

縁側を去ろうとしているアルフが見える。奴に向かって念話をする。

『何一人で悦に入ってるのだ、狼？』

「!！」

アルフが辺りを見渡している。俺が先程よりは抑えながら殺気を放つとアルフはこちらに気付いた。

『ようやく気付いたか。獣にしては随分と無防備ではないか』

『その呼び方・・・あんたが前にジュエルシードを持っていった奴だね』

『いかにも。それが分かったところでどうすると言っただけ？』

『もちろん今すぐにも奪うだけだよ！』

アルフがこちらに突撃してきそうな気配を見せる。

ふん、血気盛んなところは獣のそれだな。

『・・・・・・・・・・3472回だ』

『……なんだって?』

『3472回だと言っているのだ』

『……何の回数だい、それは』

『貴様がそこから俺に突撃してくるまでに、俺が貴様を殺せる回数だ』

『!?!?』

『分かるか? 貴様と俺では圧倒的な差がある。未熟な高町なのはと比べたら、貴様は強い。狼と猫の差だ。だが俺と貴様では話が違う。俺と比べたら貴様なぞ蟻のようなものだ』

『……随分なめたこと言ってくれるじゃないか』

『事実だ。だが安心しろ、俺は貴様等の邪魔はしないさ。少なくとも今はな』

『だったらあんたが持っていったジュエルシードを渡しな』

『それは無理だ。アレは捨てたからな』

『す、すす捨てたあ！？ あ、あんた何考えてんだい！？ 仮にもアレはロストログアだよ！？』

『安心しろよ。人目にはつかん場所に隠してある。無論、貴様等にも見つけることはできん。ではな、俺はそろそろ行かせてもらう。貴様のご主人様にもよろしく言っておいてくれ』

『・・・あんた、一体何者なんだい？』

『秘密だ。貴様も俺の顔を忘れるよ。覚えておいても不幸しか身に降りかからないぞ。貴様のご主人様には・・・カグツチ、とでも伝えておいてくれ』

『カグツチ・・・その名前、忘れないよ』

そしてアルフは去っていった。

くくく、やっぱりああいうのは面白いから大好きだ。実に面白い。

奴等に正体がバレたかもしれないな。まあ結果的に原作通りの展開になればいい。そのためにもこれからはガンガン介入していく。

さて、俺もそろそろ行くか。アリサ・バニングスの機嫌も治まって
いるようだし。

「ほら流！ さっさと行くわよ！ ……全く、あの酔っ払い。本
ツ当に迷惑なんだから……」

前言撤回、全然治まってない。

そんなこんなで俺達の温泉の昼は過ぎていった。

……

時刻は深夜2時。俺は大きな魔力反応を感じて目が覚めた。しかし起きていることを悟られないようにする。

なぜなら高町なのはも目を覚ましたからだ。高町なのはは布団を出て、着替えている。それが済むと、ユーノを肩に乗せ部屋からこっそりと出て行った。

数分時間を空けて俺も部屋から出て行く。旅館の外に出ると、さつきより濃密な魔力を感じる。間違いなくジュエルシードの魔力。原作通り、ジュエルシードが発動しているのだろう。

刀閃圏を半径1キロメートルで展開する。巨大な力の胎動、ジュエルシードだ。その付近に2つの反応、1つは人間、もう1つは魔力による生命体。フェイト・テスタロッサとアルフ。

それに向かって走っている2つの生命、高町なのはとユーノ。距離は約700、十分に間に合う。

俺はポケットに手をつ込み、中から停止状態の軻遇突智を取り出す。

「起動しろ！ 『軻遇突智』！！」

「 声紋認証『大和流』と断定 『カグツチ 軻遇突智』 起動します

」

バリアジャケットが展開され、軻遇突智がガントレット籠手となって右手に装着

される。

起動完了だ。

「ヒヤハハハ！！ 丑三つ時たあ気が利いてるぜ！！ まさしく俺に相応しい時間帯じゃあねえかよ！！！」

「そうだな、これ以上ないくらい相応しい。だが今回の俺はカゲツチだ。俺が良いと言つまで喋るなよ」

「……ああ、そんなこつたるうと思つてたよ……はいはい分かりましたよ、黙つてりゃいいんでしょクソマスター」

「ああ、その通りだイカレデバイス」

「地獄に堕ちろ」

互いに向けて全く同じ言葉が発せられる。相変わらずコイツとは変な所で気が合う。

さて、俺も行くか。転生者へんせい者のが来ないといいけど……。

俺はいつも通りフードを目深に被り、飛び上がる。魔力は極力バレ

ないようにしてある。深夜で暗闇だから、バリアジャケットのデザインのおかげもあって見られることはまずない。

とりあえず、近くで待機してよう。

.....

時は過、今は高町なのはとフェイト・テストロッサの一騎打ちの終盤。

高町なのははあくまで話し合いで解決しようとしている。素晴らしい平和的考えだ。甘いと思われるかもしれないが、戦わないに越したことはない。

しかしフェイト・テストロッサはそれを一蹴。まあ事情は人それぞれだからな。あちらはあちらで正しいことを言っている。些か血気盛んな気もするがな。

さて、状況はフェイト・テストロッサが優勢。無理もない、高町なのは才能こそあれど、魔法に触れて一ヶ月も経ってない。これで訓練を積んだ相手に勝てというのは酷だろう。しかし奴は奴で善戦している。ここまでやれたら十分だろう。

そして二人は空中で距離を取る。砲撃の勝負か。

「Thunder Smasher」

「Divine Buster」

フェイト・テストロッサのバルディッシュからは電気を帯びた黄金色の砲撃が。

高町なのはのレイジングハートからは高い魔力をこめた桃色の砲撃が。

二人の砲撃がぶつかり合う。そして拮抗状態となった。

「レイジングハート、お願い！」

「All right」

高町なのはの指示で、ディバインバスターに高い魔力が追加される。

桃色の砲撃は拮抗状態に終止符を打ち、黄金色を呑み込む。

高町なのはは砲撃を止める。普通なら勝ったと思うだろう。

「・・・だが・・・甘い・・・」

フェイト・テストロッサはディバインバスターが自身の砲撃を上回ると悟ってから、すぐさま上に飛んでいた。

高町なのはは奴に気付いていない。完全に緊張を解いている。勝負あったな。

「なのはあー!!」

ユーノの叫び声が響く。奴も気づいたのだろう。

「Scythe Slash」

バルディッシュから黄金色の刃が出る。その名の通り鎌の形状となったのだ。

高町なのはも奇襲に気付いたがもう遅い。

既にフェイト・テストロッサは高町なのはの首元に黄金色の刃を添えている。少しでも動けば確実に斬られる。

「Pull out」

レイジングハートからジュエルシールドは放出される。主人を守るための行動だろう。流石はインテリジェントデバイス、素晴らしい。本来インテリジェントデバイスとこうあるべきだ。断じて主人をクソ呼ばわりしたり、殺人を促すようなイカれたものではない。

「レイジングハート！ 何を！？」

「きつと、主人思いのいい子なんだ」

フェイト・テストロッサは放出されたジュエルシールドを取ろうとする。

ふう、どうやら特に問題もなく終わったようだ………ん？

刀閃圏内に侵入してきた生命体、すごい速さで向かってくる。この方向は……高町なのは達の所。

「……軻遇突智」

「お察しの通りだぜ。魔力量はSSS。バリアジャケットも随分派手なもんだ。そしてここに現れた。間違いねえ、転生者だ」

「……折角仕事しなくて済むと思ったのにな」

「ヒヤハハ！！ 諦めて仕事しな！！ 既に殺傷設定にしてあるぜ！！ いつでも殺れるぜ！！！！」

はあ、全く、変な所で気が利いてるなコイツは……。

さて………殺るか………。

*

俺の名前は紅羽刃。俺は俗に言う転生者という奴だ。

前世で色々あって自殺した。そして神に会い、チート能力をもらってなのはの世界に送ってもらった。大分端折ったが、こんな感じだ。我ながら随分都合のいい人生だと思う。

なのはの世界に転生したはいいが、俺は主人公の高町なのはと同じ学校になれなかったのだ。だから原作がどこまで進んだのか全く分からなかったが、ニュースで得た情報を元に考えた結果、今日は原作5話、つまり海鳴温泉でなのはとフェイトが戦う日だということが分かった。

それが分かってからは後は簡単だった。俺の家には親がないので、深夜に家を出るのは容易だったし、空を飛んでいたから警察に補導される心配もない。そして地図で確認しながら海鳴温泉へと向かう。

近づくと、濃密な魔力反応を感じ、間違いなくここだと当たりを付けた。

状況を遠くから見てみると、なのはがフェイトに負けて、ジュエルシードを渡しているところだ。ここで俺がそれを止めてフェイトを退ければなのはの中の俺の株は急上昇するだろう。何を隠そう、俺はなのはが本命なのだ。

見たところ他に転生者はいないようだし、全速力で突撃する。そして、到着した。とりあえず高らかに名乗りを上げようと思う。その方がカッコいいからな。

しかし俺はまだ気付いていなかった。

浮かれていたせいだろう。

そのせいで、頭上に迫っていた死の気配に気付くことができなかった。

*

俺は動きを止めた転生者の頭上に一瞬で移動する。転生者の脳天に軋遇突智を添え、逆立ちのような体勢になっている。

奴は気づいてすらいない。哀れだな高町なのは達に気付かれることなく終わるとは。

とても悲しいだろうな、でも………最高に楽しいよ、俺は。

そんな悲しい君は俺が一瞬で葬ってしんぜよう。

「破軍」

「え？」

軋遇突智から放たれる圧倒的魔力の集束砲撃。油断していて勝てるような技ではない。砲撃を止めると、そこには何もなかった。最初から何もなかったように、跡形もなく転生者は消滅した。

「な、何!？」

「なんて魔力量……」

「……あれは、カグツチ？」

「カグツチ？ ってことはアイツが!」

おっと、こんな砲撃を撃ったせいかな、彼女達に気付かれました。

さて、どうしよう。

そう思っていると高町なのはが俺に呼びかけてきた。

「あなたは、カグツチ、くん？ 確か、前にジュエルシードが暴走したときに、町を助けてくれてたよね？」

「……………」

「あ、あの……………」

「……………いかにも……………」

「あ、やっぱり！あの時はありがとう！」

「……………礼には……………及ばぬ……………」

「カグツチ」

「……………フェイト・テストロッサ……………また会ったな」

「うん、また手助けしに来てくれたの？」

「……否……俺は誰の味方でもない……必要とあらば……その娘の助けにもなる……今日は……中立だ……」

「……そう……」

む、どこか悲しそうだな。味方と想ってくれてたのかな。

「また、会ったね。カグツチって呼べばいいのかい？」

「……然り……お喋りをしている暇は俺にはない……用事も済んだ……俺は退く」

「あ！　こら待ちな！」

「……バリアロード……」

俺の前に無数の魔法陣が道のように浮かび上がる。俺は跳び上がり、真上にある魔法陣を蹴る。その勢いで次の魔法陣に飛び移り、また蹴る。これを繰り返す。

バリアロードとは俺が独自に生み出した移動方法だ。俺は元々防衛魔法が得意だった。だからそれを応用して、足場を作る魔法を作っ

た。普通のそれを無数に同時に出し、飛び移りながら移動するといふものになった。

しかし、普通に足場を作る魔法に必要な魔力量では俺が蹴った瞬間に壊れてしまう。だから通常の10倍の魔力を込めているのだ。魔力チートの俺だからできる力技だ。それに日本家で鍛え上げた身体能力も合わさって、その速度は最低で新幹線にも匹敵するほどになった。

俺はこのバリアードを使い、圧倒的速度で撤退する。フェイト・テストロツサとアルフは途中まで追いかけてきたようだが、追いつくなど到底無理な話だ。奴等には決定的に速さが足りない。

そして確実に撒いたことを確認すると、地上に降りて『韋駄天』を連続使用し、高町なのはより早く旅館に戻る。

案の定、俺の目論見は成功した。

ふはは、完璧だ。

十六話（後書き）

原作の5話が終了しました。

今回の転生者は能力すら出せずに終わりました。
悲惨ですね。

私はとても楽しく書いていましたが。

十七話（前書き）

やっと原作の6話だ。
長いな・・・。

十七話

「いい加減にしなさいよ!!」

机を叩き、アリサが吠える。

現在は昼休み。全ての生徒は各々昼食を取り、それが済んだ後はそれぞれのコミュニケーションで固まって教室で談笑したり、校庭や体育館で運動に励んだりする時間だ。

大和流は前者の一人だ。彼は高町なのはの監視も含め、教室で昼食を取り、その後彼女達を視界から外さないようにして、友人の二階堂佐久間と連休中に何をしていたかを話し合っていた。

その時、いきなり高町なのは、月村すずかと共に談笑していたはずのアリサ・バニングスが高町なのはに向かって怒りだしたのだ。

突然教室内に響いたアリサの叫びに、クラスは静かになり、誰もがそちらに目を向ける。流と佐久間も会話を一時止め、そちらに目を向けていた。

「こないだから何話しても上の空でボーっとして……!!」

「い、ごめんね、アリサちゃん……」

「ごめんじゃない！ 私達と話してるのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもボーっとしてなさいよ！ ……行くよすずか」

そしてアリサは教室から去って行く。

「アリサちゃん……あ、なのはちゃん」

すずかはなのは心配そうに見る。しかしなのはは笑顔になる。明らかに無理して作った笑顔だと分かる。

「いいよ、すずかちゃん……今は、なのはが悪かったから……」

「そんなことないと思うけど、とりあえずアリサちゃんも言いすぎだよ……少し話してくるね」

「うん……ごめんね」

そしてすずかも走って教室から出て行く。

その一部始終を見ていた生徒は、これを忘れて談笑を再開する者、この喧嘩の行方を面白そうに話す者、三人を心配する者と言った風

に別れた。

「おいおい、いつも仲良かったあの三人が突然喧嘩とは……」

「……うむ、珍しいこともあるものだ」

原因を知っている流からすれば少し見ていて良いものではないだろう。彼の顔は少し悲痛に歪んでいた。

佐久間は出て行ったアリサの方と座っているなのはの方を見ながら話を続ける。

「そういえば流、お前あの三人とよく一緒にいただろ。何か知らないのか？」

「……いや、よく分からん。ただ、最近高町なのはが妙に上の空であったり、浮かない顔をしていることは多々あった」

「ふーん、何かあったのかねえ。あの三人が喧嘩するなんてよつぱどのことだからな。1年2年の頃からいつも一緒だったしな、なんつーかちよつと心配だな」

「ああ、確かに心配だな。仕方ない少し行ってくるか」

「行ってくるってお前、どこに・・・って、流？」

佐久間が流の方に目を向けると、そこには誰もいなかった。最初から誰もいなかったかのよう。

「行ったのか？ なんだかんだで友達思いの奴だからな。ま、なんとかなるだろ」

なんだかんだでこの男も大和流についてよく分かっている男だった。

.....

「アリサちゃん！　アリサちゃん！！」

アリサを呼ぶすずかの声が廊下に響く。階段でアリサは立ち止まり、すずかもようやくアリサに追いついた。

「アリサちゃん！」

「・・・何よ？」

「何で怒ってるのかなんとなく分かるけど、駄目だよ、あんまり怒っちゃ」

「だってムカつくわ！　悩んでるの見え見えじゃない、迷ってるの、困ってるの見え見えじゃない！　なのに・・・なんと聞いても私達には何も教えてくれない。悩んでも迷ってもいないって嘘じゃん！」

「どんなに仲良しの友達でも言えないことはあるよ。なのはちゃんに秘密にしたい事だったら、私達は待っててあげるしかできないんじゃないかな・・・？」

「だからそれがムカつくの！　少しは役に立ってあげたいのよ！　・・・どんな事だっていいんだから、何にもできないかもしれないけど、少なくとも一緒に悩んであげられるじゃない」

アリサの想いを聞き、すずかは笑顔になる。

「やっぱりアリサちゃんも、なのはちゃんの事好きなんだよね？」

「そんなの当たり前じゃないの！」

それを聞き、すずかはさらに笑顔になる。アリサは何もなのはを嫌ったのではないということに嬉しくなる。好きであるが故に、親友であるが故になのはの態度は頭に来るのだということだ。

「いやいや……好きであるが故の、親友であるが故の怒り、実に美しい……」

突然階段の踊り場から声が聞こえて、驚いたアリサとすずかはそちらをサツと見る。

二人は階段の上の方と下の方で話し合っていた、階段の踊り場に行くには、必ずアリサかすずかのどちらかの後ろを通らなければならない。それにも関わらず二人のどちらも気付かずに踊り場に人が現れたのだ。驚くのも無理はない。

そして、その人物とは、二人もよく知る大和流だった。

「な、流！？ い、いつからそこに・・・」

「ここに現れたのは今だ。だが君達の話の一部始終は別のところで聞いていた」

「・・・なんでそんなことしたのよ」

「無論、心配だったからだ。クラスの何人もが君達の事を心配している。普段はいつも一緒にいて喧嘩をしているところなど見たこともないような三人が突然教室で喧嘩したのだ。心配にもなるだろうさ」

「だから、気になって様子を見に来たってわけ？」

「然り、まあ余計な心配だったようだがな。それと高町なのはにっいては、いずれ彼女自身の口から話してくれる日が来るさ」

「・・・もしかしてあんた、なのはが何してるか知ってるの？」

「さあな、それは分からぬ事だ」

「よく分からない答えね、つまり知ってるって事なの？」

「さあな、俺が知っている高町なのは行動があのような状態を引き起こしたのかは分からないということだ。もしそうなら、彼女は君達に事情を話さないのではなく、話せないのだ」

「……どういふこと？」

「言葉の通りだ。君達は彼女の無事を祈ってやってくれ、そしてできれば仲直りしてやってくれ。彼女にとって君達と普通に談笑し遊ぶことが何よりの癒しなのだ」

「……分かったわ。行きましょすずか」

「う、うん。……流くん、心配してくれてありがとう」

「礼には及ばぬ。では俺も教室に戻るとしよう」

アリサとすずかは階段を登っていく。どうやら屋上に行くようだ。

流は問題ないと確信し、教室へと戻った。

*

放課後、高町なのは何時もの面子ではなく、一人で下校していた。

俺はそれを遠くから監視していた。

「・・・あまり良い気分ではないな、明らかに落ち込んでいる人間を監視するというのは・・・」

「でもよ、それが仕事だろ？ 相手のコンディションなんかお構いなしに仕事すんのがプロフェッショナルってもんだぜ」

俺は特に戦闘でもなく、刀もあるのに軻遇突智を起動させていた。だがバリアジャケットは展開せず、AIだけを起動させていた。

無性に誰かと話したい気分だったのだ。成る程、こういう時にインテリジェントデバイスというのは非常に便利だ。まあコイツだからっていうのもあるか。

なんだかんだで俺は使い慣れたコイツに愛着が湧いていた。

「なんだかんだで俺も甘いということか……。さて、今日は原作の6話、結界内で起こる事件だから町には特に被害はないだろう。問題は転生者、前々回、前回と二回連続で現れた。今回も現れると仮定しておいたほうがいいだろう」

「ヒヤハハ！ 結界内なら全力で暴れても問題ねえからな、出てきたらそんなときは派手に殺してやろうぜ！！！」

「無論、そのつもりだ。奴等に慈悲は与えんさ。まともな奴なら話は別だが……」

高町なのはは直接家に帰らず、寄り道して家に帰るようだ。誰にも今の顔を見られたくないらしい。

たい焼きを購入し、海が見える公園のベンチに座り、海を眺めている。その姿からは何とも言えない哀愁が漂っていた。

既に時刻は17時を回り、空は夕暮れ独特の赤色に染まっている。しばらくすると高町なのははベンチから立ち上がり、公園を出る。ようやく帰宅するようだ。

そして無事帰宅した高町なのはは10分程経つと着替えて家から出てきた。肩にはユーノが乗っている。ジュエルシードの散策を開始することにしたらしい。

市街地を歩き回る、成果は一向に見られないようだ。

時刻は18時を回り、空は暗闇に染まっていつている。

「逢魔時あつまがときを迎えた。不吉だな、そろそろ何かが起こりそうな予感がする」

「ヒヤハハ、妖怪や幽霊よりおつかない奴が何言ってるんだよ。ビビってる何て柄じゃねえぜ。何が出てこようと俺らにや勝てねえよ」

「キレた帝様でもか？」

「そんなんが出てきてたまるかよ。仮に出てきたら全力で逃げるしかねえな。まあ逃げ切れる気もしねえけど」

「だろうな」

監視を続けながらも俺達は他愛のない話を続ける。

やがて時刻は19時を迎えた。空は既に暗闇で、街灯や店の明かり、そして車のライトが市内を照らしていた。

高町なのはは未だに散策を続けていた。既にほとんどの子供は家に帰り夕食を食べている時刻だろう。大変熱心な事である。

その時だ。大きな魔力の流れを感じる。

「刀閃圈！！」

半径3キロメートル、この町のほとんどはこれで感知できる。魔力流の発生源は……見つけた！西に300メートルのビルの上。何だ、全然近いじゃないか、頑張つて損した。

刀閃圈の範囲を半径500メートルに縮める。広域結界が張られるのを感じる、恐らくユーノだろう。これで遠慮なく動ける。

「軼遇突智、バリアジャケットを展開しろ」

「合点承知！」

俺の体を光が覆い、光はバリアジャケットとなる。そして軻遇突智は籠手ガントレットとなって右手に装着される。

展開を完全に終えると、俺はフードを被る。

「さて、しばらくは様子見かな。今のところ転生者が現れる気配はないし。全く、面倒だから現れて欲しくないな」

「って言っても実はちょっと現れて欲しいと思ってたりするだろ？」

「ほう、何故そう思う」

「さっきから刀持ちながらその辺キョロキョロしてるだろ？ あん時のマスター、斬りたくて仕方ないって面だったぜ」

「よく見てたじゃないか。だって久しぶりに刀を持って出撃だぞ。最近魔法ばかりだったから斬りたくてうずうずしてたんだよ」

「………テメエ、俺の事散々イカレデバイスって言うてるがよ、テメエも相当イカれてるぜ」

「ふはは、そうかもな。最近そうなんじゃないかって思ってきた」

「ヒヤハハ！ 潔いねマスター！！ やっぱテメエは最高だよヒヤハハハハ！！！！！！」

「おっと、お喋りはここまでだ軻遇突智」

高町なのはとフェイト・テストロツサがジュエルシードに砲撃を放つ。二人で同時に封印を行うようだ。

「リリカルマジカル！」

「ジュエルシード、シリアル??！」

「「封印!!」」

そしてジュエルシードの封印が終わる。高町なのははデバイスを通常の形態に戻し、ジュエルシードに近づく。

「やった、なのは、早く確保を！」

ユーノがなのはを急かす、だがそう上手くは行かないようだ。

「そつはさせるかい!!」

上空から狼状態のアルフが高町なのはとユーノに襲い掛かる。だがユーノが跳躍し、高町なのはの前に出て、防御魔法を展開した。防御魔法に遮られ、アルフの攻撃は二人に届かない。アルフは横に跳び、地面を滑るように着地する。

防御魔法が解けると、高町なのはの目の前にはフェイト・テストロツサがいた。

「こないだは自己紹介できなかったけど、私なのは！ 高町なのは！ 私立聖祥大附属小学校3年生」

高町なのはやはり対話を試みるようだ。だがフェイト・テストロツサはそれを無視し、バルディツシュを構える。

「Scythe form」

バルディツシュから黄金色の刃が出る。高町なのはもレイジングハートを構える。

先に動いたのはフェイト・テストロツサだ。鎌の形状になっているバルディツシュを振りかぶり、斬りかかってくる。

「Flier fin」

レイジングハートが飛行魔法を発動し、高町なのはは空に飛び上がる。

その時だ。大きな力の動きを感じた。これは……ジュエルシードから？ ジュエルシードが……鼓動している。

確かに原作では二人の攻撃の衝撃でジュエルシードが暴走し、フェイト・テストロッサは手に酷い怪我を負っていた。

この時から既に暴走の一端は始まっていたと言う事か。二人ともそれに気付くことなくぶつかりあっている。

原作通りの展開である以上俺は動けない。仕方ない、観戦するか。

それにしても二人とも中々凄い戦いを繰り広げている。とても9歳とは思えない。

フェイト・テストロッサが高速移動で高町なのはの後ろを取った。

「Flash Move」

しかしフェイト・テストロッサが攻撃する前にフラッシュムーブを使い、高町なのはがフェイト・テストロッサの後ろに移動する。

「Divine Shooter」

レイジングハートから砲撃が放たれる。しかしフェイト・テストロツサは焦る素振りを見せない。とても冷静にバルディッシュを構える。

「Defencer」

フェイト・テストロツサの前に防御魔法が展開される。高町なのはのデバイスシューターは防がれる。

そして二人は互いにデバイスを向け合う。

その時、またジュエルシールドの鼓動を感じた。さつきよりも大きい。暴走は近いか……。

二人はまだ気付かない。

「フェイトちゃん！」

高町なのはの声が響く。突然名前を呼ばれたフェイト・テストロツサは一瞬戸惑う。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど・・・。だけど話さないと、言葉にしないと伝わらない事もきつとあるよ!」

フェイト・テスタロッサは戸惑っている。高町なのはは言葉を続ける。

「ぶつかりあつたり、競い合う事になるのは、それは仕方ないのかもしれないけど・・・。だけど何も分からないままぶつかり合うのは、私嫌だ!」

フェイト・テスタロッサは動けない。完全に高町なのはの話の聞き入っている、そして戸惑っている。このまま行けば話し合いも通じらるだろう。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノくんの探し物だから・・・。ジュエルシードを見つけたのはユーノくんで、ユーノくんがそれを元通りに集め直さないといけないから、私はそのお手伝いで! だけど、お手伝いをするようになったのは偶然だったけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めてる! 自分の暮らしてる町や自分の周りの人たちに危険が降りかかったらいやだから!」

高町なのはは自身の想いをぶつける。俺も思わず聞き入ってしまう。

「これが・・・私の理由！」

「わ、私は」

フェイト・テストロッサは高町なのはの想いに心を動かされたのか、自身の理由を告げようとする。

あれ？ 何か忘れてないか？ 確か原作ではここで邪魔が入っていた気が・・・。

「フェイト！ 答えなくていい！！」

そくだ・・・この狼だ・・・あつはっはっは、石ころじやなくて鋼を腹に詰めて井戸に放り込んでくれようか・・・。

「優しくしてくれる人達のところで、ぬくぬく甘ったれて暮らしてるようなガキンチョになんか何も教えなくていい！！ あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！！」

フェイト・テストロッサはアルフの言葉で目的を思い出し、バルデイッシュを構える。

あゝあ、折角いいところだったのに・・・。

二人はジュエルシードに向かって飛んでいく。

む？ またジュエルシードの鼓動を感じる。おいおい、このままじゃ二人が・・・ッ！！

ジュエルシードは鼓動を続けている。まずいな・・・。だが、これは原作通り、介入はできない・・・。

その時、二人より速くジュエルシードに向かって飛んでくる魔力を感知した。

咄嗟にその方を向く。魔力は矢の形状をしている、そしてその矢はジュエルシードに直撃した。

ジュエルシードの鼓動が止まった。これは・・・まさか

「刀閃圈！！」

半径5キロメートル、いない、7キロメートル、まだいない、10キロメートル・・・いた！！

10キロメートル先に弓を構えている魔導師、弓は恐らくデバイスだろう、刀閃圈から感知できる情報を統合、この能力は・・・衛宮士郎と一致。

間違いない、転生者だ。

「ク、クク、アツハツハツハツハ！！！！ 感謝するぞ転生者！
貴様の行動のおかげで、彼女達は傷つかずに済んだ！ 原作が少し
変わったのは仕事上許せないが、個人的には良い結果だぞ。ご苦労
もう死ね」

そして俺は刀を腰に当て、居合いの構えを取る。転生者はもう一撃
放つ気なのだろう、新しい矢を生成し構えている。だがもう手遅れ
だ、刀があるなら、貴様が矢を放つまでに、俺は貴様を・・・一万
回以上斬れる。

「久しぶりだな、10キロ先の相手を斬るのは 『陽炎』！
！！」

手応えあり、奴は粉状になって風に吹かれて飛んでいった。

「アツハツハツハ！！！！ この手応え、久しぶりの感触だ！ やは
り愛刀が一番だな！！」

「おい落ち着けてマスター・・・おかしくねえ？ 普通立場逆だ
ろ？ 何で俺がマスター宥めてんだよ・・・」

高町なのはとフェイト・テストロツサは何が起こったのか分かって
いない。いきなり矢が飛んできてジュエルシードが沈黙化されたの
だ。無理もない。

ところが高町なのはに襲い掛かる影があった。アルフだ。

「フェイト！今のうちにジュエルシードを！」

「ッ！うん、分かったアルフ」

気を取り直したフェイト・テストロッサはジュエルシードを確保し、撤退していく。そしてアルフも高町なのはから離れ、フェイト・テストロッサを追って撤退していく。

成る程、暴走しないところなるのか……。しかし、暴走を感知して時空管理局は動くわけだから……。どうなるんだろうな。

もしかして、大分原作変わるのか？ そうならないといいが……。

さて、結果は見届けた。俺も帰ろう。

十七話（後書き）

キャラ崩壊しているのが他でもない流という結果に私自身驚いてお
ります。

なんとかして軌道修正しないと・・・。

来期アニメのAnotherが楽しみです。

綾辻行人さんの小説のアニメ化ということで期待に胸を膨らませお
ります。

私はあの人の作品は「十角館の殺人」しか読んだことはありません
が、とても面白かったので楽しみであります。

私はこれから数日間、執筆を休ませていただきます。

流石に大晦日やお正月は親戚一同で集まったりと忙しいのです。

もし私の作品を楽しみにしてらっしゃる方がいるのでしたら、誠
に申し訳ございません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9683y/>

全ては国のため

2011年12月30日00時50分発行